

とものつくる

気候 × アート のものがたり

Shinshu Arts-Climate Camp Document Book 2023-2024



とものつくる 気候 × アート のものがたり  
Shinshu Arts-Climate Camp  
Document Book 2023-2024

---





# Shinshu Arts-Climate Camp とは

Shinshu Arts-Climate Camp / 信州アーツ・クライメート・キャンプは、文化芸術の視点から気候変動や地球環境の課題を見つめ、信州・長野県において行われている取組や取り組み人と学び、共に考え、変化していくコモンスペースをつくっていかうというプロジェクトです。

このプロジェクトの発端にあったのは、長野県の文化施策の方針を示す長野県文化芸術振興計画の検討でした。有識者懇談会において気候変動・気候危機の話題が提起され、最終的に第2次長野県文化芸術振興計画(令和5～9年度)に、環境分野への文化芸術の活用として明記されることとなりました。

脱炭素社会や循環型社会の実現に向けて、県民の意識醸成・行動変容を促進するためには、文化芸術がもつ創造性や人をつなげる力、アーティストのチャレンジ精神や発信力などが大きな推進力となります。アートを活用した発信や、県立文化施設による取組の実施、信州アーツカウンシルを中心とした関係団体との連携・協働により、持続可能な

社会づくりに向けて文化芸術の力を生かしていきます。  
(第2次長野県文化芸術振興計画、23頁)

長野県は、2019(令和元)年、全国の都道府県に先駆けて、「気候非常事態宣言」を発しました。人々の暮らしが自然とともにある信州において、異常気象や気候変動は、災害の危険そのものであると共に、農業をはじめ日常生活を支える産業や文化にも強い影響を与えるものとなります。県内各地域に住む文化芸術活動の担い手が、気候変動/気候危機/脱炭素といった主題について考え、循環型で文化的な暮らしの創造に取り組むことが、地域における脱炭素・循環型社会の実現に向け、重要な推進力となることは間違いありません。

信州アーツカウンシルでは、多様な主

体と連携・協働して文化芸術活動を支援する環境づくりに取り組んでいます。そうした中で、信州大学人文学部の皆様に信州アーツ・クライメート・キャンプの構想をお伝えしたところ、課題を共有するパートナーとして、連携・協働して事業にあたっただけのこととなりました。未来の地域社会にとって避けることができない課題において、地域アーツカウンシルと大学の新たな連携の試みを始めることができたのは、この取組の意義の1つだと感じています。この課題に関して何か行動している人、しようと考えている人は、誰でも信州アーツ・クライメート・キャンプの参加者になれます。規模の大小を問わず、参加者の皆さんが開く集い、表現や学びあいの場、1つ1つが、信州アーツ・クライメート・キャン



## About Shinshu Arts-Climate Camp

「キャンプ」の1つ1つだと捉えています。夜空の星を繋ぎ、星座を描くように、広い信州の其処此処で営まれる「キャンプ」の「報告」を交わしあい、人とアイデアがネットワークをかたちづくる。また、そうして繋がりあう人々が問いを共有し、互いに学びを深めるため「会議」を行う。どのように、環境と関わりながら、文化、芸術はあるのか、あるべきなのか。持続可能な社会のために、わたしたちにできること、わたしたちがすべきことは何なのか。山と川、住まい、自然と深く関わりながら日々暮らす、信州・長野県からのアート・アクションとして、日本全国、世界との交信を図っていく活動が、信州アーツ・クライメート・キャンプです。

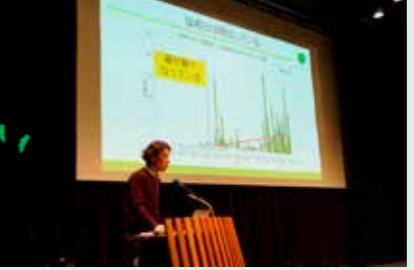


photo by Marehito Antoku



The Shinshu Arts-Climate Camp is an ongoing project that looks at the climate crisis and global environmental issues from the perspective of culture and the arts. It learns from the initiatives and people working on green issues in Shinshu and Nagano Prefecture seeking to create a common space for change and action. In 2019, Nagano Prefecture issued a "Declaration of Climate Emergency" ahead of all prefectures in Japan. The Second Nagano Prefecture Culture and Arts Promotion Plan (FY2023-27), which outlines Nagano Prefecture's cultural policy, clearly states the relevance of culture and arts to the environmental crisis. The Shinshu Arts Council decided to hold the Shinshu Arts Climate Camp in collaboration with the Faculty of Humanities of Shinshu University as a partner in sharing issues in our efforts to create an environment that

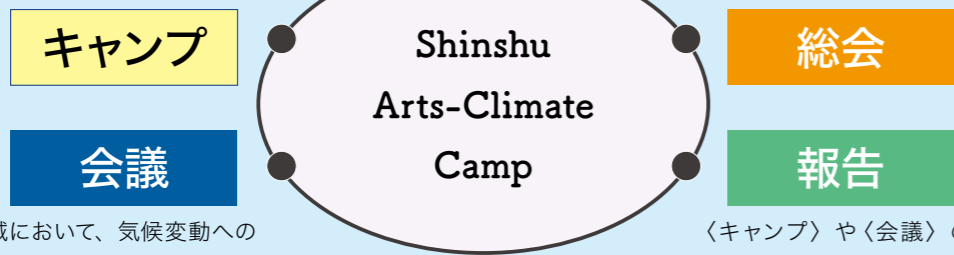
supports cultural and artistic activities. Anyone who is doing something about this issue, or thinking of doing something about it, can become a participant in the Shinshu Arts Climate Camp. Like connecting the stars in the night sky and drawing constellations, we plan to report on activities here and there in the vast Shinshu region and form a network of people and ideas. How can the arts relate to our current environmental predicament? What can we do and what should we do to create a just and sustainable society? The Shinshu Arts Climate Camp is an art action from Nagano Prefecture, where people live between mountains and rivers and are deeply involved with nature on a daily basis, to communicate with the rest of Japan and the world.



### 信州アーツ・クライメート・キャンプの4つの要素

長野県内で自主的・自発的に行われている気候変動や環境へのアクションを〈キャンプ〉と位置づけ、活動内容や実践者を紹介。既にある取組、人とアイデアを発掘し、ネットワークを繋いでいく。

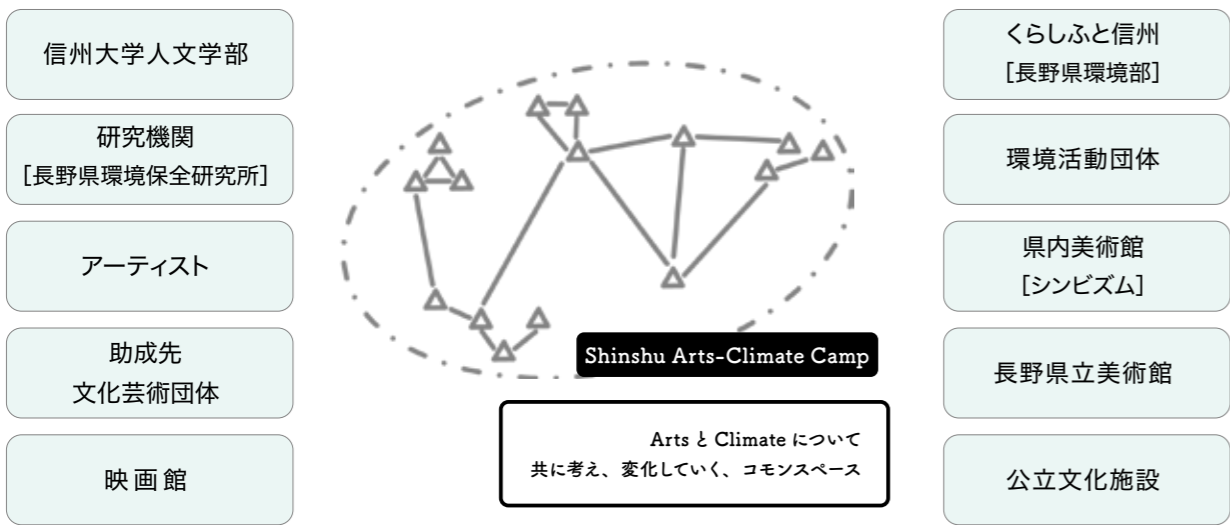
2023年3月に開始したプロジェクトの1年間の記録集を作成。これを踏まえ信州アーツカウンシルがどのように課題に取り組むのかを明文化、今後の活動について議論する(2024年3月22日開催)。



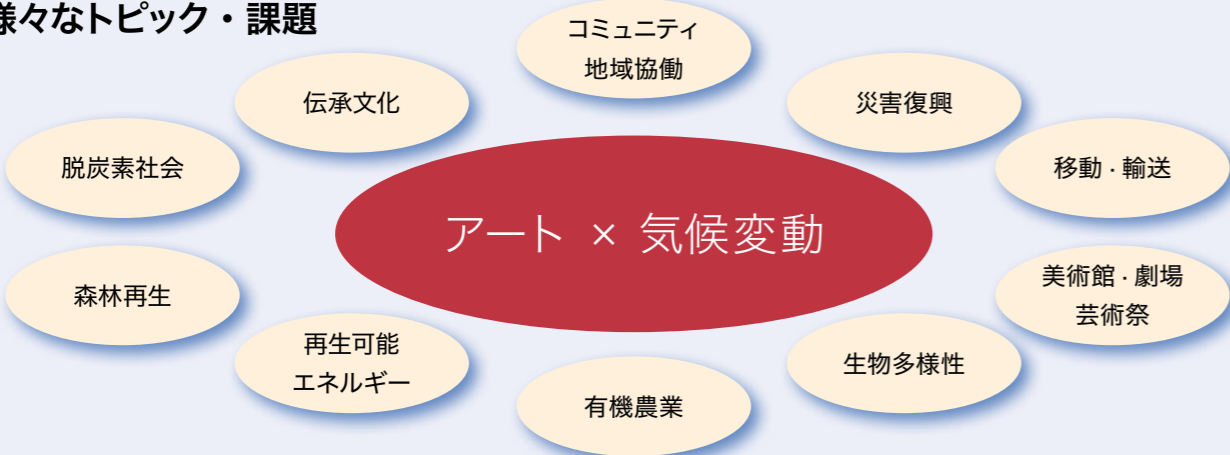
長野県内4地域において、気候変動へのアクションに際して踏まえてほしい知識や情報、視点を学ぶとともに、各地域の文化芸術、環境活動等の関係者の様々な声を耳を傾け対話する〈会議〉を巡回開催。

〈キャンプ〉や〈会議〉の内容についてSNSを活用してオンラインで共有、交流を図るとともに、県内4地域の実践者へのインタビューをPodcast番組として発信。記録集を制作し議論をまとめる。

### 様々な担い手との連携



### 様々なトピック・課題



2023

2024

**3.1 @松本市** 信州 AC× 信大人文連携フォーラム →P.8  
@信毎メディアガーデン  
「アート × 気候変動 未来を創造するアートアクション」  
浜田崇さん(長野県環境保全研究所) 講演  
ロジャー・マクドナルドさん(インデペンデントキュレーター) 講演  
金井直さん(信州大学人文学部)、直井恵さん(アイダゴ/上田映劇)、野村政之

**7.4 @松本市** 〈会議〉第1回 @信州大学人文学部 →P.18  
「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ」  
茅野恒秀さん(信州大学人文学部准教授) 講演+ディスカッション  
山口敦子さん(タナカラ/松本経済新聞)、ロジャー・マクドナルドさん、金井直さん、野村政之

**10.1 @上田市** 〈会議〉第2回 @上田映劇 →P.30  
「アート × 気候危機～不可能かもしれないビジョン～」  
映画『GREAT GREEN WALL』上映&ディスカッション  
藤川まゆみさん(上田市民エネルギー)、竹内利彦さん(サブニユマ)、白井ゆみ枝さん(美術家)、佐藤公哉さん(音楽家)、ロジャー・マクドナルドさん、金井直さん

**11.23 @長野市** 〈会議〉第3回 @長野県立美術館 →P.36  
「地球の今、美術館の明日  
～持続可能な未来をめざして～」  
塩見有子さん(Arts Initiative Tokyo)、松本透さん(長野県立美術館)、中嶋美さん(小海町高原美術館)、ロジャー・マクドナルドさん、金井直さん

**1.20 @中川村** 〈会議〉第4回 @奏の森 →P.54  
「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」  
NPO 法人 F.O.P /カナデル幸響楽団、劇団野らぼう、ちいさがた未来民話研究会

**3.22 @松本市** 総会 〈総会〉第1回  
信州アーツカウンシルの環境コミットメント

**Podcast #0** 案内人対談  
金井直さん × ロジャー・マクドナルドさん

**Podcast #1** 杉浦歩実さん  
中川村 (奏の森)

**Podcast #2** 田村至さん  
佐久市 (アースデイ in 佐久)

**Podcast #3** 天利一步さん、太田秋夫さん  
長野市 (しなの長沼・お屋敷保存会)

**Podcast #4** 高田翔太郎さん  
白馬エリア (Protect Our Winters Japan)

**鼎談** この1年を振り返って →P.60

**『ともにつくる 気候 × アート のものがたり』** 発行

報告

SNS 開設

交流スペース (Facebook グループ)

Podcast →P.70

信州アーツカウンシルの環境コミットメント草案づくり

**キャンプ** →P.68

劇団野らぼう  
ゼロカーボン演劇  
『ロレンスの雲』

ネイチャー ピアノ

GR19  
NEO FARM STYLE

信大人文 →P.28  
試しのホワイトボード

ちいさがた  
未来民話研究会『鳴動』

Deep Time Walk  
峰の原高原

信大人文  
旅するホワイトボード

信大人文  
宮沢賢治 朗読会

座談会 →P.48  
持続可能な社会、  
舞台芸術の環境配慮  
について考える

信大人文  
井上唯 ITONAMI  
風景に向かって旗をかかげる

女鳥羽川シンポジウム  
これからの水辺を  
デザインする

## 案内人より/始動によせて

2023年6月

金井直 (信州大学人文学部 教授)

Tadashi Kanai Professor, Shinshu University Faculty of Arts



アートとはできあがった作品のことだけではありません。行為・実践として私たちの日常に浸透し、世界との関係を更新する、あるいは、そこに新しい回路を開く、生きる技術であり、また生きられた経験でもあります。そのかたちは既存の芸術ジャンルの枠や価値観をししばし超え出て、関心も社会や地球、生命、未来へと広がっていきます。信州アーツ・クライメート・キャンプは、そうしたアート本来の拡張性や媒介力を支えに、とりわけ今日的な課題である環境や生態系、気候変動についての、私たちの意識や行動の変容を喚起する試みです。

一方、そのキャンプが築く場所と人の関係が、アートの概念自体を拡張することも大切です。環境を問うことが、アートの生態系を問い返すことにもつながるわけです。そのようなアートと環境をめぐる実践の循環ないし相互作用を、ここ信州でともに実現し、分かち合っていければと思います。その一歩としての「キャンプ」。とても日常的なことでもよいはず。むしろ日常を開くこと、読み換えることこそがキャンプ。ぜひ一緒にしましょう。

ロジャー・マクドナルド (インディペンデント・キュレーター)

Roger McDonald Independent Curator



芸術は連続と続いてきた人類の大事な共同遺産だと思います。コモンズです。私たちの想像力、鑑賞力、回復力や心のケアは、深くアートと関係してきました。今、このアートのコモンズが置かれている、地球環境のコモンズは、大きく変わっています。温暖化をはじめとする、様々な地球のシステムの変化が起きています：生命の多様性の減少、土壌劣化、海洋酸性化など、私たちの比較的安定した暮らしを今まで支えてきたいろんなシステムが大きく変わっています。これを「気候危機」と呼んでもいいかもしれません。

このような状況の中、アートのコモンズは何をできるのでしょうか？破壊的なシステムに加担せずに、アートは私たちの重要な見方や道具になれると思います。個人でできること、地域でできること、そして芸術を愛する人たちとしてできることはたくさんあると思います。この可能性をみなさんと一緒に考え、アクションに落としていくのが「信州アーツ・クライメート・キャンプ」です。共同的な喜びと実践を持って、アートのリーダーシップ的役割を長野から発信していきたいです。

## Message from navigator

2023.6

Art is not only a finished work of art. It is a living technology that permeates our daily lives as an act or practice, renewing our relationship with the world or opening new circuits to it, and it is also a lived experience. It often transcends the boundaries and values of existing artistic genres, and its concerns extend to society, the earth, life, and the future. The Arts Climate Camp is an attempt to evoke a change in our consciousness and actions, especially with regard to today's issues of the environment, ecosystems, and climate change, supported by the inherent extensibility and mediating power of art. On the other hand, it is also important that the relationship between place and people that the camp builds extends the concept of art itself. Questioning the environment leads us to question the ecology of art. We hope to realize and share such a cycle or interaction between art and environmental practices together here in Shinshu. The Camp is one step in this direction. It can be something very ordinary. Rather, opening up and rereading the everyday is what camping is all about. Please join us.

I believe that the arts are an important common heritage of humanity that has been continuous, a commons. Our imagination, our appreciation, our resilience and care of the mind have been deeply connected to the arts. Today the commons of the global environment, where this commons of art is situated, is changing dramatically. Climate change and various other changes in the Earth's systems are occurring: the diversity of life is decreasing, soil degradation, ocean acidification, and many other systems that have supported our relatively stable lifestyles up to now are changing dramatically. We should call this a "climate crisis". What can the commons of art do in this situation? I believe that art can be an important guide for us to live without being complicit in destructive systems. There are many things we can do as individuals, as a community, and as art lovers. The "Shinshu Arts Climate Camp" tries to think about these possibilities with you and put them into action. With a sense of collective joy and practice, I hope that Nagano can be a leader in this movement.

## ともにつくる 気候 × アート のものがたり

### Shinshu Arts-Climate Camp Document Book 2023-2024

#### Contents

#### 2 【信州アーツ・クライメート・キャンプとは?】

About Shinshu Arts-Climate Camp ?

#### 4 【Shinshu Arts-Climate Camp 2023-2024 活動概要】

Outline of projects implemented in FY2023

#### 6 【案内人より/ Message from Navigator】

金井直 (信州大学人文学部教授)

ロジャー マクドナルド (インディペンデント・キュレーター)

#### 8 【報告 / report】 3/1

信州アーツカウンシル × 信州大学人文学部 連携フォーラム 2023

「気候変動時代、未来を創造するアート・アクション  
～循環型で文化的な暮らしの創造に向けて～」

Art Action to Create the Future in the Era of Climate Change  
～ Toward the Creation of a Regenerative and Cultural Lifestyle

| レクチャー | 「長野県における気候変動の影響」

浜田崇 (長野県環境保全研究所 自然環境部 主任研究員)

| レクチャー | 「気候危機に対するアートの行動」

ロジャー・マクドナルド

#### 18 【報告 / report】 (会議) 第1回 7/4

「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ」

From Shinshu, Art and Zero Carbon for Tomorrow

| レクチャー | 「脱炭素社会に向けた実践とその考え方」

茅野恒秀 (環境社会学 / 信州大学人文学部准教授)

| ディスカッション |

「アート × ゼロカーボンの新たなコミュニティ運動に向けて」

#### 28 【コラム / column】

「信州大学人文学部と Shinshu Arts-Climate Camp」

Shinshu University Faculty of Arts with Shinshu Arts-Climate Camp

#### 30 【報告 / report】 (会議) 第2回 10/1

「アート × 気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～」

Art x Climate Crisis - A vision that may not be possible -

| ディスカッション |

「アート × 気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～」

#### 36 【報告 / report】 (会議) 第3回 11/23

「地球の今、美術館の明日 ～持続可能な未来をめざして～」

Earth Today, Museum Tomorrow

- Toward a Sustainable Future

| レクチャー |

『「ギャラリー気候連合」の実践と、求められる転換」

塩見有子 (AIT ディレクター)

| ディスカッション |

「サステナブルな長野県のアート / ミュージアムに向けて」

#### 48 【座談会 / round-table】 (キャンプ) 12/17

「持続可能な社会、舞台芸術の環境配慮について考える」

Sustainable Society,  
Environmental Considerations in the Performing Arts

| レクチャー |

「シアター・グリーン・ブック」とその実践について

大島広子 (舞台美術家)

#### 54 【報告 / report】 (会議) 第4回 1/20

「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」

Talking in the Forest, Our Environment, Art, and Lives

NPO 法人 F.O.P. 前田斜め (劇団野らぼう)

姫凜子 (ちいさがた未来民話研究会)

#### 60 【鼎談 / round-table discussion】

「この1年を振り返って」

Looking back on the past year

金井直、ロジャー・マクドナルド、野村政之

#### 68 【(キャンプ) 報告 / オンラインでの発信】

#### 70 【ポッドキャスト番組一覧 / List of Podcast Programs】

気候とアートのダイアログ

#### 72 【編集後記 / editor's notes】

レクチャーの図版は、当日使用したスライドを一部、印刷用に編集して掲載しています。



信州アーツカウンシル × 信州大学人文学部  
連携フォーラム 2023

## 気候変動時代、 未来を創造するアート・アクション ～循環型で文化的な暮らしの創造に向けて～

Shinshu Arts-Climate Camp のキックオフ・イベントとして、松本市で「気候変動時代、未来を創造するアート・アクション～循環型で文化的な暮らしの創造に向けて～」を開催しました。目的は、人々の暮らしが自然とともにあり、農業をはじめ気候の影響を受けやすい長野県において、文化芸術の担い手が気候危機について考え、アクションをする出発点をつくることです。

会は、3つのパートで構成されました。はじめは、科学、アート、それぞれの専門家から、気候変動をテーマにした基調講演。その後、来場者が小グループに分かれてディスカッションをし、個々人の活動と気候変動について言葉を交わしました。最後に、Shinshu Arts-Climate Camp の

「案内人」を含む4名のトークセッションで、プロジェクトの今後について意見を出し合いました。

次ページからは、2人のプレゼンターによる基調講演の内容を収録しています。

まず、科学的な見地から気候変動の研究を行う浜田崇さんより、気候変動の基本的な知識と、気候変動から長野県が受けている影響についてお話いただきました。例えば、温暖化の影響によって長野県では冬の真冬日（最高気温が0℃以下の日）の日数が減っており、りんごの日焼けや着色不良が起きやすくなっています。ただ、気温の上昇は地点によって異なっており、例えば100年あたりの平均気温の上昇幅は松本で+2.0℃、長野で+1.2℃だそうです。長野県内でも、地点によって

気温や気象への影響は異なることが、具体的なデータで示されました。

次に、インディペンデント・キュレーター のロジャー・マクドナルドさんから、国内外の気候変動に対するアート界の事例をご紹介いただきました。例えば、2019年からアイスランドを先駆けとして温暖化の影響で溶けてしまった氷河を弔う「葬式」が行われており、ロジャーさんはその儀式に「文化芸術の一つの役割」を見たと言います。他にも、美術の歴史の中で「緊急事態」に行われた活動が紹介され、歴史からヒントを得られることが示されました。最後に、ロジャーさんは自身の活動も紹介しながら、会場に気候変動へのアクションを呼びかけました。



信州アーツカウンシル × 信州大学人文学部  
連携フォーラム「気候変動時代、未来を創造するアート・アクション」

[日時] 2023年(令和5年)3月1日(水) 18:30～20:30  
[会場] 信毎メディアガーデン(長野県松本市中央2-20-2)

[レクチャー] 「長野県における気候変動の影響」  
浜田崇(長野県環境保全研究所 自然環境部 主任研究員)

「気候危機に対するアートの行動」  
ロジャー・マクドナルド(インディペンデント・キュレーター)

[対話] 参加者によるグループディスカッション  
「自身の活動と気候変動・脱炭素・循環」

[トーク] 「Shinshu Arts-Climate Camp について」  
登壇者 浜田崇(長野県環境保全研究所 自然環境部 主任研究員)  
ロジャー・マクドナルド(インディペンデント・キュレーター)  
金井直(信州大学人文学部教授)  
直井恵(NPO法人アイダオ/NPO法人上田映劇)  
進行 野村政之(信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)

[主催] 信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)  
長野県

[共催] 信州大学人文学部、信毎メディアガーデン

令和4年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

## Art Action to Create the Future in the Era of Climate Change

### ～ Toward the Creation of a Regenerative and Cultural Lifestyle

As the kick-off event of the Shinshu Arts-Climate Camp, “Art Action for Creating the Future in the Age of Climate Change: Toward the Creation of a Regenerative and Cultural Life” was held in Matsumoto City. The purpose of the event was to create a starting point for culture and art leaders to think about the climate crisis and take action in Nagano Prefecture, where people’s lives are tied to nature and vulnerable to the effects of climate change, particularly farming. The meeting consisted of three parts. First, keynote speeches on climate change were given by experts in science and art, respectively. After that, visitors were divided into small groups for discussion and exchanged words about their individual activities and climate change. Finally, four speakers, including the “guides” of the Shinshu

Arts-Climate Camp, shared their views on the future of the project. The following pages contain the keynote speeches given by the two presenters. First, Takashi Hamada, who conducts climate change research from a scientific perspective, introduced basic knowledge about climate change and its impact in Nagano Prefecture. For example, global warming has reduced the number of midwinter days (days with a maximum temperature below 0°C) in Nagano Prefecture, making apples more susceptible to sunburn and poor coloring. However, the rise in temperature varies from place to place. For example, the average increase in temperature per 100 years is +2.0°C in Matsumoto and +1.2°C in Nagano. Specific data showed that even within Nagano Prefecture,

the impact on temperature and weather differs depending on the location. Next, Independent Curator Roger McDonald introduced examples of the art world’s response to climate change in Japan and abroad. For example, in 2019, Iceland held a “funeral” to mourn a historical glacier that completely melted due to global warming. Roger commented that he saw “one role of culture and art” in this practice of mourning through ritual. Other activities that took place during “emergencies” in the history of art were also introduced, showing that we can take hints from history. Finally, Roger also introduced his own activities and called the audience to action on climate change.



「長野県における気候変動の影響」  
 浜田崇 長野県環境保全研究所 自然環境部 主任研究員

皆さんこんにちは。長野県環境保全研究所で気候変動に関する調査研究を行っております浜田と申します。今日私は科学的な事実に基づいた客観的な話ということで導入の話をさせていただきたいと思

います。私どもの研究所は県の研究機関で、長野市の飯綱山中腹標高 1000m のところの飯綱庁舎にあります。私は自然環境部に所属しています。他には感染症の部門や、水質や大気汚染の分析をしているところなどもあります。

温暖化のメカニズムをおさらいしておきたいと思ひます。地球の大気には、温室効果ガスがあることによって、現在の人間も含めて生物が生きられるような暖かい環境ができています。それを「温室効果」

と呼んでいます。今問題となっている温暖化は、その温室効果ガスが増えてしまうことによって、地球の気温がさらに上昇する現象です(★1)。

図(★2)は二酸化炭素濃度を西暦0年から2020年まで示したグラフになります。ご覧の通り、産業革命の後から急激に二酸化炭素濃度が上昇してきているということがわかります。産業革命で人類が化石燃料をエネルギーとして使うようになり、この頃から大気中の二酸化炭素が増加してきているということになります。この二酸化炭素濃度の上昇によって、気温が上がっていってしまうということです。

産業革命以後のなかでも特に1970年代以降、上がり幅が急速になって現在に至るとい状況です。世界で温暖化の程



長野県環境保全研究所 環境の保全および保健衛生の向上のために、試験検査、調査研究、情報の収集と普及啓発を行う。  
<https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/index.html>



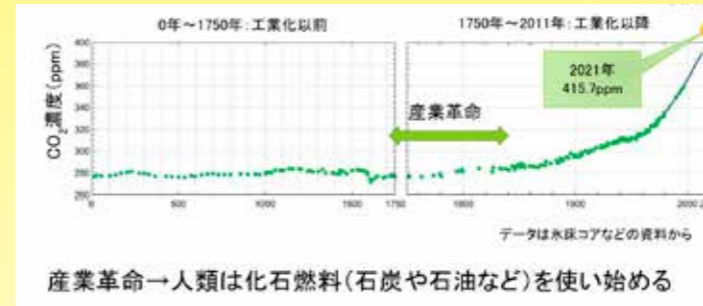
浜田崇  
 長野県環境保全研究所 自然環境部 主任研究員  
 研究テーマ  
 ・長野県の気候変動の実態把握  
 ・山岳地や湖沼の気候変動モニタリング  
 ・都市の緑のもつ環境緩和効果の評価



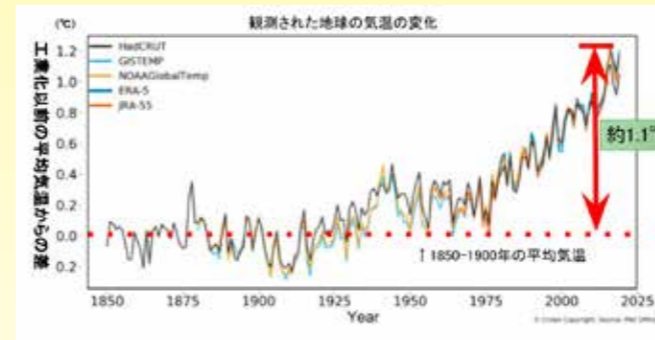
地球の大気 温室効果ガス  
 水蒸気  
 二酸化炭素  
 メタン  
 フロンなど

地球の気温 温室効果ガスあり → 14°C  
 温室効果ガスなし → -19°C  
 ↓  
 温室効果ガスの増加=地球気温が上昇  
 (地球温暖化)

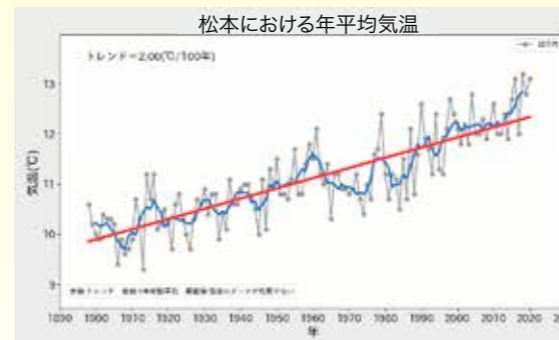
1 温室効果ガスと地球温暖化メカニズム  
 出典：全国地球温暖化防止活動推進センター



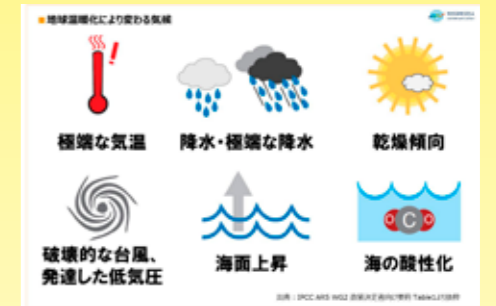
2 産業革命(工業化)以降CO2濃度は増加  
 出典：IPCC AR5 WG1 Fig6.11 <https://www.ipcc.ch/report/ar5/wg1/carbon-and-other-biogeochemical-cycles/fig6-11-3/feed/>



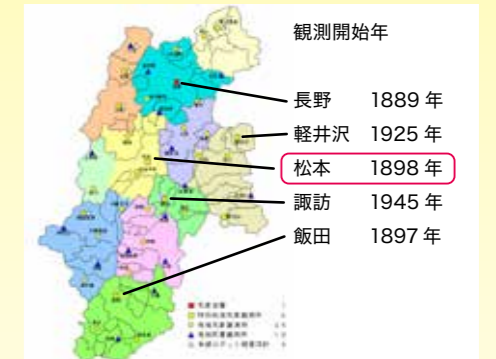
3 地球の気温は上昇している(地球温暖化)  
 観測された地球の気温の変化 出典：世界気象機関 HP 資料を一部改変



6 年平均気温は上昇している



4 地球温暖化により変わる気候  
 出典：IPCC AR5 WG2 政策決定者向け要約 Table1 より抜粋



5 長期間のデータがある観測地点(長野県)  
 出典：気象庁、長野県の観測地点より



7 生物季節への気候変動影響

度は産業革命前と比べて約1.5°Cに抑えようという話がありますが、すでに1.1°C上昇していますので、あと0.4°Cしかない状況だということをご理解いただければと思います(★3)。

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)という国際的な機関が1990年から観測事実などの報告書を出しています。これによって、人間が温暖化をさせていることは「疑う余地がない」と言い切れる科学的な証拠が積み上がってきています。

温暖化することによって他の気象も変化します(★4)。例えば夏はより暑くなり、冬は寒くなるという極端な気温の変化。また気温が上がると大気中の水蒸気の量が増えて、雨が降りやすく、降る時に大量に降る。その一方で雨が降らず乾

燥傾向になる地域もあります。海水温度も上昇して、台風が大きく強力になったり、海面が上昇したりと、地球全体に及ぶ様々な変化が出てきています。

長野県内で気象観測が古くから行われてきた5地点(長野、軽井沢、松本、諏訪、飯田)(★5)のうち、今日は松本

のデータを使ってご紹介していきたいと思ひます。文部科学省、気象庁、環境省などが日本の気候がどうなっているのかということ

を詳細に報告しています。では長野県ではどうなのか。私たちの研究所では地元で、地域で、どういった影響があるのか、情報を集め研究を進めています。

図(★6)は松本の、1898年から現在に至るまでの年平均気温の変化を表して

います。上げ下げはありますが赤い直線で示されているように温度が上昇してきているというのが一目瞭然かなと思ひます。上昇幅は100年間で2°Cのスピードです。先ほどの世界の平均気温の変化は1°C程度でしたので、2倍ぐらいのスピードで松本で温暖化が進んできています。

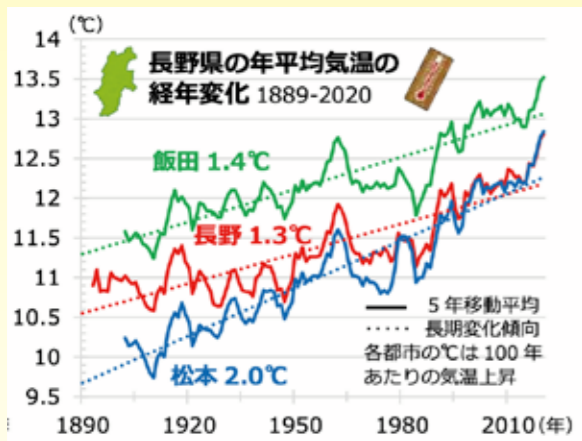
「昔は入学式に桜が咲いていたけれど、今は卒業式に桜が咲く」みたいな話を聞くと思ひます。春の桜の開花は早まる一方で、秋は逆に遅くなっていて、紅葉は以前より遅く見られる傾向にあります(★7)。また特に1990年以降、夏に日中最高気温が35°C以上の猛暑日が毎年のように発生しています。以前から松本に住んでいる方にはかなり頻度が多くなっている実感があるのではないかなと思ひます。そして



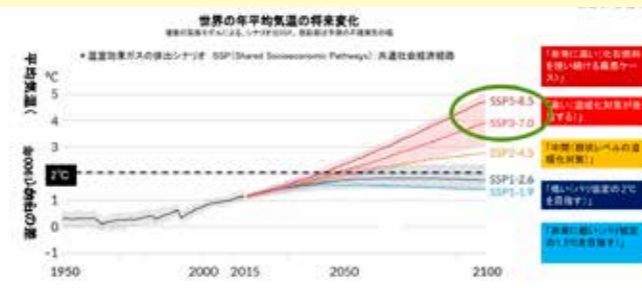
8 出典：農林水産省「気候変動の影響への適応に向けた将来展望」、長野県農業試験場資料「農業技術レダグー第25集」



9 令和元年 台風第19号 記録的豪雨。左：千曲川流域(長野市)、右上：上田電鉄別所線(上田市)、右下：長野新幹線車両センター(長野市)『信州ゼロカーボンBOOK』より



10 気温の上昇 地点によって違う『信州ゼロカーボンBOOK』より。気象庁データを基に作成



11 将来の気温の予測 温室効果ガスの削減がカギ 温室効果ガスの排出シナリオ SSP (Shared Socioeconomic Pathways) 共通社会経済経路。IPCC 第6時評価報告書を改変。

冬の真冬日、最高気温が0°C未満、つまり1日中氷点下という日の日数は最近すごく減っています。夏の猛暑以上に冬の温暖化の傾向は顕著です。

高温は、農業にも影響があります(★8)。りんごの日焼けや着色不良、レタスの抽だいなどが起きやすくなっています。

今年も残念ながら御神渡りはできませんでした。冬の気温が高くなってきていることによって諏訪湖自体が凍りにくくなって、結果的に、御神渡りの出現回数が減っているという現状もあります。

雨についてはわからないことが未だに多いですが、1年のうち雨の降らない日が増えていきます。一方で日降水量50mmを超えるような大雨が降ることがあります。これら両方合わせて考えると、雨の降らない日は増えているんだけど、降る時は極端に降る、という状況です。

その代表的なものが、2019年10月の

台風19号による記録的な豪雨です。200年に1度の大雨が降ったことによって、長野市の千曲川の堤防決壊につながったことは、記憶に新しいかと思えます(★9)。

ここまで、主に松本について触れてきましたけれども、「長野県は広い」ということと、「気候変動と言っても地域によって結構違う」ということも覚えていただければと思います。100年前からの気象データがある長野と松本と飯田の変化を見ても、変化のパターン自体は大きく変わりませんが、変化のスピードは半分違う。松本は2°C、長野と飯田は1.2°Cから1.4°Cと、違いがあります(★10)。

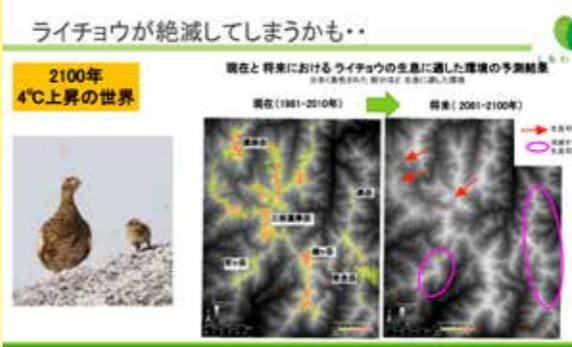
雪については地域の違いもありますし、月による違いというもの結構あります。白馬村で2月の降雪量は年々減る傾向にあります。特に2月と4月が減っていますが、1月と3月は特に減ってはいないんです。一冬で見たら全体的に減る傾向に見

えますけれども、あんまりはつきりはしない。でも月によってはかなり減っている月がある。白馬以外、小谷とか大町でも同じ傾向があります。

将来どうなるのか、どういう影響が出るのかということをご紹介いたします。世界の平均気温が今後どうなるのか。化石燃料を使い続けた場合、2100年には4°Cから5°C上がってしまう可能性があるという予測です。逆に、ものすごく対策を頑張った場合、1.5°C目標を達成できるかどうか。私たちが何をやるかによって、将来の気候変動の影響が変わってくるということになります(★11)。

長野市の場合で考えると、現在の年平均気温11.9°C、2100年に4°C上昇すると佐賀県や宮崎県と同じになってしまいます。

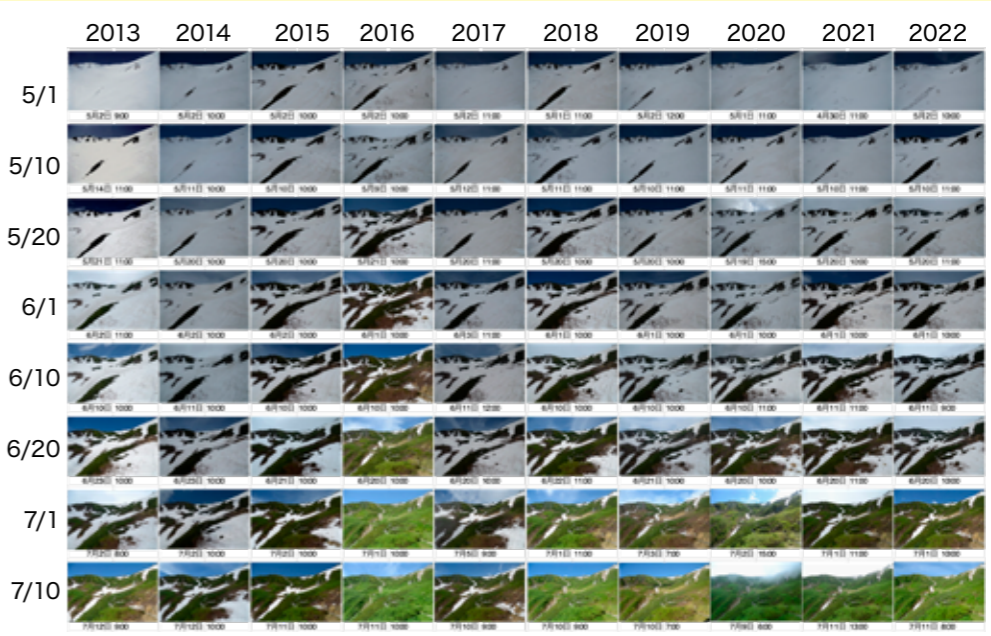
北アルプスの槍ヶ岳付近では今はライチョウが生息していますが、4°C上昇した



12 ライチョウが絶滅してしまうかも…… 現在と将来におけるライチョウの生息に適した環境の予測結果 出典(左)：「長野県の気候変動とその影響」より 出典(右)：Hotta et.al (2019) BMC Ecology



13 山岳地気象観測とカメラモニタリング地点



14 最近10年間の極楽平における融雪期の様子

世界ではライチョウの生息できるような環境がほとんどなくなってしまう可能性もあるという研究結果があります(★12)。

魚のイワナは冷たい水の中でしか生きることができないので、その水温の上昇によって生息域が変化せざるを得ない可能性があります。

りんごもある気候条件の中で非常によく生産できますが、温度が上昇した場合、特に標高の低い場所で今と同じ品種は栽培できなくなるんじゃないかという研究結果があります。

ご存知の通り、標高2500m以上の高山帯には、貴重な高山植物や昆虫などが生息していて、本州では長野県が一番広いエリアとなっています。山頂より上に逃げ場がないことから、高山帯は温暖化に対してとても弱いと言われていて、研究テーマになっています。

気象庁の観測は、山ではほとんど行わ

れていないんですが、私たちは、県内の北アルプス、中央アルプス、南アルプスをはじめとした標高の高いところで、気象観測や定点で写真を撮って雪解けの変化がどうなるのかということ調べています。世界各地の山岳地では温暖化が進んでいる証拠というのは次々と見つかってきています。日本では山で観測された記録の蓄積がないので、今調べている状況です(図★13)。

中央アルプスの千畳敷の南にある極楽平というところを約10年前から1時間に1枚写真を自動的に撮るようにしてあります(★14)。雪解け、消雪日、紅葉の時期や色づきなどを評価・解析しています。これを見ていくと、例えば、消雪日は以前よりも早くなってきているということがわかるかもしれません。

他にも、山の雲の研究はされていないということが最近わかってきて、現在、

取り組んでいます。

研究所では、県と共同で「信州気候変動適応センター」という組織を設置しています。そのホームページに今日お話ししてきたような情報を掲載していますので、興味のある方はぜひご覧いただければと思います。



<https://lccac-shinshu.org/>





「レクチャー」

## 「気候危機に対するアートの行動」

ロジャー・マクドナルド（インディペンデント・キュレーター）

皆さんこんにちは。浜田さんありがとうございます。素晴らしいスタートだったと思います。私は、文化芸術の方のお話をしたいと思います。

今、浜田さんのお話にあったように、非常に不安定な気候の時代に突入しているのではないかと。私個人は2018年、この危機の状況に本格的に目覚めたと言いますか、それまでは多くの皆さんと同様に、環境意識はある、でもほぼ何もやっていなかったです。

人類最古の神殿といわれるものとして、トルコの「ギョベクリ・テペ」という1万年数千年前の遺跡がありますが、今から2万年前くらいに氷河期が終わり、そこから比較的安定した気候が続いたことによって、我々ホモ・サピエンスが文化芸術に取り組んできて、それが今、不安定になって

きたと言えるのではないかと思います。

2019年8月に、アイスランドの最も古い氷河の1つ、オクヨクツル氷河のお葬式が開かれました（★1）。前年の夏、研究者たちによって完全に「死んだ」とされて、1年後、アイスランドの首相をはじめ多くの市民が氷河が最後まであった場所に集まって、コミュニティとして喪に服するというセレモニーをしたんですね。このニュースを見た時に、文化芸術の1つの役割みたいなものを感じたんですが、実はこういう「氷河の葬式」は2019年以降、世界各地で行われています。アメリカ・オレゴン州のクラーク氷河、アルプスではピツォル氷河（スイス）がなくなって市民がお葬式をしました。

アイスランドでは、ブロンズの銘板を氷河があったところに設置して、未来の子

どもたちに対するメッセージと、2019年8月の世界の二酸化炭素濃度「415ppm CO<sub>2</sub>」を残している。こうやって何かなくなる過程に対して人間が関係を作っていくというのは、文化芸術も深く関わる領域の1つだと思います。自然に対して喪に服するというのは、気候変動に関する非常に強力な事例ともいえます。

2018年、世界18か国とEUが気候非常事態宣言を発令して、長野県も2019年12月に出しました。それ以降、特に英語圏のメディアを見ると、「Climate Change（気候変動）」という言葉が、急に18、19年から「気候危機」あるいは「気候緊急事態」、「Crisis」や「Emergency」にシフトした、言葉が大きく変わったという印象があります。当時13、14歳だったスウェーデンのグレタ・トゥーンベリ



1 アイスランドで初めて気候変動によって消失した氷河「オクヨクツル」のあった場所で開かれた「未来への手紙」の銘板の公開式典に集まった人たち（2019年8月18日撮影）。（Photo by Jeremie RICHARD / AFP）



2 スウェーデンのストックホルムで、気候変動に対する意識を高めるため、15歳のスウェーデンの学生グレタ・トゥーンベリが学校ストライキを率い、スウェーデンの国会議事堂であるリクスダーグンの外に座り込んだ。（写真：MICHAEL CAMPANELLA/Getty Images）



3 「1.5°C 特別報告書」の表紙  
\* Global Warming of 1.5°C IPCC



4 [https://www.tate.org.uk/documents/873/tate\\_environmental\\_policy\\_2021-2023.pdf](https://www.tate.org.uk/documents/873/tate_environmental_policy_2021-2023.pdf)

### テート美術館の環境ポリシー 2021-2023

すべてのギャラリーを100%グリーンな再生可能エネルギーに切り替えました。2013年から2020年にかけて、スタッフの出張を44%削減。廃棄物の約75%を再利用し、リサイクルしています。国際的に認められたガイドラインに基づき、ギャラリーの温度・湿度条件を改定しました。梱包用の木箱は、サステナブルな木材を使用しています。ハチミツを作り、美術館の周りにミツバチの巣箱を設置し、ミツバチを奨励しています。美術館周辺に生息する野生動物を育てるために、草刈りを少なくしました。

さんが2018年の8月に1人で学校ストライキを始め（★2）、やがて「Fridays For Future」という若い人たち中心の気候運動に花開いていきます。もう1つ私が非常に興味を持ったのは、浜田さんもお話していたIPCCです。2018年に出たレポートが、科学的なレポートとしては珍しく非常に危機的な警告をしたレポートで、そのことが大きく報道されたと思います（★3）。この年、色んな意味でメディア、社会に「気候危機」という感覚、科学者たちの意識も広がったのではないかと思います。

また、心理学の世界でも“eco-anxiety”「気候不安（エコ不安）」という症状が認定されてきました。実際に、グリーンランドでは気候変動の影響が非常に大きく、松本の2°Cどころじゃなく加速していて、特に若い人たちの心のケアが必要である

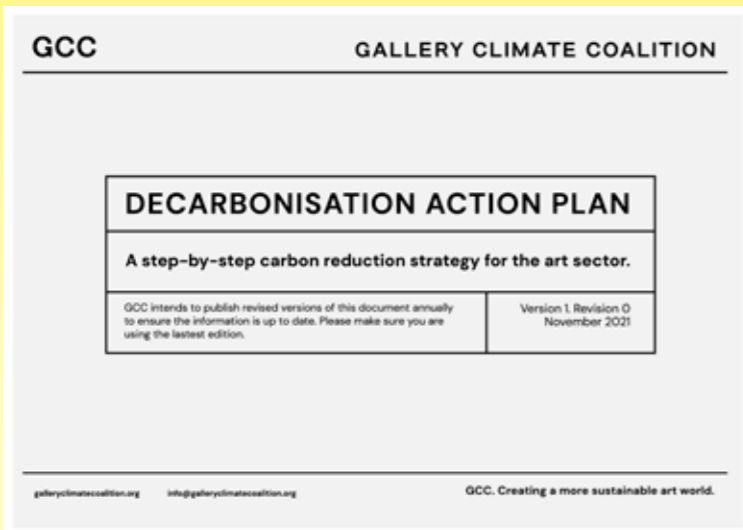
ということも言われています。もしかしたらこれからこういう問題も文化芸術が特に関わることができる重要な領域なのかなと思ったりします。

「JUST STOP OIL」という団体のように名画にトマトスープを投げたり、壁に接着剤で自分の手をつけて居座ったり、といった非常に過激なアクションを若い人がしているというのは、日本のメディアでも報道されています。ただ、残念ながら、なぜここまでしているのか、というところは、日本ではなかなか言う人がいません。当然その人達は逮捕されて、裁判になっています。非常に絶望的な考えを持った人たちが動いているなかで、本当に、我々が「正常」、「ノーマル」と呼べるその日常が本当に正常と感じ取れるのか、というのは常に考えていかないといけないことだと思います。

そしてアート界に関して気候変動対策を構造的に行うことも、2018年以降非常に加速しています。

イギリスを代表するテート美術館は2019年7月に、美術館として気候緊急事態宣言を出しました（★4）。「2023年までに2007年ベースから比べて50%の脱炭素化をする」「2050年までにはすべての美術館でゼロエミッションにする」という宣言を出しています。そしてウェブサイトにも具体的な結果を出しています。

すべての美術館で使っているエネルギーを100%再生可能エネルギーにすることは達成済み。またスタッフの出張を44%削減した。廃棄物の約75%をリサイクル、国際ガイドラインに基づいてギャラリーの温度や湿度を改定しています。テートのような美術館では何千、何万の梱包用木箱を持っているので、こういったことも決して



5 GCC の脱炭素アクションプラン 芸術部門のための段階的な炭素削減戦略 (2021)  
[https://galleryclimatecoalition.org/usr/library/documents/main/gcc\\_decarbonisation-action-plan\\_2021\\_final.pdf](https://galleryclimatecoalition.org/usr/library/documents/main/gcc_decarbonisation-action-plan_2021_final.pdf)

小さいものではないと思います。

あと、美術館の周りにミツバチの巣箱を設置してハチミツ作りをして、それをショップで売っているそうです。周辺の野生動物を育てるための取組です。ちょっとしたことなんですけれども、非常にヒントになるような話だと思います。

2020年には、「ギャラリー気候連合/Gallery Climate Coalition:GCC」が立ち上がりました(★5)。団体が集まって、今現在では、世界中約1000人ぐらいのギャラリーとか美術館とか個人がメンバーになっているんですね。日本から、私が所属するNPO法人アーツイニシアティブトーキョーがメンバーになっています。

GCCでは「ギャラリー、美術館、アーティストに対して、二酸化炭素排出削減目標をみんなで出しましょう、そしてそれを目に見える形で社会に見せていきましょう。それによって産業セクターや芸術セクター全体が動いていくのではないかと。

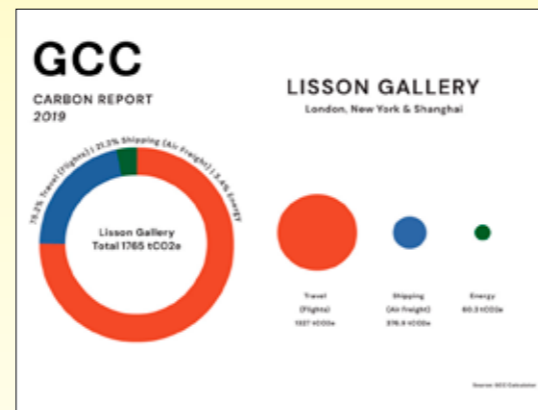
美術運搬を飛行機ではなくて船便で安全かつリーズナブルにできるよう新たなプログラムを作ったりもしていて、非常に具体的なアクション、実践的なことをやっています(★6)。

この気候危機問題は、文化芸術の面から考えると、コミュニティ、共同体、collectivity(集団性/共同性)を考え直す、重要なきっかけとなるのではないかと思います。ある意味では、産業、経済、「新自由主義」といわれるような、孤立した個人が、個と個で競争するように考えてきたことが、温暖化を引き起こしてきたという面を反省しつつ、逆にどうやったら、文化芸術がcollectivityやコミュニティを再生できるか、つながりを強くしていけるのか、アートがどういうインスピレーションになれるのか、ということを考えてと思います。

美術の歴史、文化芸術の歴史からヒントを探るとということも大事だと思います。



7 1942年6月30日、第二次世界大戦中、ランチタイムを過ごす労働者たちをもてなすイギリスのピアニスト、マイラ・ヘス(1890年~1965年)。  
 写真: Central Press/Hulton Archive/Getty Images



6 GCC CARBON REPORT 2019  
[https://galleryclimatecoalition.org/content/feature/151/imag%3%81%82\\_standalone487/](https://galleryclimatecoalition.org/content/feature/151/imag%3%81%82_standalone487/)

第二次世界大戦中、ロンドンのど真ん中にあるナショナルギャラリー(国立美術館)はあえて閉めないで、空襲中でもロンドン市民を受け入れて、例えば昼にはマイラ・ヘス(Myra Hess)さんという有名なピアニストがランチタイムコンサートを無料でやったりしていた(★7)。あとは、1カ月に1点だけ作品を倉庫から出してきて、無料開放展示もやっていた。市民の心のケアの大事な場所の1つになっていた。ちなみに、これを実行した団体はイギリス政府に1940年にでき、戦後アーツカウンシルになっていく原型となったものです。そう考えると、いま、信州アーツカウンシルも、この危機的な時代に市民と一緒にどうやって文化芸術の中でcollectivity、コミュニティ、ケアを作っていけるのか、こういうものが実はあるのかなと思います。

「CIVIC RECOVERY CENTRE」(2000年)は、音楽プロデューサーのブライア



8 「MUSIC FOR CIVIC RECOVERY CENTRE」 Brian Eno (2000) Opal Records  
 左: MOACA (Mochizuki AreKore Climate Action) による長野県佐久市望月でのミーティング (2020年1月)



9 松澤宥 2002年2月2日2時22分 国立近代美術館でのパフォーマンス 撮影:長沼宏昌



10 アンナ・ハルプリン(中央)  
 Photo: David Toerge - courtesy Eichler Network

ン・イーノ(Brian Eno)が提案した作品です(★8)。どうやって、人々の心のケアや、ゆるいコミュニティを芸術を通して作っていけるのか、それを「市民回復センター」という空間として提案したんです。

これを参照して、私も個人的に望月で「市民回復センター望月」という活動を仲間たちとやっていて、音楽を聞いたり、芸術鑑賞したりというイベントもやっています。

諏訪に松澤宥さんという素晴らしい前衛芸術家がありました(★9)。60、70年代から非常に先駆者的な考えを持っていたと思います。特に自然環境、汚染、近代産業文明に対し、「文明の崩壊は近い」と、批判的な文章を多く残しています。彼の作品は、人間が環境汚染で崩壊する社会に対してどう適応すべきなのか、どう心のケアをすべきなのか、そういう目で見ると、なかなか面白いのかなと思います。儀式とかダンスとか、身体性を取り戻すという

ことを多く提案しています。

最後になりますが、私は、住んでいる佐久市の望月で、一市民として気候変動の市民活動(MOACA)をしているのですが、多分日本はヨーロッパと環境も違うので、どうやってこういう気候問題をみんなで共有できるのか、地域でのディスカッションを数回繰り返しました。そして、地域に住む人たちの連帯感、コミュニティのつながりを強くすることによって、適応力、回復力……レジリエンス(resilience)と言いますが、こういうスキルはこれからの時代に地域が持たなくてはいけない気がします。そこではやはり、文化芸術の役割も大いにあるのではないかと思います。望月では、アメリカのダンサー、アンナ・ハルプリンが提案したコミュニティの踊りをみんなでやってみて、連帯感を作っていくことも実践しています(★10)。

また、理事を務めている多津衛民藝館の展示のリニューアルを去年担当したので

すが、民藝館のコレクションの中に気候変動問題のコーナーを作ったんです。このコレクションを作った小林多津衛先生という方は、平和と運動についても昭和の初めから取り組んでいて、やはり民藝と気候問題は無関係ではないんですね。場所によってできることは様々ですが、皆さんがもしかしたら働いている文化施設やコミュニティの中で、まず何をできるのか、そういうところから話していけたら嬉しいなと思います。ありがとうございます。



信州アーツ・クライメート・キャンプ  
〈会議〉第1回

## 信州発、アートとゼロカーボンの明日へ

Shinshu Arts-Climate Camp の「オープンな学びと議論の場」である〈会議〉シリーズ、第1回は信州大学人文学部で行われた「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ レクチャー & ディスカッション」でした。この回では、既に動き出しているゼロカーボンに向けた試みなどを学んだ上で、アートとゼロカーボンと一緒に考える Shinshu Arts-Climate Camp の実践が拓く可能性などについて、議論を深めることを目指しました。

会はず、人文学部准教授（環境社会学）である茅野恒秀さんから「脱炭素社会に向けた実践とその考え方」という題でレクチャーをいただきました。その後、茅野さん、Shinshu Arts-Climate Camp の「案内人」2人に加え、松本経済新聞の山口敦子さん、信州アーツカウンシルの野村政之によるトークセッションが行われました。

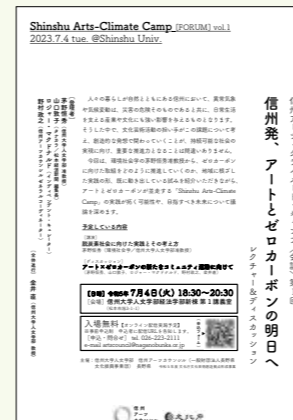
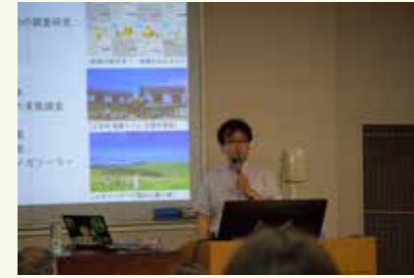
レクチャーでははじめに、脱炭素に関

連するデータが紹介され世界で標準的な考え方となっている 2050 年までに必要な変化（①エネルギー効率化、②エネルギー転換、③上の2つを可能にするインフラ整備）を確認しました。ただ、茅野さんはコロナ禍を振り返りながら、個人の我慢ではなく社会の構造を変えることの重要性を強調します。また、2021年に策定された「長野県ゼロカーボン戦略」では、県民の声によって意欲的な目標（2030年までにCO2排出量60%減）が設定されたことが紹介されました。目標の壁は高いですが、茅野さんは「私たちが目指したい社会というのは、本当の豊かさを実感できる社会」と指摘します。脱炭素に向けた単線的な取組でなく、他の地域課題やSDGsも併せて考えながら、誰も取り残さない取組が求められています。

レクチャーを踏まえ、トークセッションでは脱炭素とアートの接点を探る議論

が展開しました。例えば山口さんは、古い建物の活用を嬉しく思う一方、炭素排出量に配慮した新しい建物を利用した方が環境には良いのではないかと気付きを共有しました。それに対して茅野さんは、愛着のある建物を使い続ける人も脱炭素の輪に入れるような社会づくりが大事であるとコメントしました。

最後に会場から、「ゼロカーボンとアートの繋がりが見えなかった」という率直な意見が出され、登壇者それぞれが回答しました。その中で野村は、「芸術の歴史は価値観を変えてきた歴史」とあり、ゼロカーボンに向けた価値観の変容にアートが取り組むことの意味を示しました。



信州アーツ・クライメート・キャンプ〈会議〉第1回  
「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ」レクチャー & ディスカッション

[日時] 2023年(令和5年)7月4日(火) 18:30~20:30  
[会場] 信州大学人文学部経済学部新棟第1講義室  
(長野県松本市旭 3-1-1)

[レクチャー] 「脱炭素社会に向けた実践とその考え方」  
茅野恒秀(環境社会学/信州大学人文学部准教授)

[ディスカッション] 「アート × ゼロカーボンの新たなコミュニティ運動に向けて」  
登壇者 茅野恒秀  
山口敦子((株)タナカラ/松本経済新聞編集長)  
ロジャー・マクドナルド(インディペンデント・キュレーター)  
全体進行 野村政之(信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)  
金井直(信州大学人文学部教授)

[主催] 信州大学人文学部、  
信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)  
長野県

令和5年度 文化庁文化芸術創造拠点形成事業

## From Shinshu, Art and Zero Carbon for Tomorrow

The first in the Shinshu Arts-Climate Camp's "Conference" series, a place for open learning and discussion, was the "Lecture & Discussion: Art and Zero Carbon Tomorrow from Shinshu," held at the Faculty of Humanities, Shinshu University. In this session, the aim was to deepen the discussion on the possibilities opened up by the Shinshu Arts-Climate Camp, which considers art and decarbonization together, after learning about the zero-carbon initiatives that are already underway. The meeting began with a lecture by Tsunehide Chino, Associate Professor of Environmental Sociology at the Faculty of Humanities, on "Practices and Ideas for Decarbonization". This was followed by a discussion session with Mr. Chino, two "guides" from the Shinshu Arts-Climate Camp, Atsuko Yamaguchi of the Matsumoto Keizai Shimbun, and Masayuki Nomura of the Shinshu Arts Council. The lecture

began with an introduction of data related to decarbonization and a review of the changes required by 2050 as set by the IEA (World Energy Agency): 1) energy efficiency, 2) energy transition, and 3) infrastructure development to enable 1) and 2). However, looking back on the Covid 19 epidemic, Mr. Chino emphasized the importance of changes in the structure of society, and not only individual efforts. He also introduced the "Nagano Prefecture Zero Carbon Strategy" formulated in 2021, in which ambitious targets (60% reduction of CO2 emissions by 2050) were set with the participation of prefectural residents. Although the barriers to the goal are high, Mr. Chino pointed out that "the kind of society we want to achieve is one in which people can experience true affluence. Rather than a monolithic approach to decarbonization, we need to consider other regional issues and the SDGs as well, while ensuring that no

one is left behind. Based on the lectures, the talk session featured a discussion exploring the connection between decarbonization and art. For example, Ms. Yamaguchi shared the realization that while she was happy to see the utilization of old buildings, it would be better for the environment to use new buildings that are carbon emission conscious. In response, Mr. Chino commented on the importance of creating a society where people who continue to use buildings they are attached to can also be part of the decarbonization circle. Finally, an audience member frankly commented that he could not see the connection between decarbonization and art, to which each of the speakers responded. In response, Ms. Nomura stated that "the history of art is a history of changing values," and indicated the significance of art's commitment to changing values toward a zero carbon society.



レクチャー

## 「脱炭素社会に向けた実践とその考え方」

茅野恒秀（環境社会学/信州大学人文学部准教授）

私は環境社会学という分野が専門で、大学では社会学を教えています。Shinshu Arts-Climate Camp（会議）の第1回ということで、ゼロカーボンの視点から皆さんをくすぐるということをしていきたいと思ひます。

大学で教えながら、色々なフィールドに関わっていきまして、群馬県のみなみ町や青森県の六ヶ所村はもう関わって丸20年になりました。県内でも松本市を中心に色々な自治体で、地に足のついたゼロカーボン社会をどう実現するのか、ということをして研究をしています。

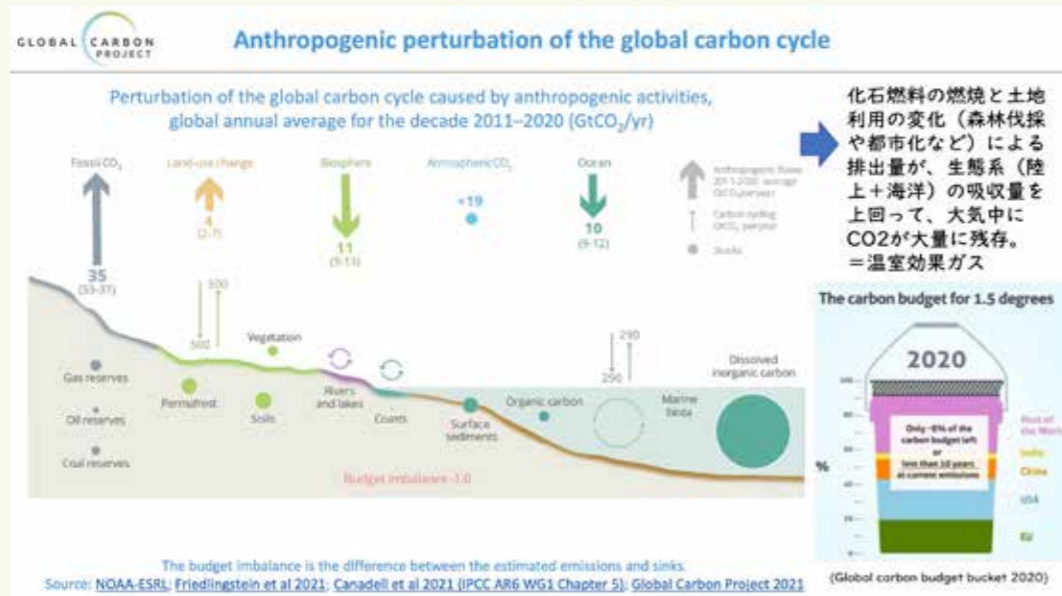
たとえば2018年に上田市で、無作為抽出の1000人に配布して627人から回答を得たアンケート調査結果があります。「気候変動や温暖化の影響を実感するのはどれくらい先だと思いますか」と聞いたら「もうすでに実感しているよ」という方が86%。2019年、千曲川の豪雨災害を経験する以前の話です。おそらく今はもうほとんどの方が「実感している」と答えるんじゃないかと予想します。

諏訪湖の御神渡りが現れない。または、棒寒天が諏訪湖の

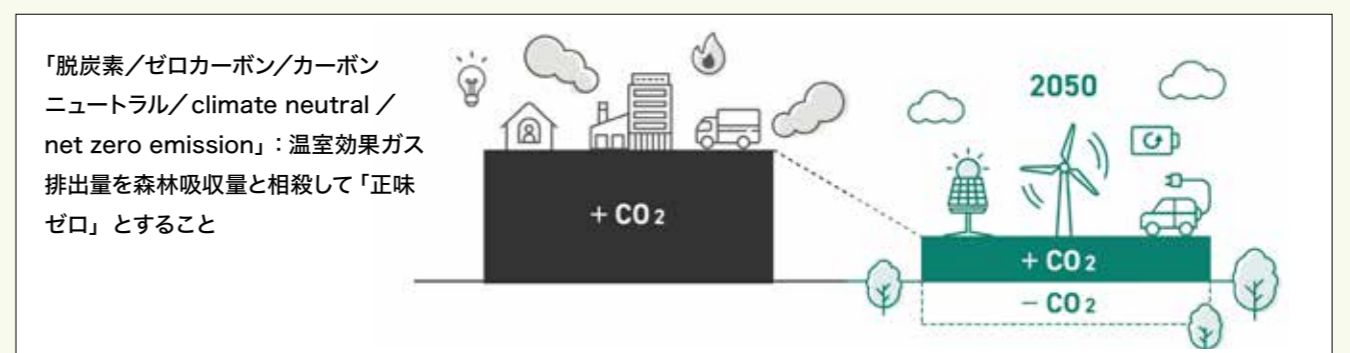
周辺で凍らないというようなことが起こって地場産業にも影響を及ぼしている。世界に目を向けると、気候変動によって難民が生まれようとしています。

図(★1)は「グローバル・カーボン・バジェット」という国際的な研究プロジェクトの中で、世界のCO2がどれだけ発生しどれだけ地球が吸収しているのか、ということをごとと定量化したものです。

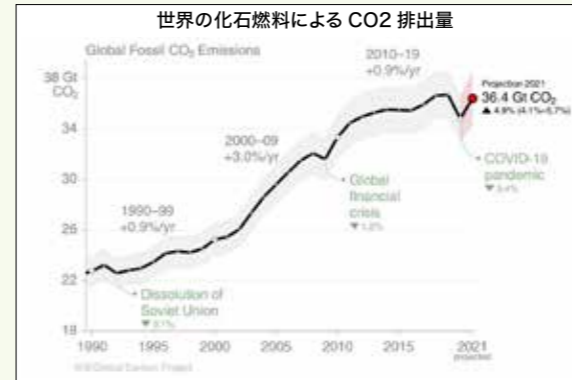
地球本来の自然の生態系がCO2を吸収できる能力が、毎年、陸上生態系でだいたい11ギガトン-CO2ぐらい、海の生態系で10ギガトン-CO2ぐらいあります。この範囲内で私たち人類が生活または経済において排出するCO2が収まればいいんですけども、化石燃料を大量に燃やしてCO2を排出していて、これが35ギガトン-CO2。毎年、地球が吸収できる能力を上回るCO2を排出しているということになります。都市化が進んでコンクリートジャングルになるといふようなこともCO2の吸収能力を下げていきます。森林を伐採する、農地を都市に変えるといった土地利用の変化も見逃せません。



1 Global Carbon Project  
Global Carbon Budget 2021 <https://www.cgernies.go.jp/gcp/news/20221111.html>



2 環境省 脱炭素ポータル  
[https://ondankataisaku.env.go.jp/carbon\\_neutral/about/](https://ondankataisaku.env.go.jp/carbon_neutral/about/)



3 The 2021 projection is based on preliminary data and modelling. Source: Friedlingstein et al 2021; Global Carbon Project 2021

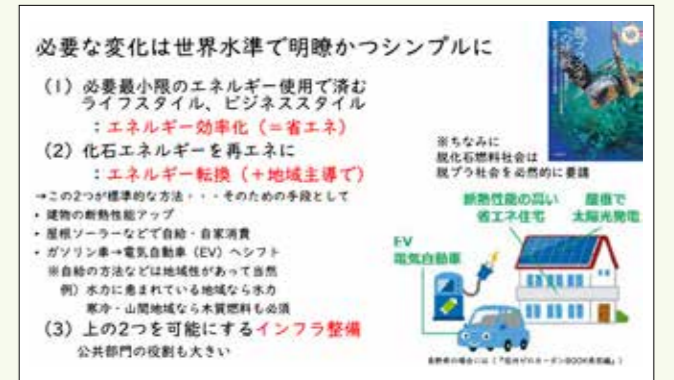
結果、大気中にCO2などの温室効果ガスが大量に残り、地球温暖化、気候変動が起こっているということになります。

このプロジェクトでは、私たちが本格的にCO2を出し始めたのがだいたい19世紀末からとしていて、その頃からみて今地球の平均気温が1.1~1.2°C上がっているとされています。この気温上昇を1.5°Cまでに抑えるために、私たちが出せるCO2を100とした場合、残りは8だという集計結果も、2020年の時点で出ています。

「脱炭素/ゼロカーボン/カーボンニュートラル/climate neutral/net zero emission」いろんな言葉が使われていますが、温室効果ガスの排出量を地球の吸収能力と相殺して「net zero = 正味ゼロ」にするということで、同じことを言っていると思ってください。排出を抑え、植林をしたり間伐をしたり森林の吸収能力を上げて、炭素の排出がニュートラルになるように社会を変えていく必要がある。これを2050年までに達成する必要があるということが言われています(★2)。

あと「27年」を長いと感じるか、短いと感じるか、私、今年で45歳なんですけれども、27年前なんか昨日みたいな感じですが、社会を変えようというので27年は、十分な時間だという風に思っています。戦後、1945年に戦争が終わり、27年後の1972年は、日本が高度経済成長をほぼ終えるタイミングです。日本社会も世界情勢も激変したと思います。取り組んでいかないと時は経ちますので、早くやらなければいけないということでもあります。

温室効果ガスの排出量のグラフを見ますと(★3)、コロナで経済活動が縮小した2020年の1年間は確かにガクッと減って



4 『信州ゼロカーボンBOOK』

いますが、2021年になるとまた元に戻っています。これが示唆することは、「我慢じゃ無理だな。社会の構造そのものをいかに変えていくのか、が求められてるんだな」ということになります。

社会の構造を変えるために、技術的にやらなければいけないことはハッキリしています(★4)。

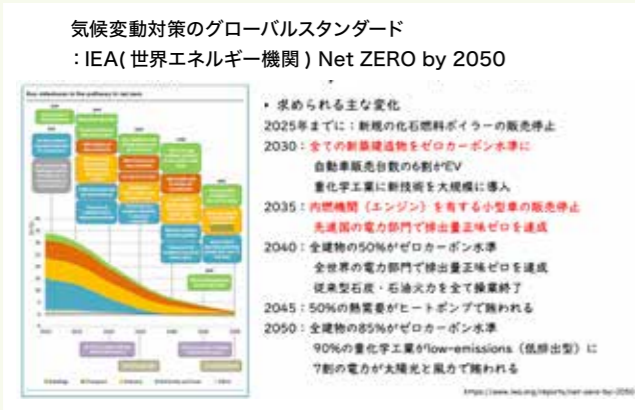
1つは、「エネルギー効率化」(energy efficiency)と呼ばれます。必要最小限のエネルギー使用で済むライフスタイル、ビジネススタイルを取り入れていくということです。世界の「エネルギー効率化」はDXで推進されています。例えば、再生可能エネルギーの電気が余っている一番電力価格の安い時間帯に自動で洗濯機を回す、そういったことをスマホでワンタッチで行う、という社会が実際に来ています。クールじゃないですか？

2つ目は、「エネルギー転換」です。化石燃料を再生可能エネルギーに切り替えていくということです。再エネの資源は太陽光、風力、水力など至る地域にあります。それを地域主導で皆が豊かになるために使っていくという流れが必要だと考えています。

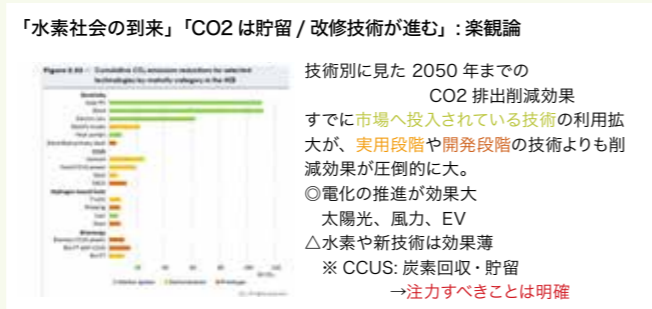
大事なことは、この「エネルギー効率化」と「エネルギー転換」を合理的な選択肢として私たちが簡単に選べるように、ハードもソフトも社会インフラを整えていくということです。

長野県は『信州ゼロカーボンBOOK』の中で「断熱性能の高い省エネ住宅で、屋根で太陽光発電をして、EVに給電して走りましょう。こうするとCO2の排出量が限りなくゼロに近い住まい方ができます」と提案をしているわけです。これが当たり前になる社会にするにはどうしたらいいのか。

2050年までにCO2排出量の正味ゼロを達成するにはどうしたらいいのか、世界エネルギー機関(IEA)が示した報告書から



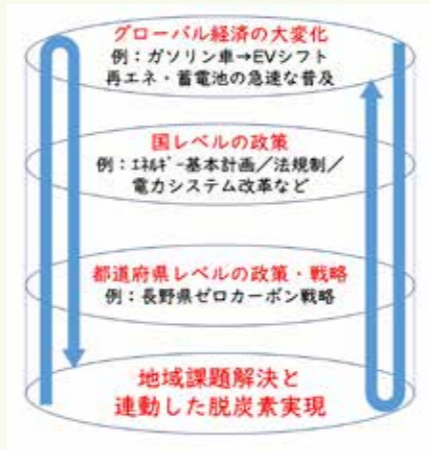
5 Key milestones in the pathway to net zero  
<https://www.iea.org/reports/net-zero-by-2050>



6 IEA. All rights reserved  
<https://www.iea.org/reports/net-zero-by-2050>



7 左 出典：三菱UFJリサーチ&コンサルティング「自動車産業を取り巻くカーボンニュートラル対応の動向」※レポート公開時(2022年1月18日)の情報のため、企業名、方針、数字など最新情報と異なるものあり  
 右 各資源エネルギー庁 スペシャルコンテンツ 各国の電気自動車の新車販売比率 主要国・地域における電気自動車の販売比率の推移 [https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyoo/xev\\_2022now.html](https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyoo/xev_2022now.html)



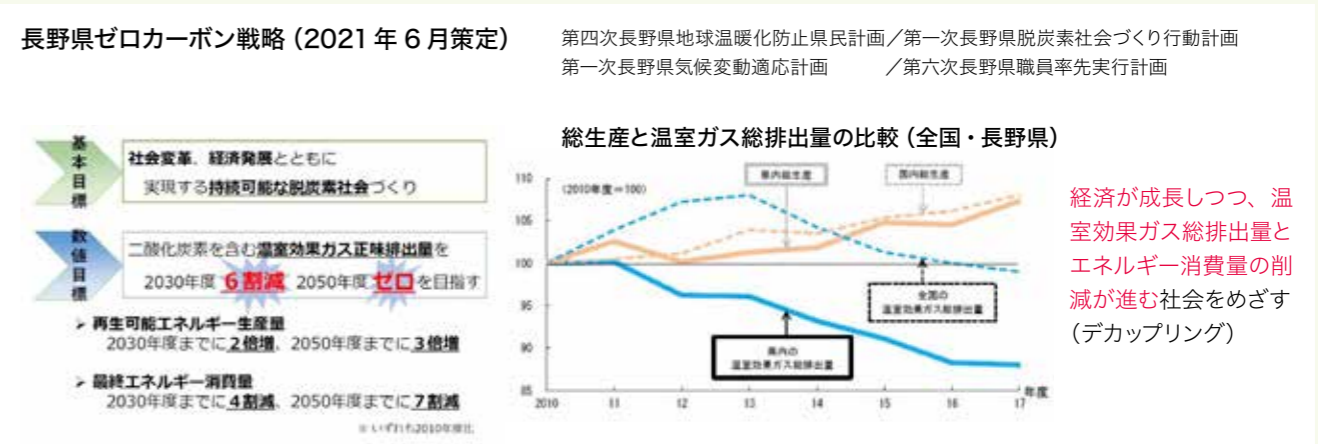
8 グローバルな変化とローカルでの受けとめ方

図(★7)は去年(2022年)のデータですが、自動車各社が何年までに自社の脱炭素を達成しようとしているのかということが一覧になったものです。各自動車メーカーの競争が始まっている、いかに目標を前倒しするかが各社の生き残りに繋がっているという判断があるわけです。中国では新規販売される車の5台に1台はEVだそうです、日本は残念ながら大幅に遅れています。産業界の変化は非常に急ピッチで、EVはこれから先大きな変化がますます起こってくると思われま。

「何をしたらいいのだろうか」「どういう視点で物を考えたらいいんだろう」ということに移っていきましょう。ここからは私の考えになります。今日のタイトルに「信州発」とありますが、地域にこだわる視点とグローバル社会の変化というのを、どのように混じり合わせたらいいのか。世界の変化が激しく、グローバル経済や国レベルの政策はどんどん脱炭素型にシフトしていきます。日本はエネルギーの基本計画や電力システムの改革が少し遅れているというのは厳しい現実です(★8)。

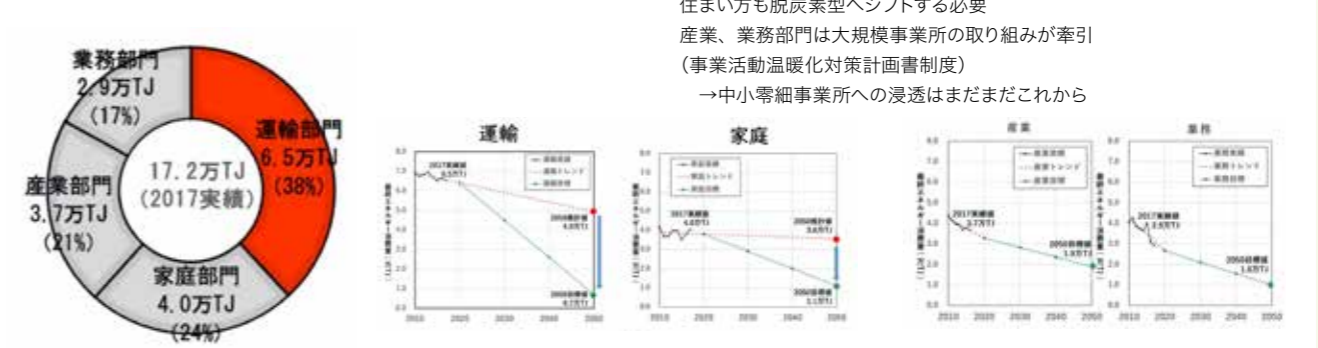
ただ、大事なことは、私たちが暮らしている地域の課題解決と連動した脱炭素の実現が必要である、ということです。その点で、長野県はこの十数年の取組の蓄積で、47都道府県の中で一歩前にスタートしたというところがあります。

私も策定に関わった長野県の「ゼロカーボン戦略」(2021年6月策定)があります(★9)。ここでは非常に野心的なことを言っていて、2050年にゼロを目指すために、2030年度までに2010年と比べてCO2の排出量を6割削減しようという目標を



9 「長野県環境エネルギー戦略」の令和元年度の進捗と成果報告書 長野県ゼロカーボン戦略 2021(令和3)年度 進捗と成果報告書【概要】  
<https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/koho/chijikaiken/2021/documents/1.pdf>

部門ごとの温室効果ガス排出量と削減目標



10 長野県環境審議会配布資料(2021年6月1日開催分) <https://www.pref.nagano.lg.jp/kankyo/shingikai/210601shiryo.html>  
 第5回 長野県環境審議会 地球温暖化対策専門委員会資料 <https://www.pref.nagano.lg.jp/kankyo/keikaku/4jisenryaku/ondanka5kai.html>

立てています。それを、我慢してやるのではなくて経済発展、社会変革とともに実現しようというのが大事なコンセプトです。

「県内総生産が伸び、経済が成長しながら温室効果ガスの総排出量が減っていく。エネルギーの消費量も減っていく」ということを目指したいわけです。20世紀は「化石燃料を大量消費してモノを生産し経済成長する」「温室効果ガスの総排出量が増えると県内総生産が増える」という図式の社会になっていた。その変化の兆しは少しずつ見えてきますが、もっと大きくしなければいけないということになります。

国際的にはIPCCが、2018年の時点で、2030年にはCO2排出量を45%(2010年比)減らしてくださいと言っていました。現在目標が改定され、2035年に65%減らすとなっています。

長野県は2021年当時に「60%削減」と野心的な目標を立てました。これは県民の声があったからです。この案ができた時に私も専門委員会の委員でしたが、最初の案は48%ぐらいで妥当ではないかというものでした。それは、2050年の排出量ゼロを考えた時に、直線で機械的に引いていくと48%という数字が導き出されたからです。ところがその案を県民に示したところ、県政史上最多の180件の意見があったんです。「長野県はもっと頑張れるはずだ」と、そういう意見がほとんどでした。その結果、日本で最も野心的な計画を立てようということで、60%削減になりました。

CO2の排出を日本全体で運輸、家庭、業務、産業という4つの部門で集計しています。アーティストの方々が関わるのはど

ういうところでしょう、ということなのですが、全部関わるんです。例えば、このキャンパスのこの建物のエネルギーは、業務部門になります。長野県内で何かものづくりをするといった時には産業部門の排出量としてカウントされます。家に帰れば家庭部門です。車に乗れば運輸部門ということになります。この4つは全て私たちの生活に関わっています。部門ごとにできることを見つけて減らしていく。例えば2050年時点で、運輸部門はすべての自動車が電気自動車か水素自動車になっていくというシナリオを立てています。それだけではなく、そもそも地域コミュニティを自動車に頼らない社会に作り替えていくということも大事なのではないでしょうか。

2030年の新築住宅は全てZEH(ゼロ・エネルギー・ハウス)にしていきたいと思います。業務用ビルはZEB(ゼロ・エネルギー・ビル)に、とか。エネルギー消費量を最終的には7割減らしたい。太陽光発電、水力発電などをさらに増やして発電量・生産量として約3倍に持っていきたいと、こういったシナリオを立てています。

部門ごとの温室効果ガス排出量をみると(★10)、長野県は運輸部門が多いです。日本全体では産業部門が多く、自動車産業と製鉄、また火力発電所の排出量をいかに減らすか、課題は山積みしています。長野県の運輸部門は、人口減少や燃費の改善で長期的に見れば減ることは確かですが、目標値までは程遠い。家庭部門も目標と現実の差が大きい。また、じゃあ産業、業務部門はいいのかとなるとそうでもなくて、放っておくと中小零細企業が脱炭素型の経営に転換できずバタバタ倒れていくと

## めざしたい 2050 年の姿



11 『信州ゼロカーボン BOOK』より

<https://www.kurashi-futo-shinshu.jp/>



ということが起こってしまいます。

昨年県民全体でゼロカーボン社会に向かっていくためのプラットフォーム「暮らしふと信州」を作っています。そこで、県のゼロカーボン戦略を作った時に私たちは「目指したい社会、長野県って、こういう社会なんだ」と、こんな絵を描いてもらいました(★11)。

例えば、ゴミ収集車など必要な車は走っていますが、中心市街地は自転車の人、歩行者、EVに乗っている人で、自動車は見かけない。屋根には太陽光発電パネルがついています。街中に今以上に緑があります。郊外では車を使っていて構わないと思います。中心市街地にはトラムに乗り換えて入る。山村では農業、林業が再生可能エネルギーの資源を使いながら営まれている。木質バイオマスで再エネが供給されていたり。スキーリゾートも持続的に営んでいる。雷鳥も引き続き暮らしている。

こういった 2050 年の姿をイメージしながら、ここにたどり着いていくために大事なこととしては、今日の会議のように、私たちに何が必要かということを知り、様々な立場の方々が繋がるということ。学びと対話、協働を軸にして、共に創りたい未来を創っていくということ。こういった取り組みを全県的に広げていきたいということです。

私たちが「暮らしふと信州」というプラットフォームを作る時にこんなことを考えていました。足元の「暮らし」を「ふと」立ち止まって見つめ直し、心地よさや心の豊かさを感じられる、自然と調和した美しい暮らしへの「シフト」を促す。分野と世代を超えた様々な人たちの共創によって、各地域の自然・文化的資源を

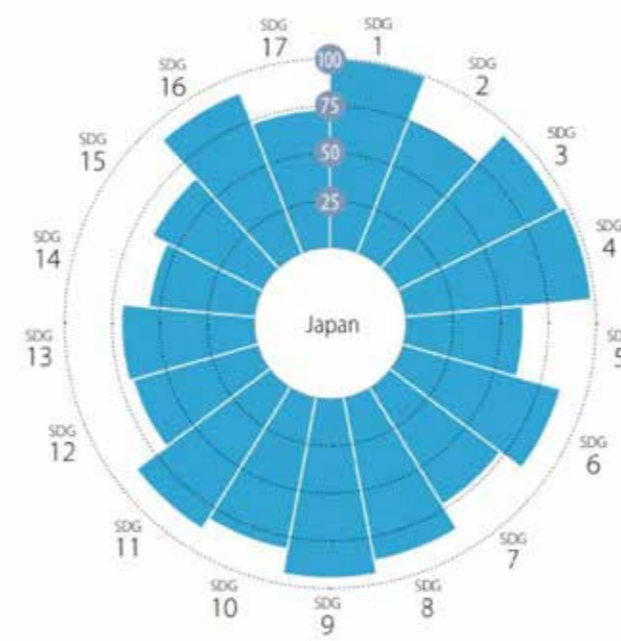
再発見再編集し、地域の「暮らしふと」を進めていく。私たちは、ゼロカーボン社会共創プラットフォームを「暮らしふと信州」と名づけました。

私たちが目指したい社会というのは、「本当の豊かさを実感できる社会」なのではないかということです。アートとの関係で言えば、色んな地域の自然資源や文化的資源を再発見する、また再び編み直していくというような、そういった取り組みもやっぱり必要。ゼロカーボン社会に向かっていくという線だけではなく、色んな形で道筋が作られていく。そうした暮らしを変化させる人を1人でも増やしたいし、社会全体でのシフトを進めていきたい。そういった思いで「暮らしふと信州」と名付けていますので、ご興味ある方はぜひご参加いただければと思います。

県のゼロカーボン戦略を作った後にふと思ったのは、「県だけがやってもダメだな」ということです。確かに長野県では色々な取り組みが既に実現されていますし、これからもやっていきます。ですが、(地域には)やはり色々な課題があります。例えば、新築住宅だけ手厚くサポートしても意味ないですよね。だって皆さんが住んでいる住宅は、ほぼ既存の住宅なわけですから。交通も、そもそも人口が減っている地域コミュニティが持続可能でないと意味がないのではないかと。やはり地域のメリットになる仕組みが大事だということです。また、産業界も大手だけでなく中小零細事業所も生き残るための戦略を考えなければいけないし、1つ1つ取り出していくと色々な課題が待ち受けています。私は県内の様々な方と協働して、1つ1つの宿題を潰していくという風に思っています。

## SDGs 日本の達成状況

### AVERAGE PERFORMANCE BY SDG



12 AVERAGE PERFORMANCE BY SDG

<https://dashboards.sdgindex.org/profiles/japan>

世界の SDGs 達成度を比較したランキング (ベルテルスマン財団と持続可能な開発ソリューション・ネットワーク (SDSN) が毎年発表)。

日本は 2016 年 11 位、2018 年 15 位、2020 年 17 位、2022 年 19 位と後退中……。

達成度が低いもの：日本社会の課題そのもの

- 5 ジェンダー平等
- 7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
- 12 持続可能な生産と消費
- 13 気候変動
- 14 海洋資源
- 15 陸上資源
- 17 パートナーシップ



これからの脱炭素社会へ向かうために、4つのポイントからお話をします。

まず1つ目が住宅部門です。脱炭素の視点で建物の改修をしていくことで、大手メーカーではなく地元業者や大工さんの施工技術の向上に繋がっていくとよいと思います。長野県は、10年前から住宅政策に取り組んでいます。結果、断熱性能の高い住宅で県内で施工数を増やす業者が実際に生まれています。県では「信州健康ゼロエネ住宅」の指針をまとめて設計の方々に普及させています。これからのリフォームにとって、私は建築部門と福祉部門との連携が欠かせないと思っています。断熱工事や太陽光発電パネルの設置を経済力のある人だけのものとせず、生活弱者の方々にも提供していく。アーティストの皆さんもこういう輪に入って行く面白いかもかもしれません。

2つ目は持続可能なまちづくりです。2050年までの時間、少し落ち着いてしっかりやろう、今、足腰の強い街に作り変えようというチャンスと考えたほうがいいのかもかもしれません。自家用車が移動の中心になっている街から、歩いて楽しめるコミュニティへ。都市計画、農村計画、公共交通などともに考えていく。実際に今、北海道や岩手では脱炭素型の新しい街をつくるというような動きがあります。

3つ目は、再生可能エネルギーの導入です。太陽光発電が今、非常に便利になり、導入しやすくなりました。設置費用を払わずに自宅に設置できる、というようなサービスもあります。今、企業は再生可能エネルギー 100% の電気を「買う」時代が来ているわけなのですが、歴史的に日本の電気料金は非常に高い。化

石燃料を買っているからです。なので、これから自分で賄える電気を増やす、一番は再生可能エネルギー、ということになります。太陽光発電は自宅を増やすことができます。

4つ目は脱炭素経営。松本平では「ゼロカーボン・コンソーシアム」という組織を作って今 100 社以上の中小企業が集まっています。私が理事をやっている「自然エネルギー信州ネット」では、伊那谷、東信、諏訪地域で、企業と行政のネットワーク化で地域主導の再エネ事業を進めるお手伝いもしています。

「これによって何ができるのか?」、一言で言えば、脱炭素社会に変化させていく時に「誰も取り残さない」ということです。事業者も高齢者も、脱炭素社会への変化の中で、多くの方が関わるとっかかりがあるということをもっと申し上げていきたい。1つ1つ地域に根ざして地道に取り組み方向性を出していくということが、遠回りのようなのですが、27年後のゼロカーボンに繋がっていくし、推進を早めていく道筋なのではないかということです。

最後に、図(★12)で示されているのは SDGs に関する日本の通知表のようなものです。達成度が低いものが7つピックアップされていますが、ジェンダー平等からパートナーシップまで、多くの課題が気候変動に関わっています。意思決定に女性の視点が入っていないということ自体が、旧来社会からの変革をいかに遅らせているかということは、世界各国を見れば明らかとも思っています。SDGs の目標達成に向けて社会を変えていかなければいけないということになります。

| ディスカッション |

## 「アート × ゼロカーボンの 新たなコミュニティ運動に向けて」

**ロジャー** 特に私たちが住んでいる長野県の取組はすごく響きました。エネルギーを具体的に減らす目標の議論、対話には、美術館、博物館や文化施設も積極的に入ってこなくてはいけないと改めて思いました。

**茅野** 信州大学もまだ、再生可能エネルギー100%の電気を買うことが財政上でできていないというのが現実です。私の自宅は再エネ100%のプランで、購入してみるとそんなに高くなりません。生活からCO2は出ていますが、太陽光発電パネルのオーナーになって発電量をカウントして、出しているCO2以上に削減量に投資をするという形で、ネットゼロに中和できていると思います。

**山口** 「松本経済新聞」は地域のトピックを紹介しているサイトです。街中で取材をしていると、例えばマツモト建築芸術祭の会場になった古い建物が活用されて新しいお店ができる、というのは嬉しい動きだと思いますね。ただ、古いものを残してくれて嬉しいと思うと一方で、使う人には不便なところもあるし、地球環境的には新しいものを建てた方が良い部分があるのかなと思いました。どうなのでしょうか。

**茅野** マツモト建築芸術祭では、主催者から依頼を受けて、芸術祭のCO2排出量の測定をお手伝いしました。

日本の建物は長く使うことを前提してこなかったんですね。欧米に行くと300年普通に使われていて、リノベーションをしながら資産価値が上がっていく。私は常にその差を感じています。ZEBを作るとき、改修にお金をかけるよりは新築した方が早いという考え方もあるだろうと思います。他方、社会をゼロカーボン型に変えていくときに、自分の愛着のある建物を使い続けるという選択肢を維持していくことも本質かなと思います。かといって、灯油を1年間で500リッターも使うような暮らしは切り替え方があるのではないかな。そういった暮らしは経済的でもないわけですね。

**金井** 授業で気候変動の話をする傍らで文化財保護も扱っていますが、60年代以降ますます、文化財が個々の有形物というよりエリアで考えられるようになって、保存や修復、文化の核心で大事にすることに、ゼロカーボンの問題も近づいてくるのではないかと思います。

**野村** 茅野先生が「我慢じゃ無理だな、社会の構造を変えない」とおっしゃいま

したが、文化芸術に関わる人は「面白い／楽しいこと」を考えると、ここで「我慢じゃ無理」な問題を考えるということは、意味があるかなと思いました。

**茅野** 「面白い」は大事な考え方です。NPO法人上田市民エネルギーの「相乗りくん」（太陽光パネルを共同で設置する取組）に参加する方にインタビューさせてもらうと、みんな違った観点で「面白いんですよ」と言い出します。それぞれが刺さるポイントは実に多様。それをいかに増やせるのかというのが、私はゼロカーボンの達成でも大事なポイントと思っています。

**ロジャー** 気候変動を語る際、当然科学的な言説がまず先に来ますが、実はアーツというのももう一つのエビデンスをもっているのではないかと思います。19世紀半ば、産業革命誕生の瞬間から異議申し立てする芸術家がたくさんいる。イギリスで言えば、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、アーツ&クラフツ運動、日本でも大正、昭和時代に白樺派運動、武者小路実篤、柳宗悦、民藝運動、と錚々たるメンバーが「この生き方でいいのか」と、茅野先生もおっしゃっていた「本当の豊かさ」をめぐる議論を200年以上続けてきている。

子どもの頃に山に初めて行った時とか川で泳いだ時とか、自然に覚えた深い感動。英語で affect（情動）という言葉があります。肌で感じる、理性ですぐには言葉にできないけれど確実に体に影響している。これからの気候問題を考える

上で、アートのその部分も大事なのかなと思います。

**山口** 以前、食品ロスの問題を扱うなかで、書店さんの「昨日のパン屋さん」という取組を取材しました。廃棄予定のパンを無料で配布するというものなのですが、そこに来たお子さんが「いつも助かっています」と主催者の方に手紙を渡した。それに主催者の方は「子どもにそのようなことを言わせてはいけない」とおっしゃっていて、確かに、その格差をフラットにしていくアイデアがもう一個加わると、もっと進んでいくのではないかという気づきがありました。

**茅野** 社会構造そのものを変革していかなければいけない問題であるということ、そもそも今の社会は本当に正しいのか、フェアなのか、ということですね。ゼロカーボンはそういった社会のあり方そのものが問われ続けている問題だと私は思っています。科学的に正しい話と、科学では解けないけれど直感的に正しいと思う方向性があった時に、いかにバランスをとり折り合いをつけていくのか。地球の生態系の中に、我々が脱炭素型で新しい生態系を再構築していくということと、深く繋がってくると思います。

**金井** 自然環境だけ、社会環境だけではなく、先ほど「affect」という言葉も出しましたが、感情や主観性のレベルまで色々な生態系が絡む中で、改めてアートの議

論も組み込んでいければと思うところです。

**質問者1** 太陽光パネルやEVを作る時に出るCO2や、レアメタル採掘に関する問題など、どのように情報を捉えたいのか迷っています。

**茅野** 現在世界で流通している太陽光パネルのほとんどが有害物質は含まれていないと理解しています。EVなどで必要な蓄電池については、南米やアフリカで森林を切り開いてレアメタルを採掘している例があります。既に「フェアな蓄電池を選んでいく」という動きが始まっていて、企業の社会的責任も求められてくると思います。

私は長年青森の六ヶ所村で放射性廃棄物の問題に取り組んできましたが、今の社会をそのまま続けることのほうが悪手なのではないか、ということは、科学的にも直観的にもあると考えています。

**質問者2** ゼロカーボンとアートの繋がりが見えなかったというのが正直な感想です。アートを通して人々の意識を変えてゼロカーボンに移行するのか、や、ゼロカーボンへ向かうためのアートができる強みについて教えていただきたいです。

**ロジャー** アートと気候危機の関係には、大まかに2つがあります。1つはアート作品が気候危機を主題にメッセージを出し、鑑賞した人の感情が動き意識が変わっていく。もう1つは、産業分野としてのアートが相当なカーボンを出しているのを、それ

をゼロにしていくことです。いま、アーティストも、美術館・ギャラリーも、態度表明をする時代だと僕は思っています。特に日本の美術館は、今まで「ニュートラル・客観的・中立な立場」をとっていましたが、気候危機に関してはそのようにはできないと思います。「あなたたちは地球側ですか？地球側じゃないですか？」地球側であれば声明を出してください」と、アート業界の中で、ギャラリー、美術館、アーティスト同士が、どんどん強く結びついて社会の中の声として初めて力を持つ。そういう運動がまさに今、日本で起こらなくてはならない時に来たなと思っています。

**野村** 「ゼロカーボンに向けて、社会の構造を変えなければいけない」という時に、先ず、価値観を変えないといけませんね。アート・芸術の歴史はこの「価値観を変える」ということをしてきた歴史だと思います。アートとゼロカーボンの取組が価値観の変化をどう引き起こせるのかということが焦点になる。アートに関わっている人は皆この事と関係していると思います。

ロジャーさんがおっしゃった「地球側に立つ」という視点は示唆的です。例えば「温室効果ガスを吸収するアート」のような急所を突くと一気に価値が転換するかもしれない。誰が初めに考え、実践するか。アートにとって実は今すごくチャレンジングな時期なのではないかなと、ワクワクします。

そもそも

今の社会は本当に正しいのか、フェアなのか、ということですね（茅野）

いま、アーティストも、美術館・ギャラリーも、態度表明をする時代だと僕は思っています（ロジャー）

アートとゼロカーボンの取組が価値観の変化をどう引き起こせるかということが焦点（野村）



山口敦子  
(株)タナカラのウェブディレクター、エンジニア、ライター。広域松本圏のビジネス&カルチャーニュースを配信する「松本経済新聞」編集長。



# 信州大学人文学部と Shinshu Arts-Climate Camp

Shinshu University Faculty of Arts with Shinshu Arts-Climate Camp

「人文学とは、『人間とは何か』を考える学問である」とは、筆者が学部生のころにある先生からいただいた言葉であるが、今回のテーマである「気候危機」は、どちらかといえばサイエンスの領域で扱われることが多い。

ただ、その影響が身に迫る今日、気候危機は全ての人が共有するテーマである。それでは、人間やその営みと向き合ってきた人文学は、このテーマをどのように扱うか。このコラムで紹介する二つの実践は、そのヒントを与えてくれたように思う。

「えこるじんぶん」は、一見繋がりそうにない「アート」と「ゼロカーボン」をホワイトボードに並べ、様々な人と連想する言葉を書き連ねることで、二つが繋がりゆく地図を浮き上がらせた。また「井上唯 ITONAMI 風景に向かって旗をかかげる」では、アーツ

トの井上唯さんが、信濃大町で住民の方と刺繍し山頂で掲げた旗を松本へ持ち込み、学生が制作した旗と共に新たな「旗のある風景」を描き出した。

二つに共通するのは、私たちを取り巻く街や自然に思いをいたし、あらためて人間の営みを見つめるきっかけを参加者 / 鑑賞者にもたらしたことだと思う。このことは、広く捉えた「環境」と向き合うきっかけをもたらしたとも言い換えられるかもしれない。

あまりにも暑い夏を経て、今ある危機に絶望感を抱く人も少なくないだろう。しかし、そもそも私たちが守るべき「環境」とは何だろうか。絶望する前に、「私の環境」を考えることからアクションは始められる。(中野多恵)

Shinshu Arts-Climate Camp is a collaborative project between the Shinshu Arts Council and the Faculty of Humanities of Shinshu University. This column introduces two initiatives independently planned within the Faculty of Humanities. The first is the “Humanities-Ecology Study Group. Led by three members of the master’s program, the group conducts studies and research on the relationship between art and ecology. This year, we held a workshop using a whiteboard to think about “art”

and “decarbonization”. The second is the “Yui Inoue ITONAMI: Raising a Flag Against the Landscape” exhibition. Organized by the Art Workshop Seminar, to which 37 undergraduate students belong, the exhibition featured flags created by artist Yui Inoue with local residents in Shinano-Omachi. Both of these works resonated with the Arts Climate Camp in that they approached the familiar “environment” from the perspective of human activities.

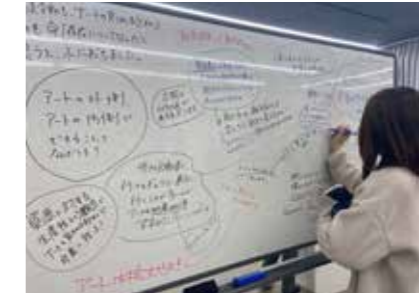
## 修士課程 人文 - エコロジー研究会

人文 - エコロジー研究会（通称えこるじんぶん）は、人文学部の修士課程 3 名によって発足しました。Shinshu Arts-Climate Camp と並走する形で、アートとエコロジーの関わりについて学習や調査を行っています。



第 0 回 10 月 25 日 (水)  
試しのホワイトボード  
信州大学松本キャンパス人文広場

学生が集まる広場へホワイトボードを持ち出し、通りがかった方々とアートとエコロジーを核にマインドマップをつくりました。



第 1 回 11 月 23 日 (木)  
旅するホワイトボード  
長野県立美術館

〈会議〉第 3 回の後、来場の方々に感じたことをホワイトボードへ書いていただき、アートと気候変動について考えを交換する場をつくりました。



第 2 回 12 月 13 日 (水)  
宮沢賢治 朗読会  
信州大学松本キャンパス中央図書館

童話「おきなぐさ」の朗読を味わい、感想を共有する場をひらきました。オキナグサは絶滅危惧種に登録されていることも踏まえながら、参加者の方々とエコロジーについて考えました。

## 芸術ワークショップゼミ (美術系)

### 井上唯 ITONAMI 風景に向かって旗をかかげる

2023 年 12 月 21 日 (木) ~ 12 月 26 日 (火)  
会場 ギャラリーノイエ  
(長野県松本市大手 3-2-17)

芸術ワークショップゼミ (美術系) は今年度、アーティストの井上唯さんを招聘し、展覧会を開催しました。所属する学部生 37 名が中心となり、井上さんが「信濃大町アーティスト・イン・レジデンス 2023」において滞在制作された旗を展示しました。ギャラリーでは併せて、ハギレを使ったワークショップやまちあるき、アーティストトーク、旗に関するアンソロジーや学生が制作した旗の展示も行いました。



ワークショップ「旗を TSUKURU」「街を ARUKU / 旗を KAKAGERU」12 月 23 日 (土)



### 井上唯 Yui Inoue

1983 年愛知生まれ。滋賀在住。各地に滞在して、それぞれの土地の自然や人々の営みから学び、そこから着想を得ていくことで、この世界の仕組みや目に見えない繋がりを“モノ”を介して想起させるような光景をつくり出したいと考えている。素材と対話しながら手を動かしていくことを軸に「生活」と地続きにある「制作」の在り方を模索している。





信州アーツ・クライメート・キャンプ〈会議〉第2回  
アート × 気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～

[日時] 2023年(令和5年)10月1日(日) 13:40～16:45  
[会場] 上田映劇(長野県上田市中央2-12-30)

[第一部] 映画「グレート・グリーン・ウォール」上映  
[ハーフタイム] 「サブニュマ」によるアフリカダンスパフォーマンス  
[第二部] ディスカッション  
モデレーター 藤川まゆみ(NPO 法人上田市民エネルギー 理事長)  
ロジャー・マクドナルド(インディペンデント・キュレーター)  
スピーカー 白井ゆみ枝(画家・アーティスト)  
佐藤公哉(音楽家・作曲家)  
竹内利彦(サブニュマ)

[主催] NPO 法人上田映劇、  
信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)、  
信州大学人文学部、長野県

令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業



ハーフタイム  
「サブニュマ」によるアフリカダンスパ  
フォーマンス



ディスカッション

## 信州アーツ・クライメート・キャンプ 〈会議〉第2回

### アート × 気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～

Shinshu Arts-Climate Camp 〈会議〉第2回は、「アート×気候危機～不可能かもしれないビジョン～」でした。大正6(1917)年創業の上田映劇で開催され、冒頭では映画『グレート・グリーン・ウォール』が上映されました。この回では、映画を通して海外の気候危機とその取り組みを学んだうえで、アーティストたちとの対話を通して自分たちのビジョンを見出すことが目標です。

気候変動を食い止めるため、アフリカ大陸を横断して植林を行う“Great Green Wall(緑の長城)”計画。映画は、この壮大なこのプロジェクトを推進するために、アフリカ横断の旅にでたマリ出身

のミュージシャン、インナ・モジャを追ったドキュメンタリーです。上映後、映画の舞台でもあるアフリカの音楽やダンスをサブニュマの皆さんが披露し、会場を盛り上げました。最後にディスカッションが行われ、案内人のロジャーさんと上田市民エネルギー・藤川まゆみさんの進行で、県内在住のアーティスト3人(白井ゆみ枝さん・画家/アーティスト、佐藤公哉さん・音楽家/作曲家、竹内利彦さん・サブニュマ)が登場しました。

トークでは、映画を通して考えたことや、アーティストが日々の創作の中で感じていることが語られました。例えばロジャーさんは、映画がアーティストの

「witness: 証人/目撃者」としての役割を示していると考えたそうです。それに対し佐藤さんは、自身が郷土芸能を取材し「目撃」してきた経験から、東京へのアクセスが困難な場所に郷土芸能も自然に対する意識もあることが多いと指摘しました。

また、白井さんは絵を描く時、「こういうことを込めたい」と思う以上に自分の背景が絵に反映されていると言います。だからこそ、実際に行動することが大事だそうです。藤川さんは、一市民ができる最大の気候変動対策が「声をあげること」だとされていることに触れながら、会場に行動を促しました。

## Art x Climate Crisis

- A vision that may not be possible -

The second Shinshu Arts-Climate Camp <Conference> was “Art x Climate Crisis - A Vision that May Be Impossible. The event was held at the Ueda Eigeki Theater, established in 1917, and opened with a screening of the film “The Great Green Wall”. The goal of this session was to learn about the climate crisis and its efforts in other countries through the film, and then to find our own vision through dialogue with various artists. The “Great Green Wall” project is a tree-planting project across the African continent to try to stem climate change. The film is a documentary about Inna Moja, a musician from Mali who embarks on a journey across Africa to promote this

ambitious project. After the screening of the film, the audience was treated to a performance of music and dance from Africa, the setting of the film. Finally, a discussion was held, facilitated by Roger McDonald and Mayumi Fujikawa of Ueda Citizens Energy, with three artists living in the prefecture (Yumie Shirai, painter/artist; Kimiya Sato, musician/composer; and Toshihiko Takeuchi, Subnuma Dance Troupe) taking the stage. In the talk, the artists shared their thoughts on the film and what they felt in their daily creative process. Roger, for example, said that he thought the film showed the artist’s important and historical role as a “witness”, citing the example of

the Spanish painter Francisco Goya. In contrast, Mr. Sato, based on his own experience of covering and “witnessing” local performing arts, pointed out that often there are both local performing arts and awareness of nature in places that are difficult to reach in Tokyo. Ms. Shirai also said that when she paints, her background is reflected in the pictures in ways even she is unaware of. That is why it is important to actually take action, she suggested. Ms. Fujikawa urged the audience to take action, noting that the greatest action a citizen can take against climate change is to “speak up”.

## アート × 気候危機

### ～不可能かもしれないビジョン～

**藤川(司会)** 私はNPO 法人上田市民エネルギーとして上田を拠点に「相乗りくん」という市民による発電所の運営、学校・教室の断熱ワークショップのサポート、持続可能な街づくりを考える「上田リバース会議」などをやっています。気候変動を止めていこうという活動を仕事にしています。

今年の夏、10万年間の中で地球が最も暑かったそうです。そして、今ここにいる皆さんの人生において、もしかすると最も涼しい夏かもしれません。そのくらい気候変動が身近になってきました。これはCO2を主とする温室効果ガスを人間が出し続けたせいです。私たちを含む先進国が出し続けてきたそのCO2によってアフリカでこういったことが起きています。

**白井** 私は、長野県上田市に生まれ育

ち、15年前に東京から帰ってきてここを拠点に活動をしていて、主に大きな絵画作品を描いて発表しています。上田では、2017年に「上田全天気候展」というタイトルの個展をサントミュージアムで開きました。作品をどんな場所でどう展示するかを、自分で問いたくて、10年前には詩を書く女性と一緒に上田の駅前にある笠原工業さんの蔵を使って自主企画の展示をしました。

今日の映画を見て「私たちは大きな穴を開けてしまったんだ」という感じがしました。映画に登場する3人の男の人が「穴の中にいるようだ」と言っていて、その穴を掘った加担者の1人としての辛さがひしひしとありました。

**佐藤** 作曲、演奏、録音、劇伴制作な

ど音楽にまつわる色々なことをやっています。松本市の旧四賀村という山村に住んでいて、東京から移住してもうすぐ6年半になります。

今日の映画を見て、本当に色んな衝撃がありました。僕は、生まれ育ちが北海道で、高校から東京だったのですが、もっと土に近い生き方をしなければいけないのではないかなと思い始めたきっかけが3.11でした。その時の問題意識は特別「環境」ではなかったのですが、原発事故とエネルギーの使い方、それを推し進める経済システムなどを考えている中で、消費者として東京のメガシティで生きているだけで、電気を使い、環境負荷をかける社会システムに加担している。それでオリンピックが決まって移住を決めた。自分と環境との関わりに関するアクションとして、今までで一番大きかったのは移住してきたことかなと思いつつ見っていました。

**竹内** 僕は、西アフリカのギニアの音

楽を勉強し、アフリカに行って生活してみたくて行き来を繰り返す中で、本当に音楽の大切さを知りました。そして、各地にチームコミュニティができたらいなと思ひ、活動しています。

もう一つ、僕は米を無農薬無肥料で作っています。はざかけをしているのですが、だいたい2週間干すところが今年1週間干したところで籾水分が14%を切ってしまった。雨が全然降らず暑いので、気候変動を本当に感じているところです。映画に関しては、改めて本当に重いこともたくさんあるんだけど、音楽を使って、できることをして、生きていこうと思っています。

**ロジャー** 映画を見て改めて思ったのは、アフリカ大陸が苦しんでいる気候変動の根本的な原因は、北半球の産業革命以降、私たちの豊かな生活を支えてきたCO2の排出であるということです。英語では“climate justice”つまり「気候正義」と

いう言葉が普及していて、地球上の場所によって影響は全く同じではないんですね。そして、排出量も全く違う。いかに1人1人の共感の力、想像の力を地球全体のレベルで持つ大事さを改めて思いました。

**藤川** 私はアート活動をやっているわけではないのですが、今回の活動の原点にアートがあったと気がついたので。

1994年に、千葉の盲学校の子どものための大きな作品展を広島県の私の実家の街で企画したことがありました。「作品がどう環境から生まれるのか？」と思い盲学校へ行ったら、全盲の子が結構廊下を走っている。美術の時間は、先生が「自由に作っていいよ」と言う。子どもたちが肯定される環境の中で、自分でも自分のことを肯定して、大きい作品を作る力が湧いてきて、それを発揮していると思いました。

2007年に『穴ヶ所村ラブソディ』という映画に出逢いました。その中で感じた

のは、原発を取り巻く出来事が、みんなの力を削いでいく。これは原発が象徴的なだけで、世の中にそういうものがいっぱいあります。

人は皆種を持っていて、水が注がれた時に芽が出て力を発揮する。その水のような存在が私にとってアートだと捉えています。

**ロジャー** 映画を見ていて、主人公のミュージシャンが芸術文化ができることの1つを示していると思いました。アーティストは「witness:証人/目撃者」である。状況の現場まで行って、自分の目と耳で聞き取りコミュニケーションする。音楽や歌詞にして、他の音楽家とコラボレーションして、パフォーマンスする。

**佐藤** ミュージシャンが目撃者・証言者の役割も果たしているという話を聞いて、ハッとしました。

私は「MIKUSA PROJECT」で各地域

### 今日の映画をみて『私たちは大きな穴を開けてしまったんだ』

#### という感じがしました(白井)

モデレーター 藤川まゆみ (NPO 法人上田市民エネルギー 理事長)

ロジャー・マクドナルド

スピーカー 白井ゆみ枝 (画家・アーティスト)

佐藤公哉 (音楽家・作曲家)

竹内利彦 (サブニュマ)



〈第一部〉映画『グレート・グリーン・ウォール』上映

監督・脚本：ジャレッド・P・スコット 製作総指揮：フェルナンド・メイレス他 出演：インナ・モジャ、ディディエ・アワディ、ソングイ・ブルース、ワジェ他 配給：ユナイテッドピープル 原題：The Great Green Wall 2019年 / イギリス / 92分 / ドキュメンタリー © GREAT GREEN WALL, LTD <https://unitedpeople.jp/africa/>

### アーティストは witness: 証人 / 目撃者である(ロジャー)



〈ハーフタイム〉  
「サブニュマ」によるアフリカンダンス  
パフォーマンス

サブニュマ (代表 竹内利彦)  
竹内夫婦と仲間達で「サブニュマ」として活動。西アフリカのタイコ、ダンス、歌のコンサートやワークショップをやって笑顔の輪を広げる。Sabunyuma(サブニュマ)とは西アフリカ、マリク語で『素敵な出会い』『皆の幸せ』という意味。

の郷土芸能を現地で取材し稽古をつけてもらって、それを元に音楽を作っています。直接的に環境や社会に対して問題提起をしたりしているわけではないのですが、東京へのアクセスが困難な場所に素晴らしい郷土芸能が残っていて、昔ながらの生活様式や自然に対する意識もある。同時に過疎・少子高齢化でどう保存したらいいか悩んでいるところが多い。

昔ながらの環境負荷の少ない生活様式と、現代社会でのサバイバルの仕方を、音楽の抽象的な表現の中で1つのビジョンとして提示しようとするのは、社会問題・環境問題に対する試行錯誤と共通するところもあると思いました。

**竹内** アフリカの太鼓を広めるために色々なところへ行くのですが、とにかくいつも対話をしています。「どっちでなければいけない」ではなくて、それぞれの話ができるというのはすごく大事だと思う

ています。自分もアフリカのことに関わっているの、喜びを持って集まったお金が、サヘル地域に届くといいなと考えていました。

**ロジャー** 「喜び」という言葉は、気候変動問題にとってすごく大事な言葉だと思います。現実を見始めると暗くなるから、活動家もいかに共に喜びや希望をキープできるかがリアルな問題としてあります。アートは喜びを高める、あるいは思い出させる1つの大事なツールだなと思います。

**白井** 私は絵を描いて、「こういうことを込めたい」と思っても、そう思う以上に自分の意識の背景が出てきてしまいます。気候変動を意識しているのだったら、そういう行動をしていないとそういう絵にならない。絵は想像以上に嘘がつかない。したいと思うのだったらそこを正さないとどうしようもない。東京ではそれが

やりづらくなったので、私はここに住んでいるという感じがあります。

**ロジャー** アーティストが実は主体性とパワーを持っているということを忘れてしまいがちです。展示会のオファーが来ると「ありがとうございます」となるのだけど、一言「リサイクルできる梱包でお願いできますか」と言える立場なんですよ。アーティストが声をあげると意外と業界も変わる、そういう関係性が生まれてきます。

**竹内** 今のロジャーさんの話はしっくりきて、「アーティストが気候変動に困んだことをする」のではなく、きっとアーティストはそのままいい。その中で繋がっていくのではないかと思いました。

**藤川** 現在はまだゼロカーボンで暮らすことはできません。今は過渡期なので、

市民が発信して声を出したり、態度で示したりする行動や変化が社会を変える原動力になる。個人の努力だけではないと思うんです。社会システムが変わらないと。

**ロジャー** 映画で、「shared responsibility: 共有する責任」という良いフレーズがありました。気候変動問題になぜ芸術家たちは取り組まなければいけないのか。簡単に言うと、同じ地球に住んでいてみんなが抱える責任だから。shared responsibility について、ひとりひとりがどうやってresponsibility を表現するかがこれからの時代は大事ですね。

**佐藤** 先日東京で見たビョークの公演で、スペクタクルな演出でCO2をたくさん排出するだろうなというものだったのですが、途中でバツと映像が始まってグレタ・トゥンベリのビデオメッセージが挿入される。多分、ビョークの葛藤の末の1

つの答えだったのかもしれないと思いました。作品でやりたいことをやる、その上で、メッセージの発信、ということが彼女の決断だったのかなと思います。

僕たちも発言しなくていいという状況はもう終わると思うんです。早め早めに発言していくに越したことはないだろうと思います。

**藤川** お産の場面だったと思うのですが、「今私たちが頑張っていることが20年後のこの子どもたちの恩恵になる」というようなセリフがありました。このままずっと暑くなると、2100年には最大で5.7°C気温が上がるというちょっと考えられない地球になります。

**白井** 私が住んでいる家は150年前に作られた古民家で、地域はずっとクーラーがなくても平気だったのに、この2、3年でみんな入れ始めています。暑かったらクーラーを入れればいいのか、とそれだけ

の問題ではないし。

**竹内** ギニアでは生と死が近いんです。元気だった子どもが次の日亡くなっていたり、大人もそうです。日本はまだやるうと思っただけ。生きていられる。だからみんなで繋がって、僕も歌を作ったりするんですけども、あたたかく広がっていく歌ができた方がいいなと思っています。

**藤川** 映画の中で主人公のインナ・モジャが、「誰もが未来を変える力を持っている」と言っていました。一市民ができる最大の気候変動対策は「声をあげること」だと言われています。アーティストが声をあげてくださったら、「あ、声をあげてもいいんだ」と、社会を変える原動力に繋がっていくかなと思います。

アクセスが困難な場所に素晴らしい郷土芸能が残っていて、昔ながらの生活様式や自然に対する意識もある (佐藤)

『どっちでなければいけない』ではなくて、

それぞれの話ができるというのはすごく大事だと思っています (竹内)

気候変動を意識しているのだったら、

そういう行動をしていないとそういう絵にならない (白井)

気候変動になぜ芸術家たちは取り組まなければいけないのか。簡単に言うと、同じ地球に住んでいてみんなが抱える責任だから (ロジャー)

アーティストが声をあげてくださったら、「あ、声をあげてもいいんだ」と、社会を変える原動力につながっていく (藤川)



相乗りくんプロジェクト  
初期費用不要の太陽光発電。誰でも出資でき、みんなの太陽光パネルを屋根に相乗りさせて増やす自然エネルギー。これまでに74か所、1億9千万円の出資。



藤川まゆみ  
2007年に映画「六ヶ所村ラブソディー」を観て「社会の問題の解決のカギはコミュニケーションだ」と、エネルギーがライフワークに。教室断熱ワークショップや、持続可能なまちづくり「上田リバース会議」で、市民が主人公の脱炭素を推進中。



上田全気候展  
2017年2月23日～4月16日  
上田市立美術館 サントミューゼ  
撮影：加倉井和人



白井ゆみ枝  
上田市生まれ。女子美術大学卒業。個展、グループ展の活動の傍ら、装丁やイラストも手がける。近年では、子どもたちや学生とのワークショップ、まちあるきマップの企画制作など、地域に住む人とともにつくりだす活動も行っている。



MIKUSA PROJECT 2022 -WAGO-  
「和合の念仏踊り」(国重要無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産)の取材を経てクリエイションを行った、音楽とダンスのパフォーマンス。



佐藤公哉  
音楽家・作曲家・歌手。現在松本市を拠点としている。県内や東北で郷土芸能の稽古・取材を行い、太鼓のリズムや歌の節回しなどを元に楽曲を制作する「MIKUSA PROJECT」を主宰。舞台・映画音楽や子どものワークショップなども手がける。



信州アーツ・クライメート・キャンプ  
〈会議〉第3回

## 地球の今、美術館の明日 ～持続可能な未来をめざして～

Shinshu Arts-Climate Camp 〈会議〉第3回として、長野県立美術館にて「地球の今、美術館の明日～持続可能な未来をめざして～」を開催しました。2020年、ロンドンの美術ギャラリーやアート関係者によって設立された「ギャラリー気候連合 / Gallery Climate Coalition : GCC」。その実践を学びながら、長野県内の取組の推進について考えることが目的です。

まず、GCCのアクティブメンバーでもあるNPO法人Arts Initiative Tokyoの塩見有子・ディレクターから「『ギャラリー気候連合』の実践と、求められる転換」というテーマでご講演いただきました。その後、塩見さんと案内人2人に、松本透・長野県立美術館館長と中嶋実・小海町高原美術館学芸員が加わり、持続可能なア

トやミュージアムについて意見が交わされました。

講演ではまず、「アートと気候変動」というテーマはアーツプラクティス（実践）とアーツシステム（産業）の2つの切り口からアプローチできることが示され、後者に焦点が当てられました。また、塩見さんは来場者全員に配布したGCCが示す「脱炭素アクションプラン」の抜粋を参照しながら、グリーンチームの結成と二酸化炭素排出量の計測からアクションを始めることを呼びかけました。

トークでは、最初に松本館長から、「2030年までの脱炭素目標達成のために、美術館は事業縮小せざるを得ないのか」というテーマが投げかけられました。それに対し、ロジャーさんから1年間輸

送ゼロで館を運営したストックホルム近代美術館の事例が紹介されたり、金井さんから長野県立美術館の展示から気候変動へメッセージを発する可能性が示されたり、「コレクションの再発見」がキーワードとして浮かび上がりました。また、ロジャーさんの「ミュージアムが社会変革を起こす主体となれるか」という問いに対して、中嶋学芸員はそもそも現代美術にはその側面があることを指摘し、塩見さんはミュージアムが関係する団体と協力しながら循環型システムをつくることの重要性を強調しました。最後に7名の方からご質問いただき、会場全体で議論が行われました。



信州アーツ・クライメート・キャンプ〈会議〉第3回  
「地球の今、美術館の明日～持続可能な未来をめざして～」

[日時] 2023年(令和5年)11月23日(木) 13:30～16:00  
[会場] 長野県立美術館1階交流スペース(長野市箱清水1-4-4)

[レクチャー] 「『ギャラリー気候連合』の実践と、求められる転換」  
塩見有子(NPO法人Arts Initiative Tokyoディレクター)

[ディスカッション] 「サステイナブルな長野県のアート/ミュージアムに向けて」  
登壇者  
塩見有子  
金井直(信州大学人文学部教授)  
ロジャー・マクドナルド(インディペンデント・キュレーター)  
松本透(長野県立美術館館長)  
中嶋実(小海町高原美術館学芸員/  
シンビズム ワーキング・グループ議長)

[主催] 信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)  
信州大学人文学部、長野県立美術館、長野県

令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業



## Earth Today, Museum Tomorrow - Toward a Sustainable Future

Shinshu Arts-Climate Camp's 3rd Conference, "Earth Today, Museum Tomorrow: Towards a Sustainable Future," was held at the Nagano Prefectural Museum of Art. The Gallery Climate Coalition (GCC) was established by art galleries and art professionals in London in 2020. The purpose of this meeting was to learn about their practices and to consider how to promote their initiatives in Nagano Prefecture. First, Ms. Yuko Shiomi, Director of Arts Initiative Tokyo, a non profit organization and active member of GCC, gave a lecture on the theme of "The Practice of Gallery Climate Coalition". Ms. Shiomi and her two guides were later joined by Toru Matsumoto, Director of Nagano Prefectural Museum of Art, and Minoru

Nakajima, Curator of Koumi Kogen Art Museum, to exchange views on sustainable art practices and museums. In her lecture, Ms. Shiomi first indicated that the theme of "art and climate change" could be approached from two broad angles, arts practice (creative practices) and arts system (the arts industry), with her lecture focusing on the latter. Shiomi also referred to an excerpt from the "Decarbonization Action Plan" presented by the GCC, which was distributed to all visitors, and called for action to begin with the formation of green teams and measurement of carbon emissions. During the talk, Director Matsumoto first posed the theme, "Will museums have to scale back their operations in order to achieve their decarbonization goals by 2030? In

response, Roger introduced the case of the Museum of Modern Art in Stockholm, which realized their exhibitions program with zero art transportation for one year, and Kanai showed the possibility of sending a message about climate change through the Nagano Prefectural Museum of Art's exhibitions programming. In response to Roger's question about whether museums can be agents of social change, curator Nakajima pointed out that contemporary art has that aspect to begin with, and Shiomi emphasized the importance of museums creating a recycling system in cooperation with related organizations. Finally, several people asked pertinent questions, and the entire audience engaged in lively discussion.



「レクチャー」

## 「ギャラリー気候連合」の実践と、求められる転換

塩見有子 (AIT ディレクター)

AIT は 2001 年に活動を始め翌年に NPO 法人化した団体です。キュレーター、コレクター、弁護士、それからマネジメントという専門性を持つ人たちが創立メンバーとして立ち上げました。現代アートの教育活動、アーティスト・イン・レジデンスを通じた国際交流、企業や行政のアートプログラムのコンサルティング事業の 3 つの柱を持って活動をしています。

2019 年のアーティスト・イン・レジデンスの活動で AIT にとってちょっとした事件が起きました。スウェーデンから来たアーティスト、アーロン・ランダールが、初めて、飛行機ではなくシベリア鉄道を使って来日しました(★1)。飛行機だと 1 日ちょっとで日本へ来られるのですが、シベリア鉄道で来ると 2 週間ほどかかるんですね。3 ヶ月の滞在のうち、行きで 2 週間、帰り 2 週間、彼はスウェーデンから日本まで、シベリア鉄道の中から見えている風景や出会った人々も取り込んで、道中も彼は作品制作の場として利用していました。

私たちの中では、飛行機で行くことを当たり前だと思っていたので衝撃を受けました。よくよく聞いてみると、彼が暮らす北欧では環境負荷に対する認識が当たり前のようにあって、実際行動に移すアーティストたちがたくさんいるということでした。彼を日本に送ると決めお金を出してくれたパートナーの財団もインセンティブを与える仕組みを作っていました。つまり、自分たちのアートの活動が、何らかの環境負荷を与えていることに対して意識的になるのが当たり前、「そういう動きが今、ヨーロッパ

の中ではあるんだ」と思いました。後から知ったことですが「Flight Shame」つまり、飛行機に乗ることで環境破壊に加担することを恥ずかしいことと見なす新しい言葉が生まれていたそうです。

今、私たちは、地球上のどこにようと、異常気象、産業汚染による健康被害、政情不安、民族紛争など様々な不安要素を、対岸の火事ではなく身をもって感じる時代に生きている。2019 年に豪雨被害で川崎の美術館の倉庫でほとんどの作品が水浸しになり今も修復活動が続いている現実がある。そういう時代に私たちは、アートの活動を今までと同じようにしていいのだろうか？ そんな風に意識が変わりました。

そして、ロジャー・マクドナルドさんからも、海外のインフォメーションをもらって、AIT の中でもどんだん気候変動に対する活動が必要なのではないかという風に考えるようになりました。

アートと気候のことを考えた時にまず、あまりにもテーマが大きすぎてどうやって考えたらいいの？ ということがあると思います。私たちは「アートの実践・展覧会や作品といった ARTS PRACTICES」と「アート界のシステム・アート産業といった ARTS SYSTEMS」の 2 つに分けて考えています(★2)。

「アートの実践 /ARTS PRACTICES」というのは、アーティストたちの作品を通じて環境のことを考えるように促す、あるいは別の視点を作る、何かメッセージを持ったようなものです。



1 Artist in Residence -Aron Landahl  
アーロン・ランダール (スウェーデン) 2019  
Courtesy: Aron Landahl



塩見有子 (AIT ディレクター)  
2002 年、仲間と共に NPO 法人アーツインシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] を立ち上げ、代表に就任。AIT では、組織のマネジメントのほか、レジデンス・プログラムやメルセデス・ベンツやマネックス証券など、企業による芸術支援プログラムのコンサルティングなどを行う。

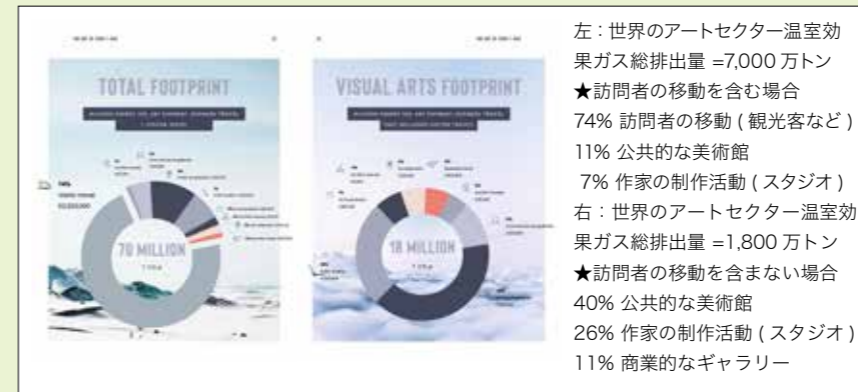
2 左:「私たちのエコロジー:地球という惑星を生きるために」森美術館 右: 作品梱包資材などをリサイクルやリユースすることも可能

### 芸術と気候問題についてどう考えればいいのか？

アートの実践・展覧会や作品  
ARTS PRACTICES



アート界のシステム・アート産業  
ARTS SYSTEMS



3 Julie's Bicycle Report 2020: 'The Art of Zero: An indicative carbon footprint of global visual arts and the transition to net zero'. (with AKO Foundation)  
<https://juliesbicycle.com/wp-content/uploads/2022/01/ARTOFZEROv2.pdf>

「アート界のシステム /ARTS SYSTEMS」というのは、アート界においては様々な活動によって二酸化炭素を出し続けるということがあると思います。その二酸化炭素をどうやって削減するか、現状のシステムに対してどういう風にアプローチできるか。例えば、美術館は一定の温度を保たなければいけない。倉庫にきちんと保管して、未来に向けて財産を残さなければいけない。アーティストが作品を作る時は色々な素材を使い、作品が移動する時にはクレート(梱包用の箱)を使い、使い終わったら廃棄する。そういうシステムです。

「Julie's Bicycle」というイギリスの環境団体が、世界のアートセクターの温室効果ガスの総排出量を算出しています(★3)。

見ると、世界のアートセクターの温室効果ガス排出量のほとんどが「訪問者の移動」であるということが分かります。ロンドンのテート美術館、ニューヨークの MoMA、パリのルーブルのように、世

界中から観光客が押し寄せて展覧会を見に行く。それが温室効果ガス総排出量のほとんどを占めている。世界のアートセクターが出している温室効果ガス総排出量の 7000 万トンというのは、モロッコの排出量(2022 年)と同じです。

次に、訪問者の移動を含まない場合は 1800 万トンになってきます。そうすると、公共的な美術館が維持管理、展覧会をしていくエネルギーに対しての排出量がすごく多い。アーティストのスタジオ、制作活動でも、二酸化炭素が非常に出ていることが見えると思います。作家活動とか商業的なギャラリーにもある。

アートを社会に普及したり維持したりするために必要不可欠なシステムを持続可能な形で行うためにはどうしたらいいか。そういうことに関心を寄せて生まれてきたのが「ギャラリー気候連合 / Gallery Climate Coalition : GCC」です。

「ギャラリー気候連合」は、2020 年 10



4 Gallery Climate Coalition  
Photo: courtesy Gallery Climate Coalition

月に設立されました(★4)。世界最大のアートフェアといわれる「アート・バーゼル」で、2019 年に「気候について話そう」というパネルディスカッションがあり、活動が始まったようです。設立メンバーはイギリスを中心とした主要なギャラリーでした。環境科学者の Danny Chivers さんが、専門家として二酸化炭素排出を一緒に算出しているという点も重要です。今、ベルリン、ロサンゼルス、イタリア、台湾、スペイン、ニューヨークに支部があります。アーティスト、アートのビジネスをしている人たち、ギャラリー、個人、非営利、美術館、美術に携わる人たちの誰にも開かれていて、個人レベルまでメンバーになることができるという風になっています。私たちが入った頃はまだまだ少なかったと思うのですが、この 2 年間ぐらいで 1000 人・団体を超えました。

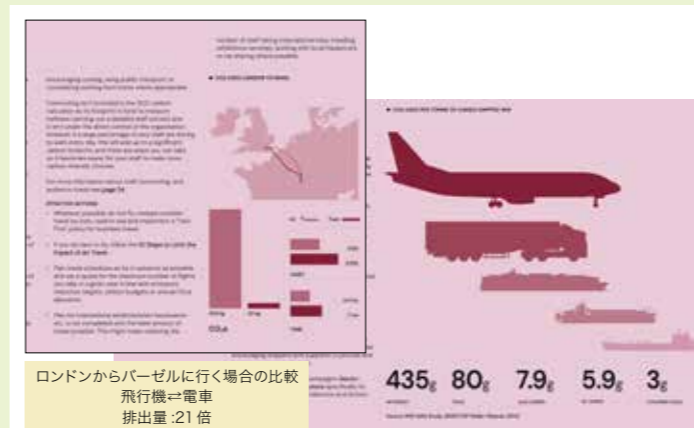
大きな目標としては、COP21 のパリ協定に沿って、2030 年までにアートセクター



5 Art & Climate Crisis : GCC



7 Art & Climate Crisis : GCC



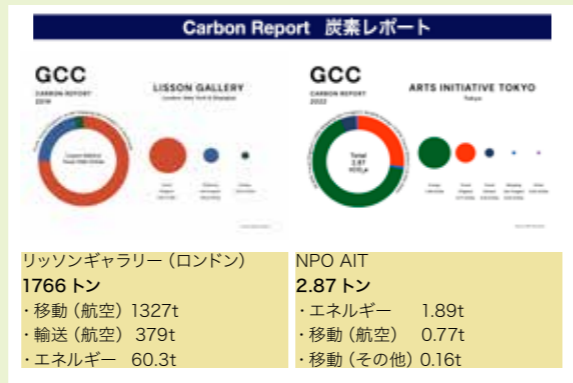
ロンドンからバーゼルに行く場合の比較  
 飛行機⇔電車  
 排出量:21倍  
 コスト:約1.6倍  
 時間:約1.5倍

1トンを1キロメートル運ぶときに排出される二酸化炭素量  
 飛行機 | トラック | バルク船 | オイルタンカー | コンテナ船

9 出典 : Art & Climate Crisis:GCC  
 gcc-non-profit-and-institution-dap-2023-final  
<https://galleryclimatecoalition.org/usr/library/documents/main/gcc-non-profit-and-institution-dap-2023-final.pdf>

アートセクターにおける気候変動対策が必要な理由	
1	We are in the midst of climate breakdown 私たちは気候危機の真っ只中にいます。
2	We have a responsibility to clean up our sector (especially as international governments aren't doing so) 私たちは（世界の国々がもしないならなおさら）自分たちが属する業界において、アクションをとる責任があります。
3	We have the opportunity to set a positive example that will reverberate beyond the industry 私たちは、業界の枠を超えて響き、肯定的な影響を与える例を示すチャンスがあります。
4	Beyond our operations, art has the ability to influence hearts and minds, provide creative solutions to the issues we face, and tackle wider systemic issues and the causes of the climate crisis. アートは、私たちの活動範囲を超えて、人々の心に影響を与え、私たちが直面する問題に対して、創造的な解決策を提供し、より広範な制度的問題や気候危機の原因に取り組む力を持っています。

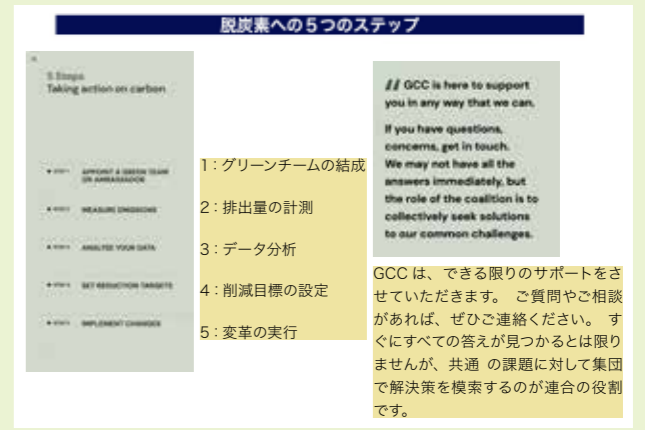
6



8 GCC Carbon Reports より  
<https://galleryclimatecoalition.org/carbon-reports/>



10 出典 : Art & Climate Crisis:GCC  
 gcc-non-profit-and-institution-dap-2023-final



11 出典 : Art & Climate Crisis:GCC  
 gcc-non-profit-and-institution-dap-2023-final

の二酸化炭素排出量を少なくとも50%削減することです。GCCのメンバーが年間の二酸化炭素排出量を算出できる測定表など、気候危機に対する意識を高め、廃棄物ゼロの実践を促進し、変化をもたらすリソースを会員に提供しています(★5)。  
 なぜ、アートセクターの気候変動対策が必要だとGCCは言っているのか(★6)。まず、気候危機の真っ只中に私たちはいるという認識が大前提にあります。行政や国が何もアクションしないのなら自分たちがアクションを取り、肯定的な影響、新しい展開を示す責任がある。アートは人々の心に影響を与え、皆が直面する問題に対して創造的な解決策を提供し、より広範な制度的問題や気候危機の原因に取り組む力を持っているからこそ、そこに人間が取り組むべきなんだという考え方です。  
 もうひとつ言っているのが、「Art as

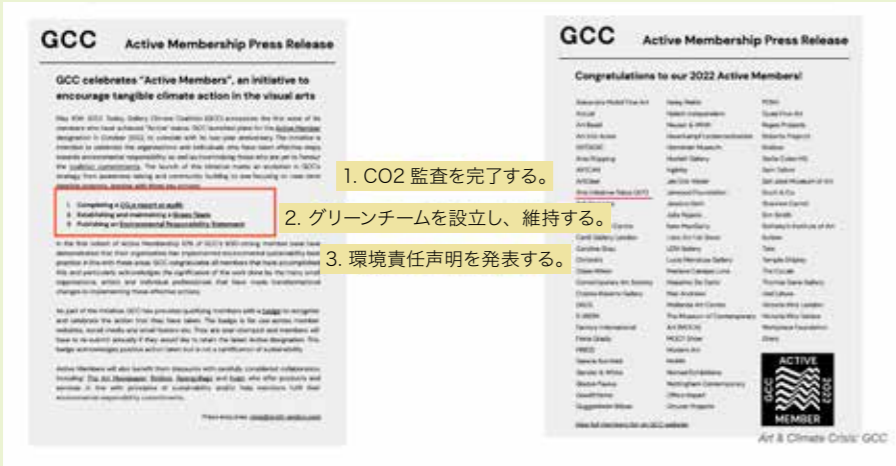
Leadership (芸術がリーダーシップを取る力)」(★7)。Arts PracticesとArts Systemsでの活動を同時平行的にやるべきだとGCCは考えていて、信頼性、クレディビリティ(credibility)、根拠があるものとして示して、変化と一緒に作っていきましょう、というのがGCCの大きな姿勢にあると思います。  
 GCCが掲げる脱炭素の目標は2018年、19年のレベルを基準として二酸化炭素を半分にすることで、何を対象にして考えようかということで4つ大きくカテゴリーを作っています。  
 ●美術館などの建物の維持あるいは展示会をするため、キュレーターやスタッフの移動、それから美術品そのものの輸送、そういったエネルギーの部分を脱炭素するべき対象として捉える。  
 ●梱包や印刷。作品を輸送したり、展示

したりする中で、一度使ったものを廃棄するのではなく、どうリサイクルできるか根本のところを考える。印刷物はデジタル化していく。  
 ●小売やケータリングの調達回路。どういうところから調達しているのかを調べて、脱炭素に取り組んでいるところから調達する。同様に従業員の通勤、訪問者の移動などについても考える。  
 ●廃棄物。長野県立美術館のトイレの水は雨水を利用しているとのことですが、アーティストが作品を作る時も、水道水でなくて雨水を使えるなら使うなど、注意を払っていく。  
 また、GCCは「炭素レポート」ということもやっています(★8)。AITは、アクティブメンバーになるにあたって、自分たちの炭素の排出量を調べてもらいました。まだコロナが完全に終わりきっていない時期だっ

たので、エネルギーのところが多に多いです。もちろん縮小を目指すのですが、多分この時よりも今の方が国際的な活動が非常に増えているので、一旦次の年は上がってしまうのかなという風に思っています。  
 GCCで特徴的なのはグラフィックがすごく分かりやすいということです(★9)。左の図はロンドンから、毎年アートフェアが開かれるバーゼルに行く場合の飛行機と電車の比較、二酸化炭素の排出量、コスト、時間の比較をしている表です。右の図は、1tの重さのものを1km運ぶ時に排出される二酸化炭素量を、飛行機、トラック、船でこれだけ違いがあることを示しています。  
 先日、国内のアートフェアで海外のギャラリストとお話をしたのですが、意識は皆さん持っている。頭の中に。ただ、例えば船が遅れたりということがあるとビジネスに

影響があるので、まだ飛行機と船の両輪をやっているというのが現状のようではありません。既にそこを考えると当たり前、というような状況の中でビジネスをしている風に思います。  
 皆さんのお手元にお配りしている「非営利団体、公共団体のための脱炭素アクションプラン」というものがオンラインで公開されています。非営利団体、公共団体が脱炭素のアクションをするためにどういうことを考えたいのかということがかなり細かく書かれていて、先ほどの専門家の方と一緒に作られたものがあります。  
 2ページ目の裏に「始める前に知っておくべきこと」、脱炭素に取り組もうと思った時にまず知っておいてねという5つのことが紹介されています(★10)。まず、「1人で孤独に始めることじゃないよ」。あまりにも大きな課題なので「やっぱり無理

なんじゃないか、何もできないんじゃないか」というような思いにも駆られるのですが、「どんな困難な障壁も打ち破ることができる」、信じてやろうということを書いています。  
 AITがまず脱炭素のステップを踏もうと思った時にやったことが、この5つです(★11)。まず、グリーンチームの結成。その後、私たちがどんな活動をしていて、電気代、水の量、国内出張をした時の距離などを使って、排出量の計測をしました。その分析をして、今後どのようにそれを削減していくか、どういうアクションを起こすのか、ということを考えて、実行していくということを5つのステップが示してくれています。  
 GCCも、ただメンバーになっただけで満足する団体が増えてきます。主体的に取り組む人たちを集めて、去年から「アクティブメンバー」というものをつくりました(★



12 Art & Climate Crisis:GCC



13 はちみつの販売ページ  
<https://shop.tate.org.uk/tate-britain-honey/11101.html>



14 <https://www.frieze.com/fairs>

- 12)。アクティブメンバーになるためには、
- ①二酸化炭素の監査を完了する。
  - ②グリーンチームを設立して、定期的に活動について話し合う。
  - ③環境責任声明を発表し、団体としてどういう意識を持っているかを示す。

アクティブメンバーに認められるとパッチをもらいます。最初のアクティブメンバーは50団体あり、MoMAやテート美術館、アート・パーゼルや「フリーズ (FRIEZE)」といった大きなアートフェア、主要なアート界を支える団体、色々なセクターの人たちがアクションを起こしているということが今、起きています。

アクティブメンバーとしてのAITの活動を紹介します。AITではスタディグループミーティングを今年の6月から始めています。一番最初の年ということもあって美術館のキュレーター、美術館の館長、財団の方、企業系のギャラリーの方などを対象に小さいグループでやっています。もう1

つは、アクションプランの日本語への全訳がしたいと思っています。

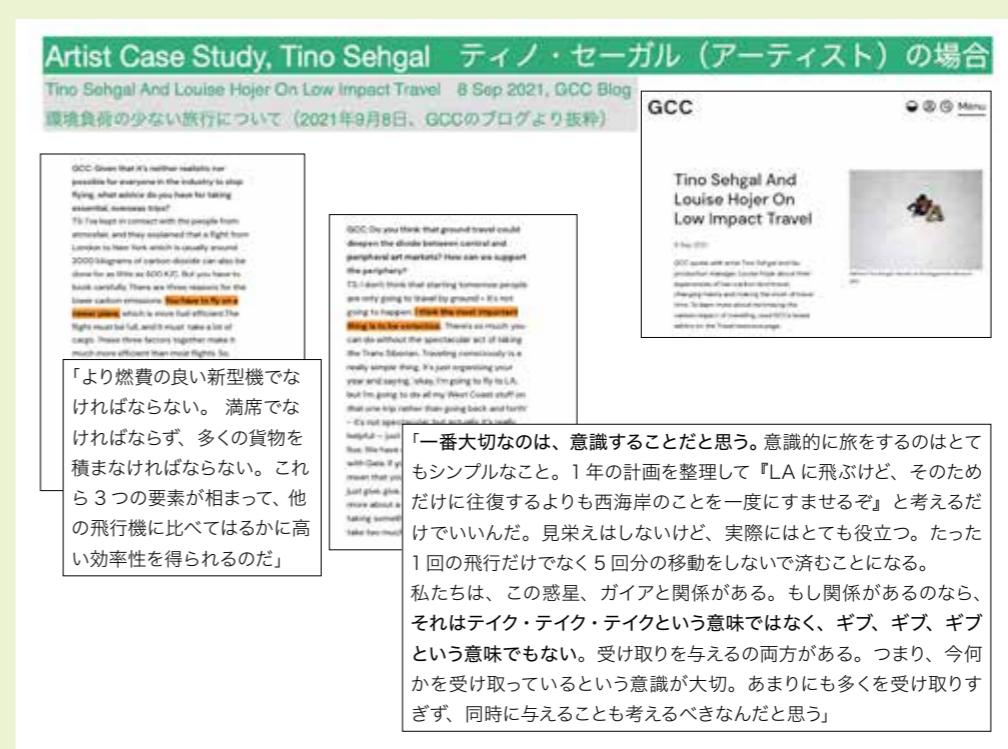
来年は、公開のラウンドテーブルを開催して、より広く誰にでも伝わる形でアート業界の脱炭素ということについて話し合うような時間を作りたいと思っています。非常にありがたいことに石橋財団の助成をいただいで活動することが決まっています。

テート美術館は、2019年7月に環境負荷に対する何らかのアクションをとるという声明を出し (p.15 参照)、進捗をウェブサイトで報告しています。2019年には全てのギャラリーで再生可能エネルギーによる電力に切り替えたとか、出張を44%削減したとか。友人のキュレーターも、今まではヨーロッパでも飛行機に乗っていたものが、電車で、とか、出張はなるべく1回で済ませるように、と言われたりしています。今までの仕事を180度変えなければいけないようなことで、頭では分かるけれども非常に難しいということをしごく言っていま

したね。

他にも、湿度と温度のコンディションを専門家と一緒に再検討したり、梱包のケースなどを再利用可能なものにする。テート美術館の屋上に蜂の巣箱を作って養蜂家の人と一緒に蜂を育て、美術館で売る、など (★13)。ウェブサイトにあがっているので、もっと細かく知りたい方は是非テート美術館のウェブサイトで見てくださいと非常に参考になると思います。

アートフェア (アート作品の展示即売会) は2010年以降世界中に増えていて、コレクターや作品が行き交うということがあります。これ自体も環境負荷が高いというようなことが言われていて、FRIEZEが環境責任声明を出し、炭素の排出量を最小化するとか、利益の一部を自然の回復のためのプロジェクトに投資するとか、自分たちのプラットフォームを活用して脱炭素化に向けた意識改革を他のギャラリーの人たちにすると発表しています (★14)。電力の



15 Tino Sehgal And Louise Hojer On Low Impact Travel 8 Sep 2021, GCC Blog  
 環境負荷の少ない旅行について (2021年9月8日、GCCのブログより抜粋)  
<https://galleryclimatecoalition.org/news/58-tino-sehgal-and-louise-hojer-on-low-impact/>



脱炭素アクションプランは、ギャラリー気候連合 / Gallery Climate Coalition : GCC が 2023 年に発行した「Decarbonisation action plan For non-profits and institutions」の一部を翻訳し、再構成したものです。無料配布版 (日本語) はこちらからダウンロードできます。  
[https://www.a-i-t.net/admin/wp-content/uploads/2023/10/GCC\\_Decarbonisationactionplan\\_ver1\\_23oct7.pdf](https://www.a-i-t.net/admin/wp-content/uploads/2023/10/GCC_Decarbonisationactionplan_ver1_23oct7.pdf)

こと、廃棄物をほぼゼロにするためのロードマップを作っています。アートフェアでは、4日間くらいのために壁やテントを建てて、そこに数百のギャラリーが集まって、世界中からクレート (木箱) で運ばれてきた作品を開梱して売る。作品を大量に持ち込んで、作品が売れたら新たに掛け替えてとにかく売るという場です。世界のアートシーンでは、一部の超富裕層がニューヨークからロンドンまでプライベートジェットで行くようなことが当たり前になっている世界があります。FRIEZE はプライベートジェットの会社との関係を解消しました。これは短期的に見ればお客様を逃すように見えますが、長期的に見ればそういう態度を持っているからこそ FRIEZE を支持するという思考の転換もあると思います。

また、欧米では、2016年にテート美術館で常勤のサスティナビリティのマネージャーというポジションを作ったことを皮切りに、環境に関わる専門的なキュレーター

を据えて、一緒に展覧会や作品を作っていく、という動きがあります。

「Julie's Bicycle」の取組はロンドンで2007年に始まりました。世界のアートセクターでの炭素排出量がどのくらいかをレポートとして発表したり、アーティストと一緒にプロジェクトを作ったりということを継続して行っています。「CIMAM (国際美術館会議)」が美術館としてどんなことができるのかということ全体を皆と一緒に考え、ネットワークを作るということをやっています。「Bardeur.art」は、展覧会や作品制作の過程で出る廃棄物を別の人が再度使えるよう交換できる形のシステムを作っています。

これまで美術館は化石燃料を使った企業から多額の支援を受けながら活動してきた歴史があります。特にヨーロッパの美術館では、2010年代後半くらいからそうした会社からの資金提供を見直す動きも広がっています。

AITの活動としては、YouTubeでロジャー・マクドナルドのレクチャー「地球システムの崩壊と今のアート・シーン」を公開しています。ブログも作っていて、「気候危機とアート」というテーマで、世界の美術館などがどんな風にアートと気候、環境の展覧会を作ってきたか、などの年表を作ったり、GCCの創立メンバーのケイトさんへのインタビューはすごく面白いので是非良かったら読んでみてください。

最後に、ものを作らないことで有名なアーティスト、ティノ・セーガルさんの声を紹介します。非常にアーティストらしい言葉です (★15)。

ありがとうございました。私からの話は以上となります。もし関心がある方は是非これを機会に、一緒に何かアクションを取っていただければと思います。よろしくお願ひします。

## サステイナブルな長野県のアート ／ミュージアムに向けて

**金井** まず松本さんから、塩見さんのお話の感想と伺いますか、その導入をいただけますでしょうか。

**松本** 「脱炭素アクションプラン」によれば、2018～19年比で2030年までに、あと7年でカーボン半減ができないと地球という惑星が危ないぞという話で、美術館、美術業界に関しては、建物の光熱費、輸送、観客・従業員の移動このあたりがポイントとなっています。

とすると、カーボン半減のためには、どう考えても事業縮小せざるを得ないな、というのが1つ目の感想ですが、資本主義社会で事業を拡大させるのが普通のところで、自分たちだけ縮小というのはなかなかできないですね。

もう1つは、日本というのは少子化、人口減、税収減の社会で、いま国外からインバウンドを増やせと大合唱なわけですね。それとこれとはミッションが全然違うので、どう両立していくのだろう。それが僕の直感的な感想というか、最初に思ったことです。

**ロジャー** 「事業縮小」は1つの重要な

キーワードです。立派なギャラリーを長年やっているケイト・マクギャリーさんは、リスクを背負う覚悟でGCCに参加して、入った後5年間飛行機に乗らないという宣言をしました。つまりヨーロッパ以外のアートフェアには参加しないということなので相当な覚悟です。当然ビジネス・モデリングもやったでしょう。その代わりに、ヨーロッパのアートフェアに5年間は力を入れた。非常に意識が高いシフトを彼女は個人的にしています。

また、ストックホルム近代美術館は去年1年間、輸送ゼロにして良い展覧会ができるか実験していました。素晴らしくできたと館長がインタビューで話していました。必然的に、所蔵コレクションの再発見、あるいはストックホルムに来られるアーティストたちと美術館で一緒に行うプロジェクトの実施がメインとなります。ストックホルム近代美術館は長野県立美術館よりはるかに大きいですが、面白い実験だなと思います。

**塩見** 2019年にテート美術館が宣言を出して全職員に旅行・出張を半分以上にすると行った時、知り合いのキュレーターの

方は「頭で分かっているけど指先まで行動にするのが難しい」「自分の業務の中での意識を変えるだけでなく、生活全てにおいて意識を持って生きることまでも含んでいると考えると少し時間がかかることではある」と言っていました。なるほどそうだなと思いましたね。

**ロジャー** 美術館やミュージアムの、「コミュニティの財産を未来のために保存する」という倫理観は、本来、気候危機の中で話されているような倫理観に近いような気がしています。そういう理由も込めて、実はリーダーの役割に非常に向いていると思います。ただし、その「未来」が大きく変動しようとしている。例えば、オランダの海拔0mくらいの美術館では、作品の保存状況が危機的な問題になっているそうです。予言できる安定した未来ではもはやない、ということに対してミュージアムはどうやって対応していくのか、ということがこれから考えなければならない問題だと思っています。

**松本** スtockホルム近代美術館の話は色々な意味で示唆に富んでいます。日本の美術館がどこも昔から苦勞しているのは、コレクションの展覧会に人が入らないことです。「何か素晴らしいものは海外からやってくる」みたいな心性が染みついている。どの美術館も見せきれないような分量のコレク

ションを持っています。ついつい同じ名品が展示されていることが多いのですが、「必要は発明の母」というか、コレクションをもう一度見直して、とにかく渡来ものを珍重するような価値観をひっくり返すよい機会かもしれません。

**金井** 私が館長の隣で言うのもなんですが、今日はかなりワクワクしています。というのも、長野県立美術館には、いま企画展で廣瀬智央さんが「みかん」というモチーフで新しい共同体を語る展示があり、さらに中谷美二子さんの「霧の彫刻」の常設作品、東山魁夷の風景、こうしたコレクションを組み合わせるだけでも、エコロジカルな問い、気候変動へのメッセージを発することができるのではないかと考えています。

ロジャーさんから保存修復とエコロジー、気候変動に対するアクションの親和性についてお話しいただきましたが、イタリアの現代美術館でも同様の取り組みがあります。「文化財を守る」という意識の延長線上で「地球も文化財」と見たり、物からスタートさせて大きく地球全体に突き抜ける発想で、非常に示唆的だと思いました。

**ロジャー** 小海町高原美術館では、GCCが推奨するようなアクションを実践に移せると思いますか。難しいところがあれば、例えばどこが具体的に壁になるのか、など。

**中嶋** 我々は作家のメッセージをいかに社会に伝えるかということに注力してきて、それは現在も多くを占めているのですが、システムに対するアクションについて、美術館がリーダーシップを取っていくべき問題でもあるというお話には非常に共感をします。当館には学芸員は1人しかいないし、まずは館長と2人から始めて自治体に意識を広げて、町を挙げて取り組んでいく。まずはそういう意識の向上からというのが、現実的に見てもそれほど難しくないのかなという気がします。

**ロジャー** 皆さんへの問いなのですが、「ミュージアムが社会変革を起こす主体性を持つべきか」という問いが私はすごく気になるんです。重要な問いだと思っています。「ミュージアムという場所はニュートラルな客観性を維持するべきだ」というのが、19世紀以来の王道だと思うのですが、今の時代、明らかに「もうニュートラルにはなれない」と多くの美術館やギャラリー、アーティストが判断しはじめています。

変革を起こす主体になれるかどうか。特に、公立美術館が何かに具体的なポジションを示す。例えば、「地球環境を守る」という1つの倫理、「私たちはこの価値観を大事にします」ということを打ち出すのは、そんなに難しいのかどうか。いかがでしょうか。

**松本** 何か一面的な方向に肩入れすることは、確かに難しいと思います。加えて、賛同してアクションを起こすからには、美術館単独ではなく、メディアなどと組んで事業をしているので、色々なことを考えなければならぬと思います。一方で、「待ったなし」ということがある。超難しい問題けれども、知恵を出すことを世界中で交換し合っている。これは大きいですよ。できるだけ多くの人にこの問題を知って考えて持ち帰ってもらう。その機会になるということは、美術館は是非やるべきことだと思います。

**中嶋** 当館は現代美術を1つの柱にしていて、現代美術自体が客観性の視点ではなく、我々が責任を持って社会に繋げていくということが、もしかすると独自性の上に立ったメッセージになり得ているのではないかと少しは考えています。今夏の展覧会でアメリカから作家を招聘して社会問題をテーマにしていたのですが、中学校でそのテーマで鑑賞事業を行って、子どもたちは大人が思うよりも問題に敏感に反応しているということが分かったんです。

**金井** 博物館法もだいぶ変化してきています。ICOM(国際博物館会議)の中でも、包摂や多様性といった観点からの公平性など、論点が所謂「ものを集めて展示」というところの外に出てきている。この10年

予言できる安定した未来ではもはやない、  
ということに対してミュージアムはどうやって対応していくのか(ロジャー)

コレクションをもう一度見直して、  
とにかく渡来ものを珍重するような価値観をひっくり返すよい機会かもしれません(松本)

コレクションを組み合わせるだけでも、エコロジカルな問い、気候変動へのメッセージを  
発することができるのではないかと考えています(金井)

まずは館長と2人から始めて自治体に意識を広げて、  
町を挙げて取り組んでいく。まずはそういう意識の向上から(中嶋)

登壇者	塩見有子 (AIT ディレクター)
	金井直
	ロジャー・マクドナルド
	松本透 (長野県立美術館 館長)
	中嶋実 (小海町高原美術館 学芸員/シンピズム ワーキング・グループ議長)



松本透  
長野県立美術館長。京都大学文学研究科大学院修士課程修了。2018年から長野県信濃美術館長、2021年より現職。専門は日本および西洋の近現代美術。著書に『もっと知りたい カンディンスキー』(東京美術 2016年)、編著書に『日本近現代美術 史事典』(東京書籍 2007年)など。訳著書にS.リングボム『カンディンスキー 抽象絵画と神秘思想』(平凡社 1995年)など。



中嶋実  
小海町高原美術館学芸員。現代美術、デザイン、建築などの展覧会を企画。アーティスト・イン・レジデンス、教育普及事業に積極的に取り組む。



くらいそういったミュージアムそのものの変容が起きてきているので、本当に色々な領域の人たちと繋がってアイデアを交換するチャンスが広がってきているという実感がありますね。

**ロジャー** 「循環型美術館」とか「循環型のアート界」とはどういう世界なのか。美術界は人間関係が大事なのでそれをうまく使って循環型の美術エコノミーができないか、とよく想像します。

**金井** 日本の美術館のシステムとして「巡回展」というのがありますが、作品だけでなく技術や人の関係などがダイナミックに巡回するとすれば、現在のシステムを切り替えていききっかけになるのではないかと思います。

**塩見** 梱包や輸送を専門にやっている東京の業者さんも大量の廃棄物を出すことへの抵抗があり、協力して何か資材や台座などの循環の仕組みを作っていけないかと話しています。右肩上がりの成長を見る時代ではなくなって、先行き不安の中、あるものをどう使っていくのか、循環させていくのか。「Reduce、Reuse、Recycle」をキーワードに考えていくというのはあると思います。

**質問者1** 欧米で気候変動の議論が進化すればするほど、日本でアートフェアなどの機会が減ってしまうのではないかという恐れがあります。今後、どういものが残っていくのでしょうか。何が選ばれるような存在になっていくのでしょうか。

**塩見** 今年のFRIEZEアートフェアでは、GCC加入を自分たちのブースの名前の下に表明するということをしていました。GCCに入っていることや、環境に意識を持った表明が1つ団体のポジションを上げる、というような時代に多分移っていきます。そして、「減らす」のとは別のクリエイティブな仕方、新しいやり方を考えることもあるのではないかなと思います。

**質問者2** 1970年代、アラン・カプローという芸術家に習った者です。百姓をやってきました。これは世界的な問題だと思えますし、そういう時代なのかと思えますけれども、元々、環境に反するものがアートと言っても良いのですから、よくこのテーマをこのような美術館で取り上げたと思います。非常に大変だと思います。カプローは、「アートは教育だ」と言いました。これからアートはどう動くんだろうと思いますね。だから、僕の作品を見てください。以上です。

**質問者3** 7月の〈会議〉に登壇した信州大学の茅野恒秀です。冒頭、塩見さんからお話のあったLISSON GALLERYの温室効果ガスの排出量1700トンのうち電力が60トンと少なかったのが目に留まりました。多分、再生エネルギーを買っているんだと思います。美術館や大学などは「再エネを増やすということが気候変動対策に直結する」という基本を共有して、これはすぐできるので、県立美術館にもやっていただきたいです。長野県の施策もあり長野県立大学は再エネ100%電気を買っています。

輸送の話は美術業界だけではなく課題です。長野県ゼロカーボン戦略のロードマップでも2030年までの目標で、運輸部門の削減量が足りない。EVの普及が遅れているのでなかなか減らない。これはおそらく世界共通の課題です。

今日は「事業縮小するしかないのでは」という流れになりつつありますが、仮に再エネが増えたり、技術で二酸化炭素を出さないような燃料が開発されたりすれば、またポジティブな未来が描けるということも、頭に入れておきたいと思います。同時に「なぜ常設展に人が来ないのか」という日本の観客の構造への一手は、美術業界だからこそできることなのかもしれないという風に思いつながりながら今日のお話を伺っていました。

**質問者4** 自然エネルギーの仕事をしているので、アートの方々がこういうお話をしてくれることをすごく嬉しく思っています。

私はアートの世界は縮小どころかもっと拡大できると思います。これまで資本主義は「投資資本に対する生産性」を求めてきましたが、「資源に対する生産性」という考え方があって、それでいくと極端に言えば、アートは紙と絵筆ですごい付加価値を生むわけです。経済活動に果たす役割も大きいと思うので、ぜひ拡大してほしいと私は思っています。

その上で、アート・セクターで一番二酸化炭素が出ている「訪問者の移動」、ここは改善しないといけないと思います。どのように資源生産性を上げるか、ということ言えば、車なら、4人で来たら1人で来る4倍の資源生産性になる。バスで来てくれれば一気に環境に良い観客ということになるわけです。美術館として、バスや相乗りの来場者を優遇して割引引とか、1人で自動車で来た人は割高にするとか、そういうことも含めなんとかするアイデアがあればと思いました。

**質問者5** 10月の〈会議〉を一緒に企画をさせていただいたNPO法人上田市民エネルギーの藤川まゆみです。今日はシステムの話が多かったですが、アートの皆さん

が行動したり発言したりしてくださることは、エネルギーを専門にしている私が言うよりも本当に影響力がありますので意識してもらえたらと思います。

**質問者6** 演劇の脚本や演出をしています。アート・セクターにおいて今回のような問題が語られる時、或る課題、或る「正しさ」に向かっていくという方向付けと、アートそのもののあり方が相反する側面があると思うのですが、どう留意されていますか。

**ロジャー** 芸術、アートという人間行動について、今、根本的な考えが変動している気がします。少なくともヨーロッパでは19世紀から、アートは純粋な、束縛されない自由の現れだった。でも1960年代に入ると、環境学者、哲学者、経済学者たちも、「いやちょっと待て、この地球というバイオシステムには限界があるのではないか」という議論があり、それを取り入れるアーティストも70～80年代に出てきた。アートの価値、そして限界というものが美学の問題として同時に話されるべきだと思います。

**質問者7** 作家活動をしています。素材についても色々あって、アクリル絵の具1つにしても「これを水道に流していいのか？」とか。長野で制作している自分と、都市部

で制作している人で素材は全く違ったりする。環境への配慮と表現の自由についてどうお考えでしょうか。

**ロジャー** 素材に関しては、オランダのアカデミー（ヤン・ファン・エイク・アカデミー）が、サステナビリティの視点から研究していて、“Future Materials Lab”という名前で、色々なマテリアル、粘土、木などアーティストが使う色々なもののサステナビリティ・インデックスを作っていますね。

**塩見** サステナビリティに配慮した素材は値段が高いですね。私たちが石橋財団から助成をいただく時に10%、グリーン化のエクストラなお金を申請していました。このようにグリーン化に向けて支援が必要であることを現場からも発信すると全体の意識が変わっていったり、活動しやすい環境が作られていくのかなと思います。

**ロジャー** 皆さん長い間ありがとうございます。

『減らす』のとは別のクリエイティブな仕方、新しいやり方を考えることもあるのではないか（塩見）

芸術、アートという人間行動について、今、根本的な考えが変動している気がします（ロジャー）

グリーン化に向けて支援が必要であることを現場からも発信すると全体の意識が変わっていったり、活動しやすい環境が作られていくのかなと思います（塩見）



信州アーツ・クライメート・キャンプ  
〈キャンプ〉座談会

## 持続可能な社会、 舞台芸術の環境配慮について考える

Shinshu Arts-Climate Camp 〈キャンプ〉として、松本市中央公民館にて座談会「持続可能な社会、舞台芸術の環境配慮について考える」が行われました。2023年10月にすみだパークシアター倉（東京）で上演された『エミリア・ガロッチィ / 折薔薇』では、舞台美術を廃棄せず再利用を図るよう、企画段階から環境に配慮した制作活動が行われました。この実践を出発点に、舞台芸術における環境配慮〈グリーン・プロダクション〉について考えることが目的です。

まず、『エミリア・ガロッチィ』にて美術、衣装、そしてグリーン・プロダクションコーディネーターを担当された大島広子さんより、「舞台芸術における環境の持続可能性」というテーマでご講演いただきました。大島さんは、2021年に英国で発行された「シアター・グリーン・ブック」について現地調査を行ったうえで、日本の舞台制作現場

における環境配慮を推進しています。「シアター・グリーン・ブック」とは、英国の舞台関係者を中心に編集された環境に配慮した作品の創造や劇場の運営についてのガイドランスと基準を示したもので、日本語を含め10カ国語に翻訳されているそうです。

次に、大島さんと『エミリア・ガロッチィ』にて翻案・演出を担当された木内宏昌さん、そして会場全体でのディスカッションが行われました。木内さんからは、『エミリア・ガロッチィ』の制作を振り返りながら「こういうこと（グリーン・プロダクション）が果たして観客にとって何が喜ばしいことかという面が、まだ答えが出てない」としながらも、演出にポジティブな効果があったことが示されました。会場からは6名の方からご質問いただき、多様な立場からグリーン・プロダクションに対する意見や質問が出されました。



信州アーツ・クライメート・キャンプ〈キャンプ〉座談会  
「持続可能な社会、舞台芸術の環境配慮について考える」

[日時] 2023年12月17日(日) 16:00～18:00  
[会場] 松本市中央公民館(Mウイング) 中会議室 3-1  
(長野県松本市中央 1-18-1)

[プログラム] ①『エミリア・ガロッチィ / 折薔薇』における実践の紹介  
②「シアター・グリーン・ブック」とその実践について  
③ ディスカッション

スピーカー 木内宏昌(演出家・劇作家・翻訳家 / 一般社団法人トランスレーション・マターズ代表)  
大島広子(舞台美術家・グリーンプロダクションコーディネーター / Image Nation Green 代表)

[主催] 信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)、長野県

令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

## Sustainable Society, Environmental Considerations in the Performing Arts

The “Shinshu Arts-Climate Camp” roundtable discussion “Sustainable Society and Environmental Consideration in the Performing Arts” was held at the Matsumoto Central Community Center in October 2023. The production was environmentally conscious from the planning stage, so that the stage props would be reused instead of discarded. Using this practice as a starting point, the purpose of this project is to consider “green production” in the performing arts.

First, Ms. Hiroko Oshima, who was in charge of art direction, costumes, and green production coordinator for “Emilia Galotti,” gave a lecture on the theme of “Environmental Sustainability in the Performing Arts. Ms. Oshima is promoting environmental considerations in Japanese stage productions based on her field research on the “Theatre Green Book,” which was published in the UK in 2021.

The “Theatre Green Book” was compiled mainly by stage professionals in the UK and provides guidance and standards for the creation of environmentally friendly productions and theater operations.

Next, Ms. Oshima, Hiromasa Kiuchi, who was in charge of adapting and directing “Emilia Galotti,” and the entire audience discussed the book. Looking back on the production of “Emilia Galotti,” Mr. Kiuchi said, “I have not yet answered whether this kind of thing [green production] is really good for the audience,” but he indicated that the production had a positive effect. Six members of the audience asked questions, and opinions and questions about green productions were raised from a variety of perspectives.

# 「シアター・グリーン・ブック」とその実践について

大島広子 (舞台美術家・グリーンプロダクションコーディネーター/Image Nation Green 代表)

私はフリーランスの舞台美術家として、約 15 年ほど舞台のデザインをやっています。その前は大道具会社で働いていました。2021～22 年頃、知人が、使用した大道具を回収しレンタルする事業を始め、相談を受けたことがきっかけで演劇と環境について考え始めました。「演劇と環境」「舞台と環境」などと日本語でネット検索しても、特に何の活動も見つからなかったので驚きました。英語で検索してみると、2021 年に英国ナショナル・シアターで「緑の演劇会議」が行われていて、また「シアター・グリーン・ブック (★1)」という舞台業界において環境に配慮して運営していく上の基準、ガイドブックのようなものが作られていると分かりました。去年ランカスター大学の修士過程に留学し、現地で色々な人にインタビューしながら研究してきた、この間、帰ってきたばかりです。

環境問題といっても色々なテーマがあり、それらを繋げて学ぶ機会は少ないのではないかと思います。イギリスでは劇場や文化芸術に関わる人たちが「環境リテラシートレーニング」を受けて学んでいます。このまま私たちが今の生活を続けると、地球の平均気温は約 4℃上昇すると言われてます(現時点で既に 1900 年から 1.1℃上昇しています)。この数字を具体的に日本の気温に置き換えたのが、環境省が発表した 2100 年の日本の天気予報です。東京の夏の気温が 43℃。ただ暑いというだけでなく、農耕ができなくなるという話もあります。今の子どもたちや次の世代が日本で生きていけるのか、という危機意識で私たちは対応しなくてはなりません。

シアター・グリーン・ブックは 2021 年に発行され、インターネットから誰でも見ることができます。今現在、日本語を含めて 10 カ国語に翻訳されています。イギリスでの舞台芸術における環境に配慮した作品創造や劇場運営などのガイドラインです。政府が定めて広めたわけではなく、専門家が自主的に会議を開いてまとめたという当事者発信の基準になっています。なので、すぐに大きな劇場が基準に合わせて事業を始めています。

本は 3 巻に分かれていて、(1) プロダクション制作、(2) 劇場建築、(3) 劇場の運営についてそれぞれ書かれています。

内容として 3 つの「減らす!」ということが書かれています (★2)。まず①「マテリアル」、使う必要がないモノやゴミを減らす。次に、②人やモノの「輸送と移動」を減らす。そして③「エネルギー」を見直して、二酸化炭素が出ないようにグリーンエネルギーを使っていきましょうということが書かれています。書かれている 3 つのポイントをご説明したいと思います

### 1 持続可能なプロダクション製作

まず作品制作を始める前に、作品に関わる全てのスタッフが「グリーン・プロダクション同意書」にサインしてください、と書いてあります (★3)。私の個人的経験でも、チーム全体の同意がないと同じ目線で活動ができないという実感があります。例えば、使った後の資材をどう処分・活用するかということは、舞台監督やプロデューサーの協力が必要で、1 人ではできません。あと、基準が書いてあります。全部の素材が既に 1 回使われたものをリユースして作って、その後も寄付したり次の作品で使ったり捨てずに活用できるようにする。これを理想としつつ、手前の段階として「1 回使われた材料を 50%使う」などが基本として定められています。

### 2 持続可能な劇場建築

劇場建築については 3 つのステップがあると書いてあります。まずは「今ある構造物を工夫して環境変化の影響を軽減させる」。2 番目のステップとしては「改修の時、よい形で設備の入れ替えをする」こと。3 つ目は「再生可能エネルギーを施設で使っていく」こと。他にも、雨水利用の促進、汚水処理の配慮、生物多様性や敷地内緑化の工夫などが書いてあります。英国ナショナル・シアターでは屋上でミツバチを育て、蜂蜜を瓶詰めしてギフトとして販売しています。

### 3 持続可能な運営

運営について、日常の細かいことがたくさん書かれています。Eメールの送り方、清掃で使う洗剤の選び方、ゴミの測定と削減、リユース・リサイクル、あと劇場に



1 シアターグリーンブックのサイト。日本語版もあり、プロダクション制作(ショートバージョン)が公開されている。  
https://theatregreenbook.com/japanese/



2 大島さんが作った「3つの減らす」の概念図。



3 グリーンプロダクション同意書



大島広子  
2000 年、英国セントラル・セント・マーティンズ卒業。10 年から 1 年間、文化庁新進芸術家海外研修員としてドイツ、22 年～23 年、英国ランカスター大学演劇科にて「社会、政治、環境変化のための演劇」修士課程で芸術修士号を取得。帰国後 Image Nation Green を立ち上げる。

来る交通手段。通勤や来場者の交通手段も大きな二酸化炭素排出の要因になるので、公共交通機関の利用、電気自動車、カーシェアなど環境負荷の少ない移動方法を提案しましょう、というようなことが書かれています。また、必要な品物を仕入れる相手先も環境に配慮した会社と取引しましょうというようなことが書いてあります。

アーツカウンシル・イングランドでは、助成条件の中で環境配慮を文化団体に求めています。そして、シアター・グリーン・ブックのように実行できるガイダンスがあります。それを元に今は 800 以上の文化芸術団体により環境を配慮した活動を行うという実践があり、それが政策やガイダンスに反映される、という形で「政策」「ガイダンス・基準」「実践」の 3 つの歯車が揃って回り始めたような状況になっています (★4)。

RSC (Royal Shakespeare Company) の『テンペスト』では、舞台美術において床面の素材に、一度使ったものを塗り直し再利用しています。その床も別のプロダクションで使えるように倉庫に保存しているそうです。衣装についてはファスト・ファッションを使わないようにしていました。イギリスでは 1 回ネット購入をしたあと返品できるのですが、返品された商品は業者側で全部廃棄されてしまうのだそうです。

外側からの声として「化石燃料に依存

した会社からのスポンサーを文化芸術団体は受けるべきでない」という市民運動があり、RSC は 2019 年にイギリス最大のエネルギー会社からのスポンサー契約を打ち切りました。イギリスの調査によると、77% の観客は「文化芸術団体は気候変動に何らかの対応をして社会に影響を与える責任がある」と考えています。

つい最近 2023 年 10 月に、ロンドンでの『レ・ミゼラブル』の舞台に JUST STOP OIL という過激な環境活動家たちが入って行って、ショーを止め、キャンセルさせて大きなニュースになりました。象徴的なシーンで驚くようなことをすることによって公共へのインパクトを与えています。

舞台芸術がなぜ持続可能性や環境について考えるべきか、私は 2 つポイントがあると思っています。1 つは、自分たちも社会の一員として、自分たちの行動が与える環境への影響を減らす行動を今すぐする必要があるということです。舞台芸術も例外ではないということ。もう 1 つは、文化芸術は物語を伝えるパワーを持っていると思います。そのパワーを使って、この社会の問題にどう切り込んでいけるか、アーティストや文化芸術に関わる人たちができるとだと思っています。これから国内でも色々なことをやっていきたいと思っています。

政策  
ジュリーズ・パインツル (NPO) ガイダンス・基準  
アーツ・カウンシル・イングランド シアター・グリーン・ブック

舞台芸術を含む文化芸術団体  
サステイナブルな実践  
800 団体以上

4 3 つの歯車

# 『エミリア・ガロッティ』折薔薇』での取組～

木内 僕は今、東京で活動していますが、子どもの時に松本市蟻ヶ崎に住んで開智小学校に通ってました。大島さんは、まつもと市民芸術館で串田和美さんの舞台作品を作る時に一緒になって、TC アルプの舞台で美術をやっていたこともありました。このところ環境配慮の取組を学びにイギリスに留学されていることは知っていて、今回の公演の舞台美術と衣装をオフアーしました。

僕は演出家でもあるので、僕らが環境問題に取り組んでいるということが作品の面白さにならなければ観客の皆さんにとって無関係なものになってしまうのではないかと心配があります。大島さんから「グリーン・プロダクションと銘打って公演を

作るうとする試みは、東京のカンパニーとしては初めてですよ」とお聞きして「初めて」というのは価値があるので頑張ろうと思っていました。この創作の最中に、松本の劇団野らぼうさんの「ゼロカーボン演劇」のことを知り (P.58 参照)、「太陽の恵みがあってエネルギーが蓄えられたところで作るんだ、上演するんだ」という形で、これはすごいと思いました。僕らの場合、この作品をやりたいから人を呼んで来て、無理やりお金を作り出そうとしている。そこに本当に「環境配慮」が必要なのか? というところが突きつけられる。

同時に、大島さんからはすごい覚悟が伝わってきました。僕はすごく教育をされたと思っています。稽古期間中、週に 1



https://translation-matters.or.jp/index.html



木内宏昌  
劇団活動後、イギリス人の演出家デヴィッド・ルヴォーに学ぶ。その後、自主企画の脚本・演出のほか、海外戯曲の演出、翻訳に取り組む。ジャン・コクトー『おそろべき親たち』ほかで第 7 回小田島雄志翻訳戯曲賞、『月は夜をゆく子のために』で第 15 回同賞受賞。

回は環境問題について話そうっていうのを決めて、大島さんも来てくれて。

**大島** それぞれ皆さん違う視点で取り組もうとしているということを正直に話して下さって、ポジティブなものもあれば、不安とか「本当にそうなのか？」という疑問もたくさん聞くことができました。

**木内** 美術家や衣装家、モノを扱う人が、捨てないようにする、という使命感として芸術活動に関わるというのは目標が立てやすい。じゃあ俳優はどう関われるか、ということになるとなかなか具体的に心の問題になってくる所もありました。今回は、舞台美術に古木を使ったんです。

**大島** 長野県の山翠舎(★1)で古木を手配させてもらって舞台美術に応用しました。今回の作品は貴族の屋敷が出てくるドイツの18世紀の話なんですけれども、それを抽象的に作っていきたいという演出家としての提案が木内さんからあり、色々アイデアはあったんですが、結果「古木っていいよね」という話になりました。

**木内** ホームセンターで買ったほうが安いかもしれないけど、今回同じ嵩の木が新品で手に入るのロシアや東南アジアから輸入されている材料で、日本の木ではない。古木は約100年前の古民家に使われていたもので、これ見せられると削り手として「これいいね」となっちゃう。惚れちゃいますよね。自分にとっては「環境配慮」が「人間も環境だ」と翻訳/変換されています。今回の作品も、いつも新作を作るというのではなく、そもそもレッシングの作品を森鷗外が翻訳をしていて、その翻訳も使ってみよう、っていうことと、この素材の選択が、僕の中で結びついていったので進めたんです。

次に、お芝居終わった後どうする?っていう話になるわけですが、古木の価値を分かってくれる人が手をあげてくれることが分かったんです。建築家の方が引き取っていきました。陶芸ギャラリーに使われるみたいです。それも良かった。

**大島** 舞台奥のフレームは、別の劇団で使い終わった木枠を塗装して再利用しました。四角いボックスは、冒頭で紹介した知り合いの会社からレンタルしたボックスを塗装して再利用、ということで、舞台装置に関しては金具とか塗装の絵の具以外は新品なしでできました。

**木内** こういうことが果たして観客に

とってよいことかという面が、まだ答えが出ていないと思います。演劇公演のチケット料金がすごく値上がりしている中で、観に来るお客さんに「新品は買って使っていません」というには、すごく中身がちゃんとしてないと「だから何?」になってしまう、ということがすごく不安な面があります。

今回、稽古の最初から本番で使うこの素材が必要で、そのために大島さんにご苦労いただきました。稽古場スペースが完全には取り切れていなかったのですが、それでも、この古木を俳優が自分の手で触り続けて本番ができたというのは、演出家としてとてもいいことだったと思っています。

**大島** デザインする上で環境を考えた素材しか使えないとなると表現の制限になるんじゃないか、ということは議論としてどうしても出てくるし、自分の中でも葛藤があるんですけども、やっぱりクリエイティビティを生かしていかないといけないと思います。舞台美術だけに限らず、生活に関しても、いかに工夫して考えるか、限られた資源をどううまく使っていかってという風に頭をチェンジしていかないといけない。

**木内** レッシングという人は「ドラマトゥルク」という職業について初めての人だと言われていて、劇場がレパートリー演目を持つことが重要、貴族に見せるための演劇ではなく、繰り返し上演して市民に見せる、というのを示してハンブルク国民劇場で働いていた人です。この作品もグリーン・プロダクションに通じている、となんか言われた気がするんです。

**野村** ちなみに、『エミリア・ガロッティ』の現場からはゴミが出なかったっていう話なんですよね。

**木内** 舞台装置、衣装からの廃棄ゴミはありませんでした。ゴミでいうと、大島さんから「お弁当って要りますか」と。

**大島** 私もこの業界に入った時から、劇場でお弁当が提供されるという「当たり前」にずっと染まっていた、「お弁当がない」と制作の人に怒った時もあります。でもその当たり前ってどっから来たんだろう、と。ヨーロッパとかだと1時間半とか休憩時間があるみんなが食堂に食べに行くのが「当たり前」。他方、日本の大きな商業演劇のプロダクションだと、楽屋にもう100個以上お弁当が積み上がっていて、準備のスケジュールが変わって要らなくなって50個余ってる、なんて時があります。食べも



1 山翠舎の古木倉庫の様子  
<https://www.sansui-sha.co.jp/>



『エミリア・ガロッティ』の衣装。重ね着、ジャケットとパンツ 大ぶりのアクセサリ、コサージュ ベレーに羽根飾り

のに困ってる人が渋谷なんかにはいっぱいいるなかで、今後みんなで話していかなきゃいけない1つのテーマなんじゃないかなっていう風に思います。

**野村** イギリスでの取組を色々見てこられて、大島さんがいま日本で課題に感じてることをお聞きできますか。

**大島** 1つ、イギリスと日本を比べた時に、逆にイギリスの方がこれまですごい無駄をしていたことが分かったんですね。床を再利用もそうですし、イギリスの人たちは今パネルをユニット化していますとか言うわけですが、日本にはそもそも平台とか箱馬なんていう文化が元々あって全国の劇場にそれが備わってるなんて、すごいことのはずなんですよ。

だから、地球的規模な問題と私たちをちゃんとつなげ直せば、日本にはすでに発信できる状況があるんじゃないか。あと、計測してなくて評価ができないので、二酸化炭素に関して、その成果を見るために継続をしないとダメですね。

**質問者1** 子どもたちと夏休みの4日間、ワークショップを重ねて最終日にパフォーマンスをするというイベントを行いました。ダンボールや新聞紙などを再利用でたくさん用意しました。子どもたちは、テープでいろんな素材を組み合わせてベタベタと貼ったりしました。

最終日が終わった後に、子どもたちが作ったものをすぐにばらすのも憚られたので、子どもたちが帰った後に大人たちだけで処理しました。そうすると、リサイクルできない大量のゴミが出たんです。「これは何なのだろう」という気持ちになって悩んでいるのですが、子どもたちと一緒に分別して最後まで一緒にやれば良かったのか、どうなのか。

**大島** 私も子どもたちと一緒に工作をするので、ゴミの問題はすごくよく分かります。色々な素材を使って、子どもたちが素材それぞれの特徴を理解するという過程がすごく大切なので、制限してしまうというのは残念なことですね。子どもがばらすところを経験することで、次に作るものは、接着剤などを使わずに、ばらしやすいように工夫できるかもしれないです。素材がどういう風に生まれて、その大きな自然からもらったものをどういう風に自然に還せばいいか、大きなプロセスとして素材を学ぶことを取り入れることが大切なのかなという風に思いました。私もまだ子

もたちとそういうワークはできていないので、すごく参考になりました。

**質問者2** 私は今、産業廃棄物関係の仕事をしていて、その前は大道芸会社で働いていました。当時から舞台芸術界のゴミのリテラシーが低いということを感じていて、舞台ゴミは本当にぐちゃぐちゃで「管理型の混合廃棄物」の扱いになり、東京・埼玉周辺の業者さんだと1㎡あたり15,000～18,000円くらいの処分料になります。高いです。弁当の残飯を道具類と一緒にゴミとして下ろされて、ぶち切れたこともあります。ある運送会社さんでは、ゴミを埼玉の方から神奈川の相模原まで持って行っているそうです。その理由は、処分費用が安いからではなく、「ゴミをそのまま下ろさせてくれるから」。舞台の廃棄物の捨て方については、関係する皆さんに学んでいただきたいところです。正直、廃棄のコストはカットできます。あと廃棄のコストをケチらないでいただきたいです。

**野村** 確かに、そういった利用者の意識向上は、地域でいえば公立劇場の役割が求められるのかなと思います。運営として、残飯と産業廃棄物を分けるぐらいの余裕はなければおかしいですし、そうした時間を確保するのがプロデューサーのグリーン・プロダクションに対する責任というふうに認識を上げていく。

**大島** 処分する時も、処分のサービスを買っているわけです。「サービスから人材と時間にそのエネルギーを転化しよう」というのがグリーン・プロダクションの1つの基本です。分別することでお互いの負担を減らす。

**金井** 美術館のほうの話なのですが、ヨーロッパなどでは美術館の中にワークショップ/工房があって台座くらいはそこで作るんですが、日本の美術館にはそれがないんです。つまり日本のミュージアムは管理部門が全てになっていて、ものを作る現場をアウトソースしている、というこの状況が難しさである。もしかしてそれはミュージアムだけではなく公共ホールとカンパニーの関係や、もっと日本の文化産業全体の中で、問われるべき問題かもしれない。今日は隣接分野の状態を見て確認できてすごく有意義でした。ありがとうございました。



写真は『エミリア・ガロッティ』の模型写真(上)と稽古場の様子(下)





photo by Marehito Antoku

信州アーツ・クライメート・キャンプ  
〈会議〉第4回

「森で語らう、  
自分たちの環境・アート・暮らし」

〈会議〉シリーズ最終回となる Shinshu Arts-Climate Camp 〈会議〉第4回は、中川村の奏の森にて「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」というテーマで開催。自然環境と暮らしが密に関わる長野県において、環境とアート、そして暮らしがいかに関わりあうかを参加者同士が学びあう時間となりました。

〈会議〉の前半は、会場となった「奏の森」の取組紹介として、NPO 法人 F.O.P (Feelings of Power) によるライブ演奏と映像上映が行われました。NPO 法人 F.O.P では2018年より中川村の荒廃した森林の再生・保全活動に取り組み、誰もが心地よく、自然と触れ合うことができる場として森をよみがえらせるプロジェクトを実施。再生した森を「奏の森」と名づけ、音楽やダンス、建築といった表現を通して、

自然と人の暮らしを有機的につなぐ活動に取り組んでいることを、実際のライブ演奏によって参加者と共有しました。

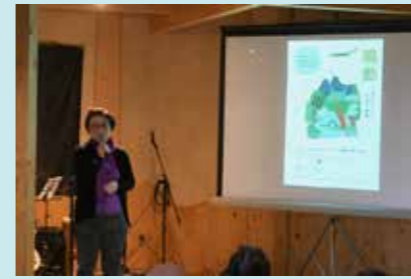
休憩と参加者の自己紹介を挟み、〈会議〉の後半は2023年度信州アーツカウンシルの助成事業から、「気候変動とアート」を主題にした取組を2例紹介しました。

1つ目の事例は、劇団野らぼうによる「ゼロカーボン演劇」の取組について。松本市を拠点に活動する劇団野らぼうは、2023年春の演劇公演において、照明や音響など上演時に生じる電力を、太陽光発電によって充電された電力だけでまかなう試みを実施。この公演スタイルを「ゼロカーボン演劇」と名づけました。登壇した劇作・演出の前田斜めさんからは、天候が演劇公演に影響を与えることの面白さと難しさをお話いただきました。



2つ目の事例は、ちいさがた未来民話研究会による創作民話劇『鳴動〜音が伝える災害の警鐘〜』の取組について。ちいさがた未来民話研究会では、災害や気候変動に関わる民話を収集し、それらを演劇・朗読・音楽など、様々な手法で新たに語り直す活動を実施。2023年は、木曾地方に伝わる「蛇抜け(じゃぬけ)」民話などを、演劇と即興演奏を用い、現代の人々にも親しみやすい表現で上演。その試みについて代表の姫凜子さんよりお話いただきました。

また、〈会議〉終了後は、参加者同士が交流する時間をもうけ、発表事例のもとに、アートと自然、暮らしそれぞれの結びつきについて、意見を交わしました。



信州アーツ・クライメート・キャンプ〈会議〉第4回  
「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」

[日時] 2024年(令和6年)1月20日(土)13:00~15:30  
[会場] 奏の森(長野県上伊那郡中川村片桐1954)

①「奏の森」の紹介(NPO法人F.O.P)  
[プログラム] ②活動の共有  
信州アーツ・クライメート・キャンプ〈会議〉の振り返り  
助成事業: 劇団野らぼう  
ちいさがた未来民話研究会  
③交流会

[主催] 信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)  
信州大学人文学部、長野県

令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

Talking in the Forest, Our Environment, Art, and Lives

The fourth and final event in the Shinshu Arts-Climate Camp series was held at the Kanade-no-Mori forest in Nakagawa Village under the theme of "Talking in the Forest: Our Environment, Art, and Lifestyles". In Nagano Prefecture, where the natural environment and daily life are closely connected, participants had a chance to learn from each other about how the environment, art, and daily life are connected.

In the first half of the session a live performance and video presentation by NPO F.O.P. was held to introduce the activities of the venue, "Kanade-no-mori," which has been involved in restoring and preserving abandoned forests in Nakagawa Village since 2018, and is implementing a project to restore the forest as a place where people can safely come into contact with nature.

The hosts shared with the audience through a live performance that the regenerated forest is named "Kanade-no-mori" and that they are engaged in activities to organically connect nature and human life through music, dance, architecture, and other forms of expression.

After a short break and self-introductions by the participants, the second half of the session featured two examples of projects supported by the Shinshu Arts Council in FY2023 that focused on the theme of "climate change and art".

The first was the "Zero Carbon Theatre" project by the Norabo Theater Company. The Matsumoto-based theater company Norabo is attempting to use only electricity charged by solar power generation to power lighting, sound, and other aspects of their performances in the

spring of 2023. This style of performance is called "Zero Carbon Theatre. The playwright/director, Shame Maeda, spoke about the interesting and difficult aspects of how the weather affected their performances.

The second case study was "Narudo: Sound Conveys Warning Bells of Disaster," a creative folk tale play by the Chiisagata Future Folktale Study Group. In 2023, the group will perform the folk tale "Januke" from the Kiso region, using theater and improvised music, in a way that is familiar to people of today. Ms. Rinko Hime, the representative of the group, spoke about their attempts. After the conference, participants had time to exchange opinions about the connection between art, nature, and daily life, based on the examples presented.

# Shinshu Arts-Climate Camp 〈会議〉第4回の現場から

長野県上伊那郡中川村。伊那谷を縫うように流れる天竜川から少し山あいにあがったところに「奏の森」があります。明るくひらけたこの森は、今でこそ様々な人々が集い、自然とともに過ごす場ですが、ここはもともと暗く、荒れた森で、近隣の果樹園では猿や鹿などの獣害に悩まされていました。Shinshu Arts-Climate Camp 〈会議〉第4回は、奏の森を拠点として活動しているNPO法人F.O.Pのみなさんが、いかにしてこの森を再生し、人と自然が共存できる環境をつくり上げてきたかを、映像とパフォーマンスを通して紹介するところから始まりました。



photo by Marehito Antoku

## 「奏の森」の再生と拠点づくり (NPO 法人 F.O.P)

NPO 法人 F.O.P は、伊那谷の自然・環境・文化を次世代に継承することを目的に、代表の杉浦歩実さんらが中心となって2008年に設立。人と自然をつなげる様々な活動を展開しています。2018年からは、「奏の森」の森林再生・拠点づくりに着手。荒れた森の木を切り、製材し、大工の方などの様々な助言・指導を受けながら、自分たちで/みんな、活動拠点となる建物や場所をつくってきました。

現在につながる活動として、前半では、2009年から音楽芸能と農を結び『ファーマーズヘブンフェス』など若者の人口減少や農林業の衰退といった課題に取り組んだ

活動を紹介。その際、農業と環境問題に直面したことをきっかけにつくったのが、ダンスミュージカル『だれもしらないみつばちのものがたり』。この作品では、ネオニコチノイド系の殺虫剤の使用などの原因により、急激に減少しているミツバチを主題に、ミツバチの暮らしや、生き物すべての命のつながりの素晴らしさが伊那谷の美しい自然を背景にしたダンスなどで表現されていました。作品づくりにあたって、中川村の養蜂家を訪問するなどのリサーチを実施。最終的に約80名の方が出演ほか作品づくりに携わり、中川村文化センターでの本番では600名を超える方々が鑑賞し、



親しみの持てるミュージカルの表現を通して、ミツバチの急減という危機的な状況への理解を広げました。

後半は奏の森の森林再生・拠点づくりの活動をご紹介します。放置され荒れてしまった森は、周囲の畑を荒らす猿などの棲みかとなり、古木、倒木などの危険木の片付けや、樹木が混みあって光が入らない部分の伐採、枝払いなどの整備・保全活動を行う必要がありました。整備で間伐した木々を乾燥、製材し、専門知識を学びながら、みんなが集う拠点をみんなで協力し合って建築。自分たちで建てたからこそ施せた様々な工夫を凝らした「ハニ



当日上映した映像



DANCE MUSICAL  
「だれもしらないみつばちのものがたり」\_予告編①  
<https://www.youtube.com/watch?v=kyWuFt1hMJE>

奏の森「ハニカムハウス」  
(長野県上伊那郡中川村片桐 1954)  
<https://fop-jp.net/>



カムハウス」は、奏の森のシンボルとなっています。

こうした活動と並行して、2019年には、奏の森を舞台に、『森の冒険ミュージカル』を創作。この作品は、観客が、森林の問題をテーマにした3演目を鑑賞しながら、森の中を散策できる参加型の作品として上演されました。衣装はすべてリユースの素材から制作、創作プロセス全体として環境に配慮した取組が進められただけでなく、森の整備に入る初日に、地元の宮司さんにプロジェクトの想いをご祈りいただき、みんなのご神木として最後まで残したヒノキを実際に伐採するワンシーンを上演中に設けました。伐採に立ち会う経験を通して、木、そして森の尊さ、命の尊さを問いかけ、観客は人と森、人と自然のつながりを改め

て見つめ直す機会となりました。

また、今年度信州アーツカウンシル助成事業での取組として、2023年10月からは、奏の森を拠点に活動する「カナデル幸響楽団」と、森に日々集う人たちが、循環型の暮らしを音楽やダンスなどの表現につなげていく、クリエイション・ワークショップを実施。11月に開催した「収穫祭」でワークショップで創作した『米米米(ベイベーマイ)ソング』の演奏、ダンスを披露しました。この曲は、奏の森に集う人々が今年、一緒にお米を育ててきた経験で感じたことや印象に残っている言葉を出し合っ、みんなで吟味しながら歌詞をつくり、歌ってみて、話し合いながらメロディーやコード進行、フレーズをつないでつくられました。奏の森でのクラブ活動のように集

い、互いに学び合いながら、歌と演奏とダンスを完成させました。

この日は、映像で、このワークショップや「収穫祭」の様子までが上映され、屋下がりになり奏の森に集った親子参加者が、一緒に混ざり合って生演奏とパフォーマンスを楽しみました。奏の森という場所が生まれ今の状態になるに至った思いや過程、そして、暮らしとアート活動が重なる様子を、映像を通して知ることができました。またそれ以上に、ライブパフォーマンスを通して参加者たちの感情を揺さぶり、アート、暮らし、環境にまつわる様々な課題について問いかけるような、密度の濃い時間となりました。

## 自前の太陽光発電を活用した 「ゼロカーボン演劇」の試み (劇団野らぼう)

休憩と会場参加者の自己紹介を行った後、信州アーツカウンシルの助成事業から、劇団野らぼう（松本市）の「ゼロカーボン演劇」と、ちいさがた未来民話研究会（上田市）による創作民話劇『鳴動～音が伝える災害の警鐘～』の取組の紹介がありました。

劇団野らぼうからは、劇作・演出の前田斜めさんが登壇し、2018年の劇団発足から、近年のゼロカーボン演劇の取組までをお話いただきました。ゼロカーボン演劇では、劇団野らぼうの野外劇の上演に必要な、照明や音響などで使う電気を、ガソリンから電力を生む機材でなく、劇団稽古場の屋根に設置したソーラーパネルで太陽光発電をして充電した電力のみ

でまかさないです。劇団野らぼうがゼロカーボン演劇に取り組み始めたのは2022年のこと。NPO法人上田市民エネルギーの藤川まゆみさん（P.34参照）ら有志とのミーティングを重ね、7月にはあがたの森公園（松本市）にて野外映像上映会を実施し、太陽光発電由来の電力の使用を試みました。

信州アーツカウンシル助成事業として、2023年4月にはあがたの森公園で演劇公演『ロレンスの雲』を開催。本公演では、1ヵ月の公演期間のなかで、稽古場の屋根に設置したソーラーパネルの発電により、バッテリーの充電量が100%になったら、翌日に上演を行う（充電が未了の場合は上演を行わない）というユニークな

スタイルの公演となりました。上演日は天候次第、観客も直前になるまで公演があるのかが分からなかったり、鑑賞体験としても、上演の途中で充電が底をつき、暗闇の中で俳優が手回しの懐中電灯を照らして演ずるなど、「限りある電力」を実感する事態も発生。天候次第の不規則な環境下での公演を、前田さんは「太陽と雲も劇団員」という言葉で表現しました。劇団員同士が話し合って劇の内容や公演について決めていくように、太陽などの自然環境の様子も反映しながら、公演につなげていく。自然と人間とアートが、互いに影響し合い、釣り合ったところでゼロカーボン演劇が成り立っている、という当事者の実感がうかがえました。



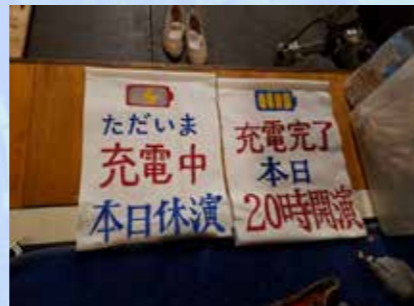
photo by Teiji Takizawa



前田斜め（劇団野らぼう）  
長野県松本市を拠点に主に野外で、演劇活動を行っている。テント芝居の実現を目指して邁進中。2024年秋にその実現を目論んでいる。「野外での表現活動、全面的にサポートいたします」。



劇団野らぼう 第7回公演『ロレンスの雲』  
2023年3月21日（祝・火）人形劇場ひまわりホール（愛知県名古屋）、4月1日（土）～30日（日）あがたの森公園（長野・松本）5月21日（日）調布せんがわ劇場（東京・調布）、5月27日（土）犀の角（長野・上田）、6月4日（日）西会津国際芸術村 前校庭（福島・会津）  
脚本／演出：前田斜め  
舞台監督：星善之（東京・仙川公演）  
出演：くずおか由衣、成田明加、深沢豊



## 創作民話劇

### 『鳴動 ～音が伝える災害の警鐘～』 (ちいさがた未来民話研究会)

続いて、ちいさがた未来民話研究会・代表の姫凜子さんにご登壇いただき、2023年に行われた創作民話劇『鳴動～音が伝える災害の警鐘～』について発表していただきました。

発表は、俳優・パフォーマーでもある姫凜子さんのヴォイスパフォーマンスから始まりました。民話の中に、災害の予兆として出てくる「鳴動」を、自身の声で様々な表現。忍び寄る災害の恐怖と不気味さを見事に表出しました。

ちいさがた未来民話研究会では、災害伝承や気候変動に関わる民話から演劇・朗読・音楽など、様々な手法で新たに語り直す活動を行っています。2023年度はその一環として、創作民話劇『鳴動～音が伝える災害の警鐘～』を制作、10月にヴィオ・パーク劇場（松本市四賀）にて

上演し、姫凜子さんのほか、音楽家の大隅健司さん、ホームイ歌手の葛目純一さんが出演しました。

創作民話劇の制作にあたって、ちいさがた未来民話研究会のメンバーは、長野県内の自然災害に関わる民話を収集。その民話が伝えられてきた地域を実際に訪問しリサーチを行いました。例えば「蛇抜け」は土石流を意味しますが、この「蛇抜け」にちなんだ民話が木曾に残っており、それらのリサーチとして、木曾で実際に土石流災害の殉難者を弔う地蔵像など、関連する事跡を見てこられたとのことでした。

2023年10月には出演者の公募を兼ねたワークショップを開催。音楽家の大隅健司さんが講師を務めた回では、民話のテキストを読みながら、「激しい雨」や「土砂崩れ」など、音にまつわる言葉を、楽器や

身近な小物を使って表現。参加者それぞれが思い描く音を即興的に演奏しました。こうした取組を重ね創作されたシーンを構成して、10月29日、ヴィオ・パーク劇場で、いくつかの民話を元にした創作民話が上演されました。「向こう」の世界と「こちら」の世界をつなぐ「鳴動」、民話中にでてくる様々な音を、即興演奏や倍音音楽、ヴォイスパフォーマンスなどを使って表現。現代だから生まれてくる形での上演となりました。

将来的には視点をさらに展開し、現代の民話として、目下進行している気候変動による農作物の不作や降雪の減少などの現象を捉え、創作民話劇として上演することを目標としているそうです。ちいさがた未来民話研究会のこれからの活動に期待が膨らみます。



『鳴動～音が伝える災害の警鐘』  
2023年10月29日（日）ヴィオ・パーク劇場  
総合演出：仲田恭子（アートひかり）  
企画・監修：姫凜子（ちいさがた未来民話研究会）  
出演：姫凜子、大隅健司、葛目純一、ワークショップ参加者有志



長野県立歴史館特別館長の笹本正治先生をまじえ、蛇抜けの旅の写真を見返しながらアフタートークも実施。



姫凜子  
演劇・演芸企画・俳優・余興家・ボイスパフォーマー。上田市在住、横浜市出身。整体師でもあり、自身の身体感覚・皮膚感覚を重視した作品づくりを大切にしている。

## この1年を振り返って

<b>鼎談</b>	長野県内で文化芸術に携わる人たちが気候危機や環境問題に対してアクションしていくための、連携や学びや実践の“場”として、2023年に立ち上がった「信州アーツ・クライメート・キャンプ」。
<b>金井直</b> （信州大学人文学部教授）	案内人である金井直、ロジャー・マクドナルド、野村政之の3人に
<b>ロジャー・マクドナルド</b> （インディペンデント・キュレーター）	活動を振り返ってもらった。
<b>野村政之</b> （信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター）	
聞き手・編集：岡澤浩太郎	



——「信州アーツ・クライメート・キャンプ」（以下、キャンプ）は「文化芸術の視点から気候変動や地球環境の課題を見つめ」「コモンスペースをつくるプロジェクト」と謳われていますね。

**野村** 気候危機に対してすでに実践している人たちが、お互いを知る、紹介しあう、議論や情報交換もできる……そういうネットワークというか、抽象的なスペースをつくれれば良いなと思って始めました。

**ロジャー** そうですね、仲間を探すことからスタートしよう、と。

——キャンプは2023年度に始動していますが、始まった経緯を振り返っていただけますか？

**野村** 2022（令和4）年6月9日に第2次長野県文化芸術振興計画有識者懇談会の第1回が開催され、そこに座長として金井さんが、委員としてロジャーさんが参加されていたんです。そこで県から「2035年の長野県」について質問が出され、ロジャーさんが気候変動について発言されましたよね。あの発言で会全体の意識が引き寄せられたと思います。

**ロジャー** そうですね。私は2019（令

和元）年頃から、自分が住んでいる佐久市の望月という地域で、数人の仲間たちと集まって勉強会を開くなど、ローカルのレベルで気候危機について知るための小さな市民運動をしていたんです。

そのうちに、自分がかかわるアートや芸術の分野が気候危機に対して何かアクションを起こしているのか、軽い気持ちで調べ始めたんです。もちろん、作品や思想家の書いた文章は山のように出て来たんですが、イギリスのテート美術館が2019年に気候緊急事態宣言を出し、また2022年からだと思いますが、作品や思想だけでなくアクションの流れが、特に「ギャラリー気候連合／Gallery Climate Coalition：GCC」をはじめとするヨーロッパで増えていることに気づいたんです。

芸術界もこうした活動をしていることを知って驚いて、それですぐに、自分が所属するNPO法人AIT（Arts Initiative Tokyo）もGCCのメンバーに加入し、それ以来、もうちょっと真剣に、“climate action”を考えています。もはや現代において未来を予想することは、おそらく、環境問題抜きでは不可能だという気がしています。

——2022年の有識者懇談会では、ロジャーさんは海外の具体的事例など、かなり詳しく情報提供されたそうですね。こ

れを県に対して提言したことの背景には、望月での市民レベルの活動だけでは現実を変えられない、というような危機感やもどかしさがあったんでしょうか？

**ロジャー** まさにそうです。個人や市民のレベルで実践することも大切ですが、それだけでは限界があると、すごく感じていました。

望月にある多津衛民藝館に携わっている先輩たちは環境問題に対して30年前から活動していますが、彼らと話しても、「これは行政にもっていかない」と言うんですね。

つまり、二酸化炭素をもっとも多く輩出しているのは国や自治体、産業のようなシステムであって、この事実は無視できない。だからやっぱり、いろいろなレベルで同時にアクションを起こす必要があると思います。

**金井** 私がロジャーさんのその提案を受け止められた理由は2つあります。

ひとつは、現代美術でそうしたタイプの作品に触れる機会が増えてきたから。例えば2015（平成27）年の第56回ヴェネツィア・ビエンナーレで、南太平洋の島国・ツバルが水没していく自分たちの国を作品のテーマにして展示していましたよね。作品としてはそのまますぎるとは思いましたが、

ただやっぱり、記憶には残っているんです。もうひとつは、当時、新型コロナウイルスのパンデミックがあった影響で、日常に目線を下げて歩くことや身のまわりを見ること、それを踏まえて逆に目線を上げることが大切だという意識が、街中に広がっていたことです。実際に私が教えている大学の学生にも、そういった会話が増えていた印象があります。

**野村** やはり長野では、2019年10月の台風19号災害からパンデミックへ、という流れが大きかったと思います。その後、岡谷のほうで土砂崩れもありましたし。そう考えると、長野県というエリアでは外せないテーマになっていた、ということでしょうね。

——2022年の懇談会でのロジャーさんの提言を、県としては、どう受け止めましたか？

**野村** 予め想定はしていなかったと思います。ただ、県としては2019年12月に気候非常事態宣言を出していたし、重点的に環境政策に取り組む動きは既に始まっていました。

例えば、信州大学人文学部の茅野恒秀准教授もかかわる「くらしふと信州」が2022（令和4）年度から始まり、様々な

主体と協働・共創するゼロカーボンの取り組みを続けていたタイミングでもあったので、環境分野と芸術文化が関係するという実態は、受け止めることができたと思います。だから、計画内の1項目として自然に加わったと感じています。

金井さんには信州アーツカウンシルの立ち上げに有識者として関わって頂き、信州大学人文学部と何か連携事業をやるうという話は以前からしていましたが、「アートと気候危機」というテーマを発見できたことで、「信大としてもすごくポテンシャルのあるテーマだ」と、いい反応をいただけて。とはいえ、県内では以前から活動している人がいることや『アースデイ in 佐久』のような本格的な取り組みがあるのも知ってはいたんですが、いざ取り掛かるうにも、どうしたらいいか僕もわからなくて（笑）。

それでロジャーさんに相談しに行ったら、「まずは科学的なところから始めては」と。それで浜田崇さん（長野県環境保全研究所）のことを教えていただいて。

**ロジャー** 浜田さんは、私たちが住んでいる気候地域や、山の地域を約25年間、ずっと研究している。感情やフィーリングだけでなく、科学的なデータでバックアップできるのは大事ですね。

**野村** そこから、2023年3月1日に

開催した、信州アーツカウンシル×信州大学人文学部連携フォーラム『アート×気候変動 未来を創造するアートアクション』につながったんです。

あのときは、浜田さんに、データを示しながら気候危機を説明していただきましたよね。例えば松本では1890年代から気温の観測データが蓄積されていて、当時からすでに2℃以上、平均気温が上昇している、と。

**ロジャー** IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が警鐘を鳴らしている、「産業革命前からの気温上昇幅1.5℃」を、松本はすでにオーバーしている、というお話でしたね。

**野村** それから、長野県には標高3000メートル以上の地域があることが特徴ですが、地球温暖化によって、その環境下で生態系の分布が下から上にどんどん上がっている、と。ともかく、「何が起きているかわからないが、何か起きている」というお話で。

——3月の会は、アートと気候変動を結び付けて考えることを問題提起するためのキックオフという位置づけだったわけですね。



## 自分とかかわりのある芸術文化の領域で気候危機が取り上げられた 途端、見え方が変わった（金井）

### 科学者や美術史学者、アーティストと、緩やかに学問を横断する 総合的な視点が実現できたのは非常に重要（ロジャー）

**ロジャー** そうですね。気候危機と文化芸術は、直接的には関係ないように思えますが、気候危機はメタなテーマとして、文化芸術に限らず、我々の生活のすべての要素に直接かかっている。だから、政策立案者、政治家、もちろん市民のひとりひとりも、気候や地球環境というレイヤーは意識する必要があります。

気候危機という問題自体は昔からありましたが、近代という時代では、例えば美術館も、外側からのバイアスが一切入ってこないように完璧につくってしまっていて、自分たちがすべてコントロールできているような、あるいは「見ないフリ」ができたと思うんです。でもいまは、外側から風がどんどん入ってくる。たとえイヤでも、非常災害のように何らかのかたちで迫ってきますから。

**金井** 信州大学でも気候危機は明らかに上位の課題として掲げられていて、目標を立ててエコアクションを実践していますから、信州大学は環境問題に対して意識が高いというのは事実だと思います。ただ、私の反省も含めて、そこまでリアリティがなかったんです。

でも、自分とかかわりのある芸術文化の領域で気候危機が取り上げられた途端、見え方が変わったんですね。ひとつひとつの数値にもリアリティの焦点があってきた。それから、大学内でのつながりも増えまし

た。キャンプにもかかわっていただいている茅野先生とは、美術史と社会学でお互いにかかわる話題がこんなにあるのかと気づきも多いし、学生の教育にも生かせると思っています。

こうなると、大学で目標を立ててただ「脱炭素」と言っているときとは、だいぶ考え方が変わりましたよね。「大学のなかでもできるんじゃないか」「研究室はどうしたらいいか」という方向に展開する機会でした。

**ロジャー** その茅野先生には、7月4日に開催した（〈会議〉第1回『信州発、アートとゼロカーボンの明日へ』）に講演していただきましたが、科学者や美術史学者、アーティストと、緩やかに学問を横断する、総合的な視点が実現できたのは非常に重要だったと思います。

**金井** 茅野先生のお話のなかでNPO法人上田市民エネルギーの藤川まゆみさん。（〈会議〉第2回『アート×気候危機～不可能かもしれないビジョン』に登壇）が紹介されていましたよね。「あ、その人知っている」みたいなつながりが、いままで見えなかったのに、「気候危機」というテーマを設定することで見えてきた。言わば、信州のネットワークというか、メッシュワークが立ち上がってきたのは大きかったと思います。

芸術自体が持つボーダレスな状況は、頭ではわかっているけど、なかなか実感がわかないことがあると思うんです。ところが気候危機に関しては、美術館の人が「この建物の断熱はどうなっているんですか？」と質問されたりして、横並びで語られ始める。あの、フラットな感じが、とてもよかったですね。

**ロジャー** 芸術やアートを前面に押ししていないからこそ、いろいろな人が興味を持ってくれた、ということもあると思います。環境や地球の問題なら、フラットなかたちで、とりあえずテーブルを囲むことができる。何と言っても、勉強会であり、ネットワーキングの会であり、連合づくりでもある。初めて知りあえた方もたくさんいたし、県内に実践者がいることを再確認できたし、同時に、「まだまだだ」「これからやらないと」ということも見えてきました。

**野村** アーツカウンシルには社会連携、異分野協働、のような役割がよく問われますが、「気候変動とアート」というテーマなら意外とずっと行き来できるというのは、やりながら感じていますね。

**金井** 〈会議〉が長野県の4つの地域で開催されたのもよかったですよね。それぞれの地域の特徴・特性を生かすのは、

イメージ出来ても実践するのはなかなか大変だと思うんですが、見事に実現しましたよね。

それに、県とかかわりのあるアーティストが、何らかのかたちでかかわっていたのが重要だったと思います。

1回目の、茅野先生の状況分析と提案のあと、質疑応答で「実際にアーティストとして活動しているが、ゼロカーボンなんて簡単には言えない」というような現場の声もちゃんと届けられ、それに対して茅野先生の科学的な知見からの応答がありましたよね。さっとした一瞬のことでしたが、質疑応答の意味が高まったと思います。

2回目は映画を題材に、アフリカを介して世界へ視点が広がった。それからパフォーマンスも素晴らしくて、それに鼓舞されるように、アーティストのみなさんのトークがストレートになっていたのもよかったです。

3回目（〈会議〉『地球の今、美術館の明日～持続可能な未来をめざして～』）は、美術館という制度がどう機能するかというテーマでした。いろいろな立場があって難しいテーマに対して、アーティストから「クリエイターとしていま何をやりたいか、何ができるのか」という、自問自答のようなものが展開された。

**野村** あの3回目で、ある意味、登壇

初めて知り合えた方もたくさんいたし、  
県内に実践者がいることを再確認できた（ロジャー）

正直に言うと、日本国内ではまだハードルが高いと思うんです。  
だからこの長野県の事例がきっかけになるといいですね。（金井）

者の中で話が煮詰まったところに、アーティストや、藤川さんのように環境問題に対して活動している方、茅野先生のような学者と、いろいろな人がいろいろな提案をしていただいてサジェスチョンしあうことで、「これからどうしていこうか」とみんなで考える空気が生まれましたよね。この取り組みを始める前は全然予想していなかったことでしたが、すごく手ごたえがありました。

**ロジャー** あれはポジティブでしたよね。それにこういうシンポジウムって、ふわっとしたもので終わりがちなんですが、質疑応答のときに茅野先生が松本透館長（長野県立美術館）に対して、「ほかの施設は再生可能エネルギーを導入しているが、この美術館はどうですか。すぐできると思いますが」のような、非常に具体的なサジェスチョンが出されたことは、すごく覚えてます。

おそらくそれもあって、松本館長はその後みずから相当アクティブに県に働きかけたんですね。いま、県の施設は順番に再生可能エネルギーを導入していて、その順番待ちになっているそうですね。

**金井** 美術館施設が気候変動のようなテーマを受け入れるというか、議論するのは、正直に言うと、日本国内ではまだハードルが高いと思うんです。だからこの長野



ギャラリー気候連合が上手いなと思うのは、『アクション』という言葉に  
すべてを集約しようとしていることです。“Finally, we have to act” (ロジャー)

まずは低いところになっている果実から収穫しよう、と。  
現実的にはそこからやるしかないですよ(ロジャー)

『環境意識というのは人権意識と同じである』  
という感覚になりました (野村)

『今の社会で、自分はこうでなければならない』という生き方から解放される、  
『違う生き方がある』と思わせてくれる、ということでもある (野村)

県の事例がきっかけになるといいですね。  
そうすれば、ほかも追いつけやすいですから、一気に状況が変わると思います。

**ロジャー** 本当にそうですね。長野県がリーダーシップを取って、北信・中信・東信・南信、大小も芸術表現も様々で、それを見た人が「あれだったらうちもできる」と模倣できるような、意味のあるアクションを取っている文化施設や団体が今年度に花開いたら、ファーストステップとしてはすごくいいと思いますね。

——キャンプを1年間行ってきましたが、課題のようなものは感じていますか？

**ロジャー** 始めて半分くらい経った辺りから、「僕たちは車をすごく運転している」という話が出始めましたよね。つまり、キャンプをやること、あるいは信州アーツカウンシルの普段の仕事について内省が始まった。もしかしたらそれまではカーボンフットプリントをあまり意識していなかったかもしれませんね。

**野村** 第3回の〈会議〉で、NPO法人AITの塩見有子さんには、「アート・プラクティス」と「アート・システム」の2つの観点からお話いただきましたが、アートシステムにかかわる産業や日々の仕事に

関しては、いつ、誰でも、どこからでも始められるということが、だんだん腑に落ちてきましたね。

**ロジャー** 実際に信州アーツカウンシル自体もカーボン監査をしよう、ということになったんですね？

**野村** はい、いまやっているところです。

**ロジャー** 僕たちがメンバーになっているギャラリー気候連合が上手いなと思うのは、「アクション」という言葉にすべてを集約しようとしていることです。もちろん、思想や哲学や歴史の話をしてもいいんですが、でも、“Finally, we have to act.”と強調するんですね(笑)。行動しないと、とにかく時間がない。

**野村** 確かに、自分たちが実践している姿を見せるということが、メッセージとしては一番わかりやすい。

**ロジャー** もちろん、キャンプを開始したこの1年で、いろいろな矛盾もあったと思います。かつての先住民のようなアポリジナルな生活をしない限り、気候問題に対して100%純粋なポジションを取るのとは不可能だというのは事実ですから。それに環境問題って、意外と、それぞれ

の人の「コア」を刺激する話じゃないですか。なかには怒ったりイライラしたりする人もいれば、「俺の存在意義を批判しているのか」というリアクションもあったし、逆に「どうせダメなんですよ？」とお手上げ状態の人もいたし。

だから、「できるところから」というように、グラデーションを丁寧につけながら話さないといけなないと、すごく感じました。

**野村** ロジャーさんは当初から「気候正義 (climate justice)」の話をしていましたよね。実は僕、なぜ「正義」とまで言うのか、最近までわからなかったんです。だけどいまは、「環境意識というのは人権意識と同じである」という感覚になりました。つまり、「他人の人権を大事にすることは、自分の人権を大事にすることである」というのと同じように、「環境を意識することは、ほかの人にとっても生きやすい社会をつくることである」と。

第2回〈会議〉のタイトルには「アート×気候危機～不可能かもしれないビジョン～」とありますが、単純に、答えがわからないし、成功するかどうかもわからない。だけど、前向きにやっていくしかない、と思えたんですね。

**金井** 学生にも同じことを言っていたんですが、日本語で「正義」というと、どう

しても「力」を連想しますよね。だけど寓意の「正義の女神」が手に持っているのって、「剣」と「天秤」じゃないですか。だから剣=力ではなく、天秤=どうやって均衡を取るかが、「正義」の背後にはある。

ロジャーさんが先ほど矛盾と言われましたけど、茅野先生は第1回の〈会議〉で「緩和と適応」と言っていましたよね。それって、矛盾に対するひとつの筋というか、バランスを求めていく態度だと思うんです。

その意味では生きる実践でもあって、場合によっては人権問題とか、僕らが共有している価値全般ともつながることだと思います。

**ロジャー** 英語で“low-hanging fruit”という言葉があるんですが、いまの段階はそれだと思うんです。つまり、果樹の一番高いところになっている果実ではなく、まずは低いところになっている果実から収穫しよう、と。確かに、現実的にはそこからやるしかないですよ。

例えば、第4回の〈会議〉(『森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし』)は中川村の「奏の森」で開催されましたが、日本のパフォーマーやミュージシャンのおそらく8割は大都会に住んでいるわけですよ。ビジネスとして成り立たせるためにライブをやるには都会のほうがいいですから。

だから、すべての人が奏の森と同じようにセルフビルドで何かをつくれるのかと考えると、都会のど真ん中で家賃を払って、というシステムのなかで「どこから始めたら？」となっている東京のアーティストやギャラリストに対しては、違うレスポンスが必要になると思うんです。やっぱり、産業的なシステムにも介入して働きかけないといけない。

例えば僕が「恵比寿映像祭」に作家として参加したとき、いろいろなものを望月から東京まで運搬したんです。キュレーターを通じて運送会社には事前に「できればプラスチックではない、リサイクル可能なものを使えたらうれしい」と伝えんですが、最終的にはコストの問題、そして「そもそもそういうものがない」と言われ、結局プラスチックを使うしかなかったんです。

だから、いくら「やろう」という意識があっても、システム上、応えてくれない。だけど、声をあげることくらいはできるじゃないですか。

**野村** 資本主義・消費社会を適応させていくのと、資本主義から排除されてしまっている知恵を近づけていくのと、両方の作戦がありますよね。それって結局、何を大事にして自分の近くに置いて、日常生活において何を選びとるか、という話だと思うんです。ある意味、「今の社会で、自分は



『収入＝ゆたかさ』とは違う観点に転換していくとき、  
『文化のゆたかさ』という要素がもう一度見直される、と僕は感じています（野村）

リズムを少しずつスローモーションにさせていく必要があるんじゃないか。  
多分そのときに、アートは価値を与えてくれる（金井）

こうでなければならない」という生き方から解放される、「違う生き方がある」と思わせてくれる、ということでもある。

**金井** ひとりのアーティストが生涯でどれだけ作品をつくるのか、制作活動が維持されるための作品量も重要ですね。「食べていかないと」とか。だけど本当にそんな量が必要なのか……。

**ロジャー** 第3回の〈会議〉で、世界的なビジュアルアートセクターにおける二酸化炭素排出量のうち6～7割を「来場者の移動」が占めているという、美術館の存在意義そのものを揺るがす驚きの数値が提示されましたよね。

それでこの間、東京の森美術館で行われたシンポジウムに MoMA とテート美術館の館長が登壇していたんですが、二人とも気候危機に対して意識が高く、なるべく多くの人たちをどこからでも呼び集めて観客動員を増やすという、これまでのビジネスモデルを「根本的に考え直さないといけない時期に来ている」とはっきり言うわけです。これは相当なことですよ。収入が減る可能性はかなりあるし、いろいろなものが変わるだろうし。

**野村** 「収入＝ゆたかさ」とは違う観点に転換していくとき、「文化のゆたかさ」と

いう要素がもう一度見直される、と僕は感じています。

民俗芸能研究者の先生が、南信州にたくさんの文化が残っていることを指して、「何百年という昔から今にこれだけのことが残っているというのは、この地域、土地がゆたかじゃないとできません」と言っていて、深く納得しました。そんなふうにも昔のものや昔のあり方を見ることは、すごくヒントになるんじゃないかと。

気温上昇とか、化石燃料の消費が上がるとか、わずかこの50年の話じゃないですか。それを現行世代の私たちはよく自覚したほうがいいし、「変えられない」なんて言っている場合じゃない。

**金井** 300年ぐらい単位で見たほうがいいですね。移動速度にせよ展示会のサイクルにせよ、あるいは過去にあったことを忘れるということも含めて、いまは時間の早回しを求められ過ぎています。そのリズムを少しずつスローモーションにさせていく必要があるんじゃないか。多分そのときに、アートは価値を与えてくれると思うんです。ひとつひとつの手の動き、指の動き、描くこと、見ること……。

**ロジャー** アートは、その誕生の瞬間からそうですね。

**金井** そう、セザンヌの絵の前に3時間立ち止まらせるとか（笑）、アートはそういう力を与えてくれるわけですから。

我々は今年度、いろいろなことに気づいたわけですね。気づいたら、やってみよう、と。あまり成果が上がらなくても仕方ないですが、とにかく一歩、やってみる。そんな1年でした。2024年度は、県立美術館もそうだし、「シンビズム」のような場もそうですが、今年よりもさらに意識しながら活動していきたいですね。例えば松本なら地域の芸術祭で、意識を共有するために小さなシンポジウムを開催するとか、そのように現場とのかかわり方を増やしていくと面白いですね。

それからやっぱり、こういう活動を進めると人との付き合いが増えるのが面白い。個人的には大学の理学部の先生方からより科学的な知見——人類史的な視点で地質年代について深く知るとか、どんどん俯瞰してもいいと思っていますね。

おそらく、アーティストにとっては、そうした機会もすごく刺激的だと思うんです。そのような知識の交換や学びの機会を、もっと増やしたい。

**ロジャー** それから、発信も重要ですね。信州でやりつつ、他県のアーツカウンシルとつながるとか、シンパシーを持てる先生方とのネットワークを信州以外にも広

他県のアーツカウンシルとつながるとか、シンパシーを持てる先生方とのネットワークを  
信州以外にも広げたい（ロジャー）

まだたくさんいる県内の実践者の話を拾っていききたい（野村）

げたい（野村）  
ごに何%削減したかがサイトで可視化されているとか、環境に配慮している取り組みに寄付が集まるような仕組みがあるとか。

**野村** 信州アーツカウンシルとしては来年度、これまでの活動を紹介する事業をやろうと思っているんです。県内を旅して、できるだけ県民から近いところに運んで展示する、という内容で。そのなかに信州アーツ・クライメート・キャンプも入れていきたい。

それから、まだたくさんいる県内の実践者の話を拾っていききたいという気持ちはあります。今回制作したポッドキャスト（「気候とアートのダイアログ」）もすごく面白かったですから。

**ロジャー** それから、例えば無料で炭素監査できる日本語版のカリキュレーターとか、リサイクルの梱包材のある場所とか、そういう役に立ついろいろな道具がわかるといいですね。AITでは東京のアートシーンに対してリスト化しようとしているんですが、その信州版をオンラインでもオフラインでもリスト化する、とか。

**野村** 確かに、それぞれの活動を自己評価していける環境もいいですね。二酸化炭素の排出をどれだけ抑えられているのを見せ合うとか。例えば、団体の取り組み

ごに何%削減したかがサイトで可視化されているとか、環境に配慮している取り組みに寄付が集まるような仕組みがあるとか。

**ロジャー** グリーンバッジみたいなものをつくって、例えばカーボン監査を1年実施した団体にはバッジをあげて、それがウェブサイトに載っていて……とか。

**野村** それから、7月か8月の暑すぎる時期に、標高の高いところで涼しいイベントをやる、なんていうアイデアもあります。

**ロジャー** あ、いいですね（笑）。

**野村** 長野県だから高原にアクセスできる。まあ、そこまで行く車が問題なんですけど。そういうときに、バスやEVの選択肢は欲しいですね……。こうやって、やろうとすると、必要なことが見えてくる。

とはいえ、こうした在野の取り組みは、ネットワークとして響く人には響くんですが、大きく現実を動かすにはアカデミズムや国・自治体の制度なども含めたストラクチャーが必要だとは感じています。

ようやく今年度の終わりに「ドキュメントブック」をつくることで、「私たちはこういうことをやっています」と言える自己紹介ができる。そこからオフィシャルな人間関係をもっと広げられたらいいなと思います。



# 〈キャンプ〉

Facebook 交流スペースに寄せられた〈キャンプ〉の取組

## 劇団野らぼう 信州発『ゼロカーボン演劇』



松本市に拠点をおいて活動する劇団野らぼうによる、照明や音響など演劇の上演に際して発生する電力を、すべて太陽光発電によって生成した電力によって賄うプロジェクト。公演中に電力が切れ、暗闇の中において上演するなど、ユニークな手法で舞台と環境配慮をつなぐ試みを実践。2023年度「信州SDGsアワード」も受賞しました。

日時: 2023年4月1日(土)～30日(日)  
会場: あがたの森公園(松本市)  
※名古屋市、調布市、上田市、西会津町でも上演。

脚本 / 演出: 前田斜め  
出演: くずおか由衣、成田明加、深沢豊

(2023年12月18日・成田明加さんの投稿より)

## ネイチャーピアノコンサート



伊那市在住のピアニスト・平澤真希が中心となって結成された「ネイチャーピアノ」プロジェクトでは、標高1700メートルにある入笠の森の中にグランドピアノを持ち込み、ソロコンサートを実施。ピアノの演奏に耳を傾ける中で、川のせせらぎや小鳥のさえずりなどの自然音も耳に入ってくるなど、音楽を通して自然環境に意識を向ける取り組みとなりました。

日時: 2023年7月29日(土)  
会場: 入笠牧場(伊那市)

出演: 平澤真希(ピアノ)

(2023年8月13日・信州アーツカウンシルの投稿より)

## GR19 Presents Fashion show NEO FARM STYLE



木曾地域を中心に活動するアーティストコレクティブ・GR19による、不要になった着物などをリユースして新たなファッション服を制作する宇宙のママプロジェクト。会場となった大桑村など木曾地域の住民の方々が多数モデルとして参加したファッションショー「NEO FARM STYLE」を開催しました。

日時: 2023年9月16日(土)  
会場: 大桑村歴史民俗資料館(大桑村)

OPENING ACT: 今度和やるぞう & JA 木曾小町  
MODELS: 地域のみなさん  
COLLABORATION: pu-ka puka.  
PRODUCED BY GR 19

(2023年8月13日・岩熊力也さんの投稿より)

## DEEP TIME WALK 峰の原高原 [work in progress]



地球が誕生してから46億年の歴史を4.6kmのウォーキングルートに見立て、歩きながら時間の流れを体感するプロジェクト。1mは100万年、1mmは千年を表し、地球で起こった出来事を語り、パフォーマンスで表現し、現在に至るまでの歴史をたどる体験となりました。

日時: 2023年11月5日(日)  
会場: 峰の原高原(須坂市)

語り・ガイド: 山際真奈(アートメディエーター・須坂市地域おこし協議会)、古川広野(星のソムリエ®・須坂市地域おこし協議会)  
パフォーマンス: 鈴木彩華(舞踊家・高山村在住)

(2023年11月9日・Mana Yamaさんの投稿より)

## ちいさがた未来民話研究会 『鳴動』 ～音が伝える災害の警鐘～



上田を中心に活動するちいさがた未来民話研究会では、木曾に伝わる「蛇抜け」民話など、災害にまつわる民話をリサーチし、現代演劇と即興音楽など現代の手法で新たに語り継ぐプロジェクトを実施。ワークショップ参加者とともに、舞台作品を制作し、上演しました。

日時: 2023年10月29日(日)  
会場: ヴィオ・パーク劇場(松本市)

総合演出: 仲田恭子(アートひかり)  
企画・監修: 姫凜子(ちいさがた未来民話研究会)  
出演: 姫凜子、大隅健司、葛目絢一、ワークショップ参加者有志

(2023年10月25日・信州アーツカウンシルの投稿より)

## 女鳥羽川シンポジウム ～これからの水辺をデザインする



松本都市デザイン学習会では、松本市街地を流れる女鳥羽川を市民の暮らしに欠かせない貴重な公共空間として捉え直し、その機能や可能性を広げるためのシンポジウムを実施。女鳥羽川の歴史や自然、街との関わりなどを網羅的に学び、考える時間となりました。

日時: 2024年1月21日(日)  
会場: まつもと市民芸術館(松本市)

パネラー: 山本敦子(アートプロデューサー、コミュニケーションディレクター、エディター)、後藤芳孝(まつもと文化遺産保存活用協議会会長)、倉澤聡(都市計画家)  
コーディネーター: 金井直(信州大学人文学部教授)

(2023年12月15日・金井直さんの投稿より)

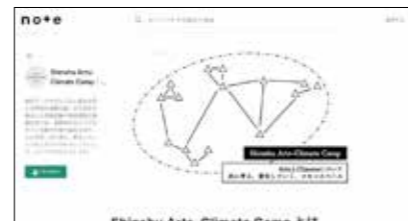
## 報告 / オンラインでの発信



### ▼ Facebook

信州アーツ・クライメート・キャンプの動きを、投稿、シェア、ストーリーズなどで伝えます。事務局から広報や記録の発信を行います。

<https://www.facebook.com/shinshuartsclimatecamp>



### ▼ note

〈会議〉〈キャンプ〉などの情報を発信する他、レポートなど活動の記録を蓄積していきます。

[https://note.com/artscclimate\\_camp](https://note.com/artscclimate_camp)



### ▼ Instagram

信州アーツ・クライメート・キャンプの動きを、投稿やストーリーズ、Liveなどで伝えます。事務局から広報や記録の発信を行います。

[https://www.instagram.com/shinshu\\_artscclimate\\_camp/](https://www.instagram.com/shinshu_artscclimate_camp/)



### ▼ Facebook 交流スペース

参加者が自由に情報共有をする場です。Facebookのアカウントをお持ちの方は皆さん登録、投稿ができる公開グループです。

<https://www.facebook.com/groups/shinshu.arts.climate.camp>

## 気候とアートのダイアログ



この番組は、文化芸術の視点から気候変動や地球環境の課題を考える、「Shinshu Arts-Climate Camp」がお届けするPodcastです。

Shinshu Arts-Climate Camp は、文化芸術の視点から気候変動や地球環境の課題を見つめ、信州・長野県において行われている様々な取り組みを知り、取り組んでいる人に学び、共に考え、変化していく、コモンスペースをつくっていかうというプロジェクトです。信州アーツカウンシル（一般財団法人長野県文化振興事業団）と信州大学人文学部が協働して運営しています。

Apple Podcast



Spotify



## #0 対談：金井直+ロジャー・マクドナルド



イントロダクションとして、「Shinshu Arts-Climate Camp」のガイダンス（信州アーツカウンシル・野村政之より）および、信州大学人文学部教授で近現代彫刻史を研究する金井直さんと、インディペンデントキュレーターのかたわら佐久市の多津衛民藝館の理事も務めるロジャー・マクドナルドさんの対談を、前後半の2回にわたってお届けします。

## sprout! (east nagano organic action)



「気候とアートのダイアログ」は、長野県東信地区でサステイナブルな活動をしている人を紹介しているポッドキャスト「sprout!」を運営している、長野県小海町の一人出版社「八燿堂」の岡澤浩太郎さんが収録しています。  
<https://note.com/mahora/m/mb905aec9073d>

## #1 「奏の森」 杉浦歩実さん（上伊那郡中川村）



上伊那郡中川村で、荒廃した森林を、自分たちで「みんなでビルド」して整備し、森と人が心地よくつながる里山のアート拠点「奏の森」を2018年から開始している、杉浦歩実さんのインタビュー。



**杉浦歩実さん**  
2002年より飯田市で野外音楽フェスをオーガナイズ。2008年にNPO法人F.O.P.を立ち上げ、伊那谷の自然環境文化を次世代に継承する、環境活動と音楽や芸術を融合した活動を続けています。森と人がかかわりながら、循環型の暮らしや生きる力を育む活動を展開中です。<https://fop-jp.net/>

## #2 「アースデイ in 佐久」 田村至さん（佐久市）



毎年4月に世界中で開催されている、地球環境を考える市民のイベント「アースデイ」の佐久バージョン、「アースデイ in 佐久」の実行委員長を務める、田村至さんのインタビュー。



**田村至さん**  
工務店を営むかたわら、『旅人の祭り』などの音楽フェスティバルをオーガナイズ。2004年に「アースデイ in 佐久」に参加し、2007年から実行委員長を務めています。  
<http://earthday.asama-de.com/>

## #3 「しなの長沼・お屋敷保存会」 天野一步さん・太田秋夫さん（長野市）



長野市長沼で築200年以上の古民家「米澤邸」の修復保存や、新しい町づくりに取り組んでいる、一般社団法人しなの長沼・お屋敷保存会の会長・天野一步さんと、事務局長・太田秋夫さんのインタビュー。



**一般社団法人しなの長沼・お屋敷保存会**  
長野市長沼地域に古くからある古民家や土蔵などの利活用を通じて、2019年の台風19号による水害後のコミュニティの再生と地域内外の交流を図ることを目的として設立。  
<https://naganumaoyashiki.org/>

## #4 POW JAPAN (Protect Our Winters Japan) 高田翔太郎さん（大町・白馬エリア）



長野県の白馬エリアでスキーやスノーボードを地球温暖化から守る活動をしている環境保護団体、一般社団法人 Protect Our Winter Japanの事務局長・高田翔太郎さんのインタビュー。



**高田翔太郎さん**  
北海道出身、長野県大町市在住。学生時代からパタゴニアに勤務し、30代で退職した後にサステイナブルな生活のヒントを求めてニュージーランドやタスマニアを旅する。帰国後にPOW Japanの立ち上げにかかわり、現在は事務局長を務める。  
<https://protectourwinters.jp/>

野村政之

(信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)

この1年で最も印象深く、この事業をやってよかったと思うのは、通常行うような文化事業では繋がることのない様々な方が沢山参加してくださり、学び合い、多くの新たな出逢いを得られたことです。

それと同時に、この200年ほど、産業革命以降の人間活動による温室効果ガスの排出が、目下の気候変動・気候危機の要因になっていると考えられる状況から、これから100年200年先の人間の知や生命のゆくえを考えると、私たち現役世代が教えられてきた近現代（特にこの70年ほど、冷戦期以降）の価値観をしっかりと見つめ直し、自分たちの思考と行動で改めていく必要があると思います。

その意味で、Shinshu Art-Climate Campは、単に文化芸術の応用/社会連携として捉えられるべきものではなく、人類と文化芸術の関係を100年単位で、本腰を入れて更新していく試みであり、その「ものがたり」の序章がこの記録集だと思います。

ご協力くださったすべての皆様に、心より感謝を申し上げます。

細田恵莉

(長野県地球温暖化防止活動推進員)

地球温暖化による気候変動から気候危機へ。気候危機というワードは、ここ5年程前から温暖化の専門家から使われ始めたワードです。そして現在は地球温暖化から地球沸騰化へと世界的に移行が認められた事がIPCC(気候変動に関する政府間パネル)より発表されています。私達が住む地球は高度成長期より急速に人為的な地球温暖化が進行し、現在深刻な状況下にある事は疑う余地がない、と言われていています。その状況下で今出来る事は何か?! 今回、信州アーツカウンシル/地域フェロー(アシスタント・コーディネーター)としても『アートと気候危機』の取り組みに同行させて頂きました。

気候変動を題材とした作品や、県内の美術館の取り組み、そして各地のアーティストの温暖化への取り組みや実例、対談イベント等に同行させて頂き、特に海外のアート界と日本のアート界との環境に対する意識の差を感じると同時に、アートという“造り手から見ると人への伝えるアクション”の可能性の大きさも感じる事が出来ました。

このドキュメントブックが、これからの『アートと気候危機』の課題をより深く、強く結びつけて行くプロローグとしての役割を果たしてくれるのではないかと感じています。そしてドキュメントブックを手にとってくださる皆様が身近で楽しみながら出来るゼロカーボンアクションへと繋がって行く事を祈り、今回この機会を与えて下さった、信州アーツカウンシルの皆さま、ご一緒頂きました編集チームの皆さまに深く感謝申し上げます。

藤澤智徳

(信州アーツカウンシル コーディネーター)

運営の立場から、全4回の〈会議〉のほか、交流スペースに寄せられた様々な〈キャンプ〉(イベント)、またPodcastの収録などに立ち会うことができました。事業を始めた当初は、“アート”と“気候変動”がどう結びつくのか皆目検討がつかず、戸惑いながら、手あたり次第に事業を進めていました。この戸惑いは、私だけでなく、〈会議〉に参加した方々も少なからず感じているようでした。

気候変動に対して、アートの立場から何をすべきなのか、どういうアクションが求められているのか、そもそも私たちが抱えているこの問いかけそのものが正しいものなのか。いま、この1年間の取組を振り返ると、この戸惑いこそが、“アート”と“気候変動”を結びつける重要な要素だったように感じます。戸惑うからこそ、私たちは学び、考え、想像し、自分なりの答えを導きだそうとする。この思考の過程は、私たちが普段“アート”に向き合う中で起こっていることでもあり、そして、“気候変動”という、まさにいま、私たちの眼前に迫り来る課題をめぐる、地球規模で起こっていることでもあります。このドキュメントブックに収められた膨大な量の言葉の数々はその証左と言えるかもしれません。

中野多恵

(信州大学大学院修士課程1年)

私は信州大学大学院に通う傍ら、この編集チームの一員として〈会議〉と座談会の文字起こしや編集を担当させていただきました。語られたままを文字起こししたテキストの総字数は、ここに収録されたその10倍以上あります。紙幅の都合で泣く泣くカットした言葉は数え切れません。

〈会議〉では一年間、「気候変動」と「アート」という見繋がりそうにないテーマを囲み、アーティストや研究者、実践者など様々な立場から意見が交わされました。一筋縄ではいかない議論に、あの手この手でアプローチする登壇者たちの言葉に、参加者もじゅくじゅくと耳を傾ける時間。〈会議〉の後日、大学の友人たちに「あのイベントでどこが印象的だった?」と尋ねると、それぞれ違う答えを聞かせてくれたことをよく覚えています。

今、2050年のカーボンニュートラル達成が目指されています。私や友人たちにとって2050年はちょうど50歳になる年なので、まさに働き盛りの20、30、40代をカーボンニュートラルの取り組みと共に生きることになるのでしょうか。この記録集が、これから長く「気候変動」と「アート」に携わる人々のヒントとなる一冊になることを祈っています。

最後にこの場を借りて、Shinshu Arts-Climate Campの輪に加わり、支えてくださった全ての方に、感謝申し上げます。

# Shinshu Arts-Climate Camp

■案内人  
金井直 (信州大学人文学部 教授)  
ロジャー・マクドナルド (インディペンデント・キュレーター/NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ ディレクター)

■コーディネーター/事務局  
信州アーツカウンシル (津村卓、峯村高広、宮本隆希、保谷有美、野村政之、伊藤羊子、佐久間圭子、藤澤智徳、小野佳奈)  
信州大学 (大司百花、中野多恵)

■配信・記録映像  
安德希仁

■主催  
信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)、信州大学人文学部、長野県  
令和5年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業



## ともにつくる 気候 × アート のものがたり

### Shinshu Arts-Climate Camp Document Book 2023-2024

2024年3月22日発行

■企画・監修 信州アーツカウンシル (一般財団法人長野県文化振興事業団)

■編集 野村政之 (信州アーツカウンシル ゼネラルコーディネーター)  
藤澤智徳 (信州アーツカウンシル コーディネーター)  
細田恵莉 (信州アーツカウンシル 地域フェロー)  
中野多恵 (信州大学大学院修士課程1年)

■編集デザイン 村上圭一 (CBP)  
■表紙イラストレーション アイコ美術工芸社  
■写真 藤澤智徳 (その他は写真に記載)


■発行 一般財団法人長野県文化振興事業団 アーツカウンシル推進局  
長野県長野市若里1-1-4 県立長野図書館1階

■WEB [https://note.com/artscclimate\\_camp](https://note.com/artscclimate_camp)

© Nagano Prefectural Cultural Promotion Agency. All rights reserved.  
Printed in Japan

著作権法上の例外を除き、本書の全部または一部を無断で複製複製(コピー)することは、禁じられています。



 信州アートカウンシル

 信州大学 | 人文学部  
SHINSHU UNIVERSITY